

—高松市立林小学校校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

林宗高遺跡 —第4次調査—

2019年3月

高松市教育委員会





例言

- 1 本書は高松市立林小学校校舎増築建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、林宗高遺跡を収録した。
- 2 発掘調査及び調査期間、調査面積は以下のとおりである。

調査地 高松市林町 高松市立林小学校内及び新設道路部分
調査期間 発掘調査：平成28年8月1日～10月7日
平成28年11月14日～平成29年1月27日
工事立会：平成29年4月5日～7月27日
調査面積 2750㎡
- 3 現地調査は及び整理作業は地方自治法第180条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門職員 渡邊誠・香川将慶 同課非常勤嘱託職員 杉原賢治が担当した。整理作業は遺構図整理を渡邊、遺物整理を香川が担当した。
- 4 本書の執筆は主に香川が担当し、渡邊も一部担当した。渡邊担当分については、文末に表記した。なお、編集は香川が担当した。
- 5 本調査に関連して以下の業務を委託発注により実施した。

写真測量：(株)四航コンサルタント、遺物写真：西大寺フォト、保存処理業務：(株)イビソク
- 6 発掘調査と整理作業を実施するにあたり、下記の関係機関並びに方々から御教示及び御協力を賜り、記して厚く謝意を表すものである。

高松市立林小学校、大熊尊氏
- 7 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中の方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系に従った。
- 8 出土遺物の年代比定や各様相が示す年代は下記文献を参考にした。

弥生土器～古式土師器：大久保徹也 1991「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ-下川津遺跡-』
香川県教育委員会
・下川津Ⅲ古相→弥生時代後期後半
・下川津Ⅴ式新相→弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
・下川津Ⅵ式→古墳時代前期初頭

須恵器：大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし-陶色の須恵器』
土師質土器：片桐 孝浩 1992「考察-古代から中世にかけての土器様相-」『中小河川大東川改修工事(津ノ郷橋～博光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-川津元結木遺跡-』
香川県埋蔵文化財センター
・川津Ⅱ-1～3→11世紀前半～11世紀末
・川津Ⅱ-4～6→12世紀代
・川津Ⅱ-7～9→13世紀代

佐藤竜馬 1995 「總括」『国分寺桶井遺跡』香川県埋蔵文化財センター

・桶井Ⅰ→13世紀中頃～14世紀初頃

・桶井Ⅱ-1→14世紀前半

・桶井Ⅱ-2→14世紀中頃～後期

陶磁器:松本和彦・陶山仁美 2003「第4節西の丸地区出土の陶磁器について」『高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』
香川県教育委員会

高松城様相2→17世紀前半(1620～1630年代)

高松城様相8→19世紀前半～中頃(1821年～1872年)

- 10 時期毎に土器の呼称を選別しており、以下のように呼称する。
古式土師器→古墳時代初頭～前期末頃 土師器→古墳時代中期～古代末 土師質土器→古代末以降
- 11 文字瓦等の文字表記は右記のようである。] [文字の続きあり □ 記録しているが判読不明
- 12 遺構の縮尺はスケール値の指定がない限り、1/50である。出土遺物の実測図は瓦類1/5、文字瓦の押印部分は原寸、土器1/4、石器1/2、金属器1/2で図化している。
- 13 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査日誌抄	1
第3節 林小学校児童による発掘調査体験と現場見学	2
第2章 地理的環境・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	5
第1節 既往の調査成果	5
第2節 調査区の設定と概要	5
第3節 A調査区基本土層	6
第4節 A-1調査区の遺構・遺物	11
第5節 A-2調査区の遺構・遺物	40
第6節 A-3調査区の遺構・遺物	60
第7節 B調査区基本土層	61
第8節 B-1調査区の遺構・遺物	61
第9節 B-2調査区の遺構・遺物	86
第10節 工事立会時の遺構・遺物	116
第4章 考察	121
第1節 主な遺構・遺物	121
第2節 林宗高遺跡の旧地形と土地利用について	123

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第37図 SD2002平・断面図及び出土遺物	45
第2図 周辺の遺跡位置図 (S-1/10000)	4	第38図 SK2001～2007平・断面図及び出土遺物	46
第3図 林宗高遺跡調査区配置図	5	第39図 SK2009～2015平・断面図及び出土遺物	47
第4図 A調査区基本土層①	7	第40図 SK2016～2024平・断面図及び出土遺物	48
第5図 A調査区基本土層②	8	第41図 SK2025～2029・2031・2032・2036・2037 平・断面図及び出土遺物	49
第6図 A-1遺構配置図	9	第42図 SK2038～2044平・断面図及び出土遺物	50
第7図 SE1001平・断面図及び出土遺物	12	第43図 SK2045・2048～2051 平・断面図及び出土遺物	51
第8図 SD1001～1003・1005 平・断面図及び出土遺物	13	第44図 A-2SP平・断面図及び出土遺物①	52
第9図 SD1004平・断面図及び出土遺物	14	第45図 A-2SP平・断面図及び出土遺物②	53
第10図 SK1002～1004・SP1006 平・断面図及び出土遺物	15	第46図 A-2平・断面図及び出土遺物③	55
第11図 SK1007～1010平・断面図及び出土遺物	16	第47図 SX2001平・断面図	57
第12図 SK1011～1014・1017・1018 平・断面図及び出土遺物	17	第48図 SX2001出土遺物	58
第13図 SK1019平・断面図及び出土遺物	18	第49図 SX2002・2003平・断面図及び出土遺物	59
第14図 SK1020・1021平・断面図及び出土遺物	18	第50図 A-2遺構検出時・重機掘削時出土遺物	59
第15図 SK1022・1023平・断面図及び出土遺物	19	第51図 A-3出土遺物・A調査区その他の遺物	60
第16図 SK1025・1026・1033 平・断面図及び出土遺物	20	第52図 B区土層断面図①	62
第17図 SK1030・1031・1034～1040 平・断面図及び出土遺物	21	第53図 B区土層断面図②	63
第18図 SK1041平・断面図及び出土遺物	23	第54図 B区土層断面図③	64
第19図 SK1042～1044・1046 平・断面図及び出土遺物	24	第55図 B-1遺構配置図	65
第20図 A-1SP平・断面図①	25	第56図 SH1034・SD1040・SK1048・SP1045 平・断面図及び出土遺物	67
第21図 A-1SP平・断面図及び出土遺物②	27	第57図 SH1050平・断面図	69
第22図 A-1SP平・断面図及び出土遺物③	28	第58図 SH1050出土遺物	70
第23図 SX1001平・断面図	30	第59図 SH1070平・断面図	71
第24図 SX1001出土遺物①	31	第60図 SH1070出土遺物	72
第25図 SX1001出土遺物②	32	第61図 SB1018平・断面図及び出土遺物	74
第26図 SX1001出土遺物③	33	第62図 SB1041平・断面図	75
第27図 SX1001出土遺物④	34	第63図 SA1042・1074平・断面図及び出土遺物	76
第28図 SX1001出土遺物⑤	35	第64図 SD1002・1003・1005・1007・1010 平・断面図及び出土遺物	77
第29図 SX1002～1004出土遺物	35	第65図 B-1SK平・断面図及び出土遺物	79
第30図 A-1遺構検出時出土遺物	37	第66図 B-1SP平・断面図及び出土遺物①	81
第31図 遺物包含層(第2層)出土遺物①	37	第67図 B-1SP平・断面図及び出土遺物②	83
第32図 遺物包含層(第2層)出土遺物②	38	第68図 B-1遺物包含層・遺構検出時・ 重機掘削時出土遺物	85
第33図 遺物包含層(第3層)出土遺物	39	第69図 B-2遺構配置図	87
第34図 A-2・A-3遺構配置図	41	第70図 SH1100・1121平・断面図	89
第35図 SD2001平・断面図	43	第71図 SH1100出土遺物①	90
第36図 SD2001出土遺物	44	第72図 SH1100出土遺物②	91
		第73図 SH1101平・断面図	92

第74図 SH1115 平・断面図	93	第88図 SH1161・1166 平・断面図及び出土遺物	106
第75図 SH1115 関連ピット・土坑平・断面図 及び出土遺物	94	第89図 SH1174・SA1173 平・断面図 及び出土遺物	107
第76図 SH1121 出土遺物	94	第90図 SB1202 平・断面図	108
第77図 SH1130・SX1162 平・断面図及び出土遺物	95	第91図 SD1131・1137 平・断面図	109
第78図 SH1140 平・断面図	96	第92図 B-2SK 平・断面図及び出土遺物	111
第79図 SH1140 出土遺物	97	第93図 B-2SP 平・断面図及び出土遺物①	113
第80図 SH1141 平・断面図	98	第94図 B-2SP 平・断面図及び出土遺物②	114
第81図 SH1141 断面図	99	第95図 B-2 遺構検出時出土遺物	115
第82図 SH1141 出土遺物	100	第96図 工事立会地遺構配置図及び平面図	117
第83図 SH1146 平・断面図	101	第97図 工事立会遺構断面図	119
第84図 SH1146 出土遺物	102	第98図 工事立会出土遺物	120
第85図 SH1147 平・断面図	103	第99図 B 調査区竪穴建物の前後関係と 建物構造の変遷	122
第86図 SH1147 出土遺物	104	第100図 林宗高遺跡周辺の旧地形	124
第87図 SH1160 平・断面図及び出土遺物	105		

挿写真目次

PL.1 林宗高遺跡の説明	PL.3 発掘体験の様子①
PL.2 出土遺物の解説	PL.4 発掘体験の様子②

挿表目次

遺物観察表	126
-------	-----

巻頭写真図版

巻頭写真図版1 弥生土器集合写真

巻頭写真図版2 SX1001 出土近代瓦

写真図版

写真図版1

A-1 調査時西側調査時全景

A-1 調査時東側調査時全景

写真図版2

A 調査区北側電線間断面 A-1SE1001 完掘状況

写真図版3

A-1SE1001 構築状況断面状況 A-1SE1001 断面状況

A-1SK1004 完掘状況 A-1SK1006 完掘状況

A-1SK1013 完掘状況

写真図版4

A-1SK1015 完掘状況 A-1SK1017 断面状況

A-1SK1023 遺物出土状況

写真図版5

A-1SK1035 完掘状況 A-1SK1039 遺物出土状況

写真図版6

A-1SK1041 断面状況 A-1SX1001 瓦出土状況

A-1SX1001 断面状況

写真図版7

B-1 調査時全景西側 B-1 調査時全景東側

写真図版8

B 調査区西壁土層断面 B-1SH1034 東側完掘状況

B-1SH1050 検出状況

写真図版9

B-1SH1050 遺物出土状況 B-1SH1050 炉跡断面状況

B-1SH1070 断面状況 B-1SH1070 周壁溝内柱穴

写真図版10

B-1SH1070 断面状況 B-1SA1074P3 完掘状況

B-2SH1100 断面状況

写真図版 11

B-2 調査時全景西側 B-2 調査時全景東側

写真図版 12

B-2SH1100 遺物出土状況

B-2SH1121 遺物出土状況 B-2SH1121 断面状況

B-2SH1130・SX1162 完掘状況

写真図版 13

B-2SH1140・SH1141 床面検出状況

B-2SH1140 遺物出土状況

B-2SH1141 カマド遺物出土状況

写真図版 14

B-2SH1140 中央土坑検出 B-2SH1141 カマド断面

B-2SH1141 遺物出土状況 B-2SH1146P2 完掘状況

B-2SH1147P2 完掘状況 B-2SH1145P3 検出状況

B-2SH1147P3 根石確認状況

B-2SH1147P3 完掘状況

写真図版 15

SH1147・SH1146 完掘状況

B-2SH1145P1 根石検出状況

B-1SK1022 完掘状況 B-1SP1078 遺物出土状況

B-2SB1202-SP1171 完掘状況

写真図版 16

A-1SX1001 出土近代瓦

A-1SX1003・1004 出土陶磁器

写真図版 17

弥生土器集合写真 B-2SH1141 出土遺物

写真図版 18

弥生土器甕・壺集合写真 弥生土器甕①

弥生土器甕②

写真図版 19

弥生土器甕③ 弥生土器甕④ 弥生土器甕⑤

弥生土器甕⑥

写真図版 20

弥生土器鉢・手捏ね土器集合写真

弥生土器鉢① 弥生土器鉢② 弥生土器鉢③

弥生土器鉢④

写真図版 21

弥生土器鉢⑤ 弥生土器鉢⑥ 弥生土器鉢⑦

弥生土器鉢⑧ 弥生土器鉢⑨ 弥生土器鉢⑩

弥生土器高杯①

写真図版 22

弥生土器壺・高杯集合写真 弥生土器高杯②

古式土師器二重口縁壺 弥生土器吉備系甕

弥生土器手捏ね土器

写真図版 23

石製品集合写真① 石製品集合写真②

写真図版 24

石製品① 石臼 スクレイバー 磨製石斧

叩き石① 叩き石② 叩き石③ 叩き石④

写真図版 25

叩き石⑤ 叩き石⑥ すり石① すり石②

大型石庖丁 石鎌・石核 出土粘土塊

写真図版 26

丸瓦凸面 丸瓦凹面

写真図版 27

A-1SX1001 軒平瓦① A-1SX1001 軒平瓦②

A-1SX1001 軒平瓦③ A-1SX1001 軒平瓦④

A-1SX1003 軒平瓦⑤ A-1SX1003 軒平瓦⑥

A-1SX1001 軒棧瓦① A-1SX1001 軒棧瓦②

写真図版 28

A-1SX1001 軒棧瓦③ A-1SX1001 軒丸瓦①

A-1SX1003 軒丸瓦② A-1SX1001 文字瓦「前田」

A-1SX1001 文字瓦「林善」①

A-1SX1001 文字瓦「林善」②

A-1SX1001 文字瓦「宮」 A-1 陶器印字「岐 346」

写真図版 29

古代末～中世期の土器 A-1SX1001 出土硯

緑釉陶器 A-1SX1001 寛永通宝?

A-1SX1001 金属玩具 A-2SD2001 出土人骨

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

当事業地は本市教育委員会（以下市教委）教育局総務課（以下総務課）が当該地で計画する高松市立林小学校校舎増築及び運動場並びに市道整備予定地にあたる。当該地は林宗高遺跡に隣接していることから、本市文化財課が着工に先立ち平成28年4月5日に校舎増設部分の試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財を確認したため、香川県教育委員会（以下県教委）に報告し、周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」の範囲変更を行った。平成29年度に校舎建築工事に着工する予定であったため、平成28年6月16日付けで埋蔵文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、市教委から県教委へ進達したところ、6月29日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受け、文化財課は総務課と協議し、校舎増築部分の発掘調査を実施の上、記録保存を行うことで合意したため、平成28年8月1日～10月7日にかけて発掘調査を実施した。

また、運動場及び市道整備部分は平成28年5月2日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財を確認したため、県教委に報告し、周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」として追加登録された。平成28年10月13日付けで埋蔵文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、市教委から県教委へ進達したところ、10月21日付けで市道部分について「発掘調査」、掘削幅が狭小な市道部分と運動場について「工事立会」の行政指導があった。これを受け、文化財課は総務課と協議し、市道部分の発掘調査を実施の上、記録保存を行うことで合意したため、平成28年11月14日～平成29年1月27日にかけて発掘調査を実施した。また、工事立会は断続的に平成29年4月5日～7月27日まで実施した。

第2節 調査日誌抄

平成28年8月1日	A区調査区の準備工。
8月2日	A調査区西側重機掘削。
8月24日	A調査区西側1面目調査完了。引き続きA調査区2面目重機掘削。
9月3日	A調査区西側調査終了。埋戻し。
9月6日	A調査区東側重機掘削。
9月17日	A調査区東側1面目調査完了。引き続きA調査区2面目重機掘削。
9月21日	6年生発掘体験学習。
9月23日	5年生発掘体験学習。
10月7日	埋戻し完了。A調査区調査終了。
11月14日	B調査区の準備工。
11月16日	1面目重機掘削開始。
12月9日	1面目調査完了。
12月12日	2面目重機掘削開始。
平成29年1月27日	埋戻し完了。B区調査区調査完了。
4月5日	工事立会開始。
7月27日	工事立会完了。当該事業に伴う埋蔵文化財の調査終了。

平成29年4月1日より発掘調査及び工事立会に伴う、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理、保存処理等を行い、平成31年3月末にこれらの整理作業を終了し、発掘調査報告書を刊行するに至った。

第3節 林小学校児童による発掘調査体験と現地見学

発掘調査地は小学校の校庭や小学校の近隣で実施したことから、調査開始時より児童や学校職員から発掘調査への関心が高かった。また、本市としても発掘調査の様子を公開することや埋蔵文化財の周知や地域の歴史教育の発展に寄与することが望ましいと考え、小学校と協議を行い、児童を対象とした発掘調査体験と現地見学会を実施した。

日程：平成28年9月21日 6年生による発掘調査体験
9月23日 5年生による発掘調査体験
平成29年1月18日 4・5年生による現地見学会

6年生による発掘体験は校庭内の調査区で実施し、クラスごとに2回に分けて実施した。遺物包含層中で、遺物が集中する地点で土器の検出を行った。作業に当たり、文化財課の専門員から発掘調査の方法や当該地の遺跡の内容について事前に説明し、作業中も随時指導を行った。また、既に出土した土器を展示し、小学生が土器に触れられる機会を設けた。4・5年生の現地見学会は今回の調査内容や校庭内で行った調査成果を通じて明らかになったことについて児童に説明を行った。

発掘調査体験は45分と短時間であったが、今回の発掘調査体験等を通じ、児童が地域の歴史に関心を持ってもらえる機会を提供でき、大変有意義な機会であったと考えられる。今後も児童を始め、地域社会に向けた教育普及活動を実施していき、地域の文化財の発展に寄与できるよう努めたい。



PL 1 林宗高遺跡の説明



PL 2 出土遺物の展示



PL 3 発掘体験の様子①



PL 4 発掘体験の様子②

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

林宗高遺跡が位置する高松平野は讃岐平野の一部であり、瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置し、概ね高松市の平野部を指す（第1図）。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島や立石山塊、南西中央部に石清尾山や浄願寺山、西部に五色台、六ツ目山、堂山の山系が連なる。いずれの山地も讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で20～300mの低い山地である。また、北方の瀬戸内海には男木島や女木島等の島々も市域に含み、対岸は岡山県岡山市や玉野市、瀬戸内市が対峙する。

高松平野は南の讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存する春日川以西は香東川による沖積平野ともいわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線的に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前は現在の高松市香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を北東流するもう一本の主流路が存在した。この旧河川は現在では水田地帯及び市街地の地下に埋設しているが、空中写真等により、林地区から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、旧香東川の流路は現在の御坊川として今でもその名残をとどめている。

西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているおり、平野への流路口で穏やかな傾斜を持つ扇状地系の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は潤れ川になることが多く、早くからため池を構築して水不足を解消してきた。そのため、山間の洪積台地洪積層の分かれ目に多くのため池が分布する。

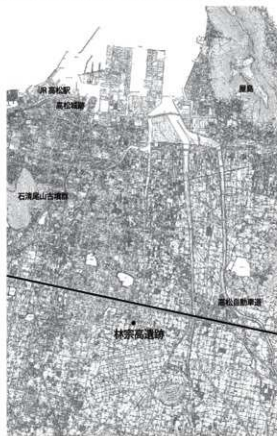
第2節 歴史的環境

はじめに、本遺跡が位置する歴史的環境について確認しておきたい。なお、各時代の遺跡やその概要については『林宗高遺跡』（高松市教育委員会2010年、2012年、2014年）を参照いただきたい（第2図）。

高松平野で旧石器時代の痕跡は少なく、雨山南遺跡、中間西井坪遺跡、香西南西打遺跡等で確認できるが、高松平野中心部ではまだ検出例がない。

縄文時代の遺跡も稀少で、平野部で増加するのは縄文時代晩期以降である。主な遺跡として居石遺跡、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林・坊城遺跡等が挙げられる。

弥生時代に入ると遺跡数が急増し、高松平野全域で確認できるようになる。この時期の遺跡の形成状況を見ると弥生時代前期～中期前葉まで連続した居住が確認されているものの、その後、継続する集落が少ない点特徴である。この時期は段丘化によって平野部の堆積が一気に進行する傾向が指摘されており、こうした自然環境の変化が集落の継続性に作用したと考えら



第1図 遺跡位置図

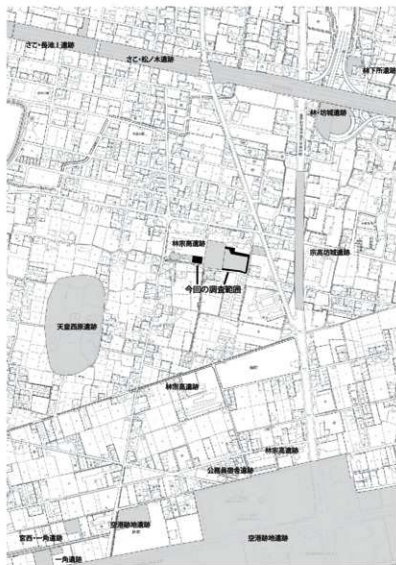
れる。上記の内容に即する遺跡としてさこ・長池遺跡が挙げられる。中期中葉になると上天神遺跡等で居住の痕跡が確認される。中期後半～後期前半にかけては太田原高洲遺跡、太田下・須川遺跡等で集落が確認できる。後期後半には空港跡地遺跡周辺で集落の形成が開始され、宮西・一角遺跡や多肥宮尻遺跡等が挙げられる。この時期の集落は弥生時代終末期から古墳時代前期前半まで続くものがある。弥生時代後期からはより集落の形成が活発になり広範囲でこの時期の遺跡が確認できる。代表的な例として空港跡地遺跡や上天神遺跡等が挙げられる。また、本調査でも弥生時代後期からの遺構・遺物を確認できた。

古墳時代前期は弥生時代後期から続く遺跡が多く、上記の空港跡地遺跡や上天神遺跡でも継続して確認できる。林宗高遺跡においても同様である。中期になると平野部で集落が確認できる遺跡は少なくなるものの、本遺跡では古墳時代中期末頃の遺構・遺物を検出した。古墳時代後期から飛鳥時代にかけては高松平野南部の萩前・一本木遺跡で大規模な集落が営まれている。

古墳時代後期から古代にかけてはそれまで集落の営まれていた微高地が埋没したとされ、それに伴い集落の断絶と形成が確認されている。平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、平野部のほぼ全面に南北線が東に約9°～11°傾く条里地割が分布する。この条里地割に沿った溝や建物跡が松縄下所遺跡、空港跡地遺跡等で検出されている。また、周辺の拝師庵寺をはじめ、田国分寺町で讃岐国分僧寺・尼寺等の古代寺院が多く造営されるようになる。

中世以降になると弘福寺領讃岐国山田郡田国北地区比定地等で旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画水田が検出されている。その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期までに現在の地形環境がほぼ形成されたと推測されている。当該時期の遺跡は空港跡地遺跡で大規模な集落が営まれたほか、東山崎・水田遺跡、川南・西遺跡等が確認されている。

近世になると天正16年(1588年)に生駒親正によって高松城の築城が開始される。その後、生駒騒動が起り、生駒家は出羽国矢島(秋田県由利本荘市)に移され、水戸徳川家の長子である松平頼重が東讃を治めることになった。



第2図 周辺の遺跡位置図 (S=1/10000)

第3章 調査の成果

第1節 既往の調査成果

林宗高遺跡は高松市立林小学校校舎増築工事に伴い、これまで3次にわたる発掘調査を実施していることからこれらの調査概要をまとめておきたい(第3図)。

第1次調査は、校舎と渡り廊下部分の調査を行った。弥生時代後期後葉と古代を中心とする2面の遺構面を検出した。弥生時代後期後葉では自然河川を検出し、埋土から大量の弥生土器とともに、石鏃や土鏃等も出土した。古代では掘立柱建物跡や溝を検出し、須臾器や土師器のほか、緑釉陶器も出土した。

第2次調査は放課後児童クラブ建設工事に伴い発掘調査を実施した。主に弥生時代を中心とするピットを検出し、遺物包含層からは多量の弥生土器が出土した。

第3次調査は校舎建設工事に伴い、第1次調査の東側で発掘調査を実施した。弥生時代のピットや溝、近世以降の土坑を検出し、弥生土器や石鏃、土師器、陶磁器等が出土した。

3次にわたる調査で主に弥生時代や古代、近世の遺構・遺物を検出している。今回の発掘調査でも同時期の遺構・遺物を検出し、連続した集落の広がりがうかがえる。特に弥生時代後期に関する遺構や遺物はいずれの調査でも検出され、当該地周辺で弥生時代後期に集落が形成された可能性が高い。

第2節 調査区の設定と概要

本調査対象範囲は高松市立林小学校の校庭内に建設予定の新校舎とグラウンド幅幅に伴い新設される市道部分である。調査区は新校舎部分をA調査区とし、A調査区から北東に約100m離れた市道部分をB調査区とした。また、A調査区で3面、B調査区で2面にわたって調査を実施したことから各区と遺構面を、A-1・A-2・A-3、B-1・B-2と呼称する。遺構番号は各調査区の遺構面ごとに設定し、基本的には1面目をSK10 ■■、2面目をSK20 ■■のように記す。また、考察や調査区を超えての遺構の説明をする場合や考察において、A-SK10 ■■、B-SK20 ■■のように調査区名を冒頭に付す。なお、遺構番号は遺物が出土したものだけに付与している。A調査区は遺構の種別ごとに番号を付



第3図 林宗高遺跡調査区配置図

けているが、B調査区においては種別を問わず、通し番号で呼称している。遺構番号には欠番があり、各調査区の説明で述べる。遺物の番号は基本的に遺構毎にまとめた上で出土層位や詳細箇所が特定できるものを本文並びに遺物観察表にまとめている。一部、遺物番号を付与し、観察表のみに掲載した遺物がある。

発掘調査は重機による遺構面までの掘削と人力による遺構の掘削を基本として行った。記録は調査区周辺に設置した基準点を基に、写真測量と個別図面の作成によって行った。写真撮影は35mmフィルムカメラとデジタルカメラを用いて記録を行った。

A調査区の発掘調査の手順は、廃土を考慮し、調査区を2分割し、西方から東方へと、反転し実施した。また、調査区西端、南端、東側に電気線や水道管が調査区内を横断していたため三又に分かれ調査を行ったため、当該範囲は調査を行っていない。

今回の調査では総計で掘立柱建物跡3棟、竪穴建物跡19棟、柵列3列、井戸1基、溝24条、土坑135基、ピット254基、性格不明遺構6基を検出した。主な出土遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、緑釉陶器、陶器、石製品、鉄製品である。主な遺構・遺物の年代は弥生時代後期後半～古墳時代初頭、古墳時代中期、古代、中世、近世、近代である。遺構の分布はA調査区では溝跡、土坑、ピット等を多数検出した。中でも、近代のものの中には、林小学校の歴史を伝えるものと考えられる瓦を多量に廃棄した土坑を検出した。B調査区では竪穴建物跡や土坑、ピット等を多数検出し、当時の集落の中心地と考えられる。

第3節 A調査区基本土層

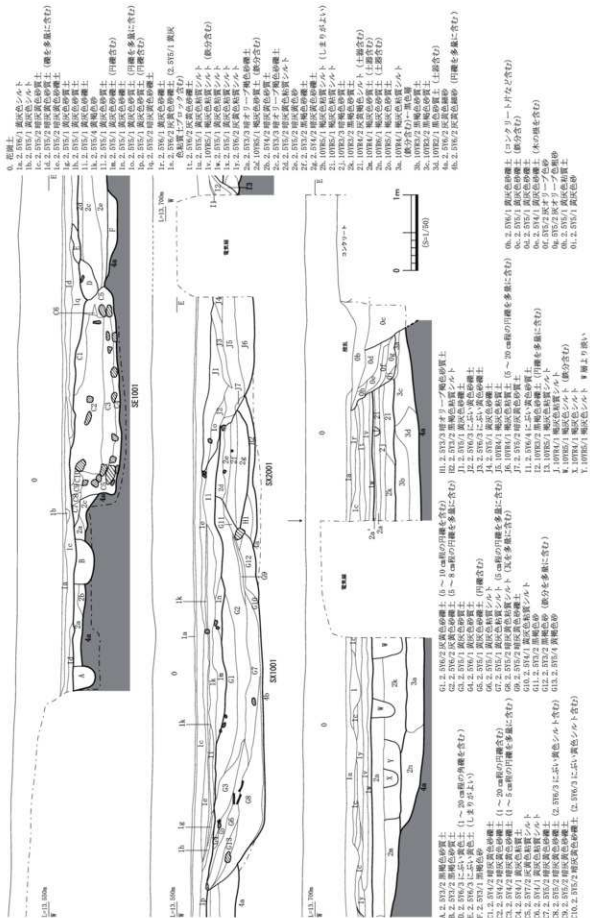
A調査区では、表土は林小学校運動場の整備に伴う整地土（花崗土：第0層）の下層に、近代以前のものが堆積している。旧地形及び主に近世以降の遺構の累積により、面的な遺構面の把握が困難である点もあるが、基本層序は次のとおりである。

第1層は、林小学校の初期の整備に伴う造成土（第1層：1a～1y）で黄灰色の砂質、粘質土のものが認められる。第2層（2a～2m）は暗灰黄色～褐灰色を主体とした砂礫若しくは砂質土である。当該土層は、調査区の東側半分で黒色層（2n、2i～2m層）として認識したもので、調査区の中央から東側と北側にかけて、厚く堆積している。第3層（2n・3a～3d）は、この黒色層の下層に当たり、低地部の埋没過程を示しているものと考えられる。調査時は灰褐色層として認識し、掘削した。なお、第2・3層（黒色層）は多くの弥生土器を包含し、完形品が多数出土している。さらに下層（第4層）が灰黄色の細砂で地山である（第4・5図）。

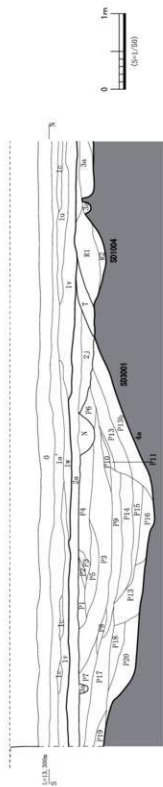
調査区の西端から20.8mの地点から東にかけて地山が低くなり、調査区東端で、少し高くなっている状況を確認することができる。実際に、調査区の東西では、1面目で25cm、第2遺構面で55cmの高低差が認められ、次第に土地が平準化したことがうかがえる。特に、加えて、調査区に近接して井戸や暗渠の排水溝、龍神さんなどの水源若しくは水脈を示唆する痕跡が認められ、旧河道を起源とする水脈が現在も所在しているものと考えられる。調査中は雨天が多かったこともあるが、雨天後は水没し、常に水が湧き出す状況であった。以上の点からも、元來流路若しくは低地であったと考えられる。東に約50m離れたB調査区では微高地が展開するとともに、弥生時代後期後半には、泥炭地が居住域化していることが確認できており、A調査区とB調査区の間が、低地であったと考えられる。

ただし、2つの調査区間の低地部では15世紀頃までの土器を包含しており、後述するB調査区で確認した土地の平準化（微高地化）とは時期が異なると考えられる。

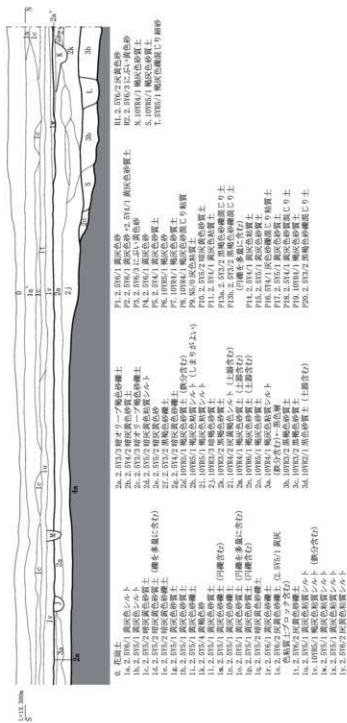
調査当初は、1a層の下層で遺構検出を試みたが、遺構が確認できなかったことから、1c層の下層まで掘り下げて、1面目とした。これらの経緯を踏まえ、東側半分では、先の黒色層（第2層）検出面を1面目として調査を行った。また、2面目は地山（第4層）検出面として調査を実施した。

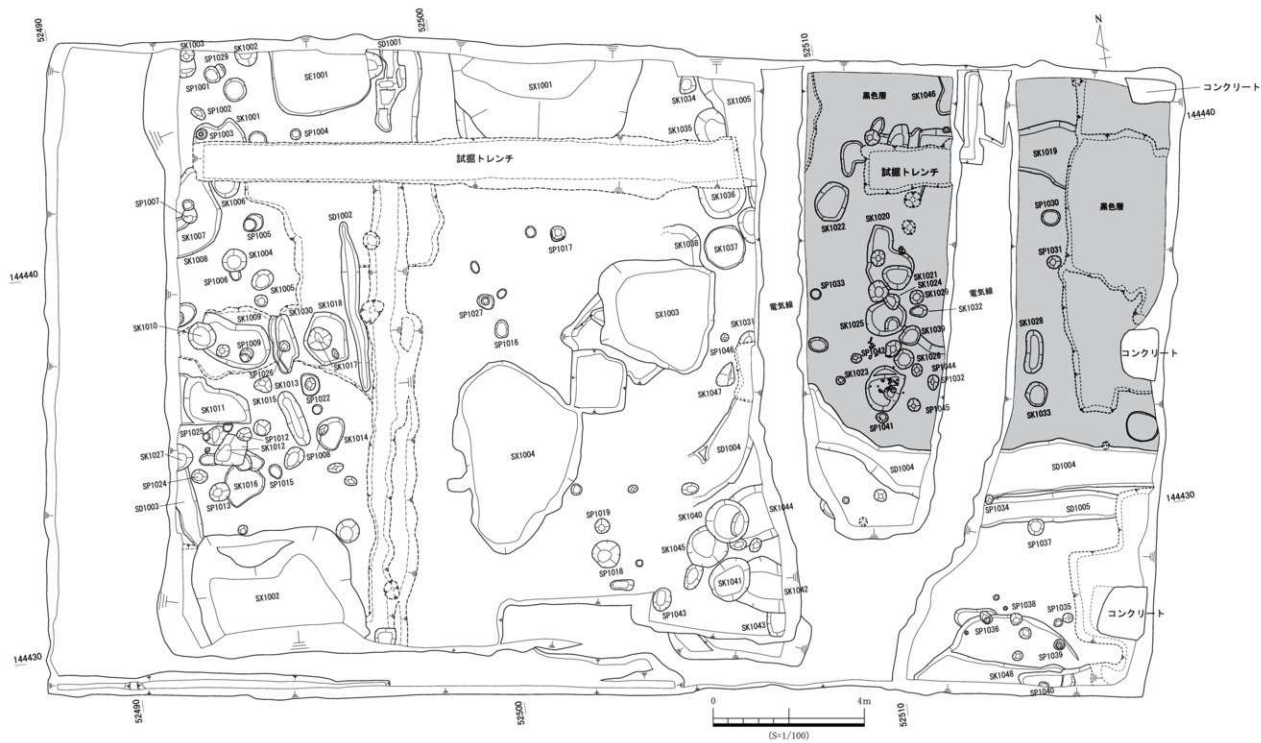


第4図 A調査区基本土階①



第5図 A調査区基本土層②





第6図 A-1 遺構配置図

なお、第2節で既述のとおり、調査は東西半分ずつ調査を実施したが、その際、東側の調査区は、電気線等があるため三叉に調査区が分断されている。そのうち西端は攪乱が多く、度重なる水没によって、2面目は十分に遺構を確認できていない。また、3つに分断された調査区の最も東側の調査区の南端は遺構が密集しており、SD2001が埋没した後には複数時期に及び遺構が形成されたものと考えられる。

以上、遺構面は弥生時代以降、複数時期に及ぶが、今回の調査では2面での調査を実施した。1面目は遺構・遺物から弥生時代後期後半から近代にかけての遺構を確認しているが、基本的には近世以降と考えられ、古い時期の遺物が出土する遺構は本来の遺構の時期を示すものではない可能性が考えられる。2面目は中世以前の遺構を検出している。また、部分的に遺構の重複や、地山面の微細な起伏(凹凸)に起因するものと考えられる2面目の下層の遺構を確認している。今回の調査では便宜的に3面目として調査を実施している。(渡邊)

第4節 A-1 調査区の遺構・遺物

A-1 調査区で検出した遺構は井戸1基、溝5条、土坑47基、ピット39基、性格不明遺構4基である(第6図)。主な時代は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭、古代、中世、近世、近代と幅広い年代の遺構・遺物を検出した。また、後世の開削等で遺構の残存状況が不良なものも多く、性格を判明できるものは少ない。欠番はSP1010・1011・1014・1020・1021・1023・1028である。

SE1001 (第7図)

調査区の北西で検出した井戸状の遺構で、北側は調査区外になる。平面形状は隅丸方形になると推測される。検出した規模は東西約2.5m×南北約1.7m、深さ0.5mである。埋土は黄灰色～暗灰色の砂礫～細砂を中心とした土層が堆積していた。井戸側の構造は、こぶし大の石材を乱積みで積み上げ、裏込めは粘質シルトや細砂を使用している。用途は井戸と推定され、調査中も地下水の湧出を確認した。一方で、平面規模が井戸跡としてはやや大きいことから水洗い場等の用途も推測される。

出土遺物は第7図-1～4である。1はベルト中から出土した磁器の皿である。呉須は薄青で高台部の底面に離れ砂が付着している。2は床面から出土した、土師質土器の鍋である。内面にハケが見られる。3は須恵質土器の片口すり鉢である。4は瀬戸美濃陶器の皿である。時期は高松城塚相8と考えられる。

埋没時期は4の年代から18世紀後半以降と考えられる。

SD1001 (第8図)

調査区の北西で検出し、北側は調査区外になる。南側は攪乱と後世の開削により延伸状況は不明である。平面形状は不整形で、検出した規模は幅約0.8m×長さ約2.0m、最深は約0.3mを図るが、一定ではない。主軸方向は南北方向である。溝跡の埋土はでいぶ黄色土である。

SD1002 (第8図)

調査区西側で検出した。南北の延伸状況は後世の開削により不明である。遺構の規模は幅約0.5m×長さ約4.5m、深さ約0.2mである。主軸方向は南北方向で、断面形状はU字状である。

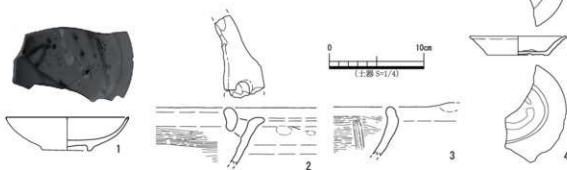
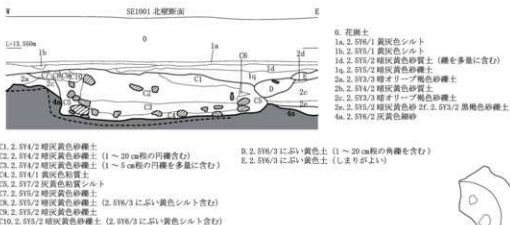
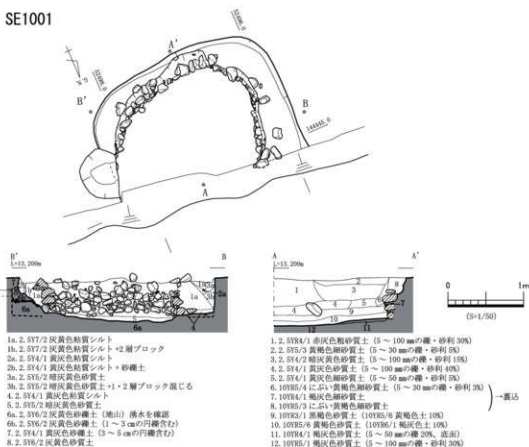
SD1003 (第8図)

調査区南西側で検出し、南北は調査区外や攪乱により不明である。検出した規模は東西約0.5m×南北約2.0mである。主軸は南北方向である。

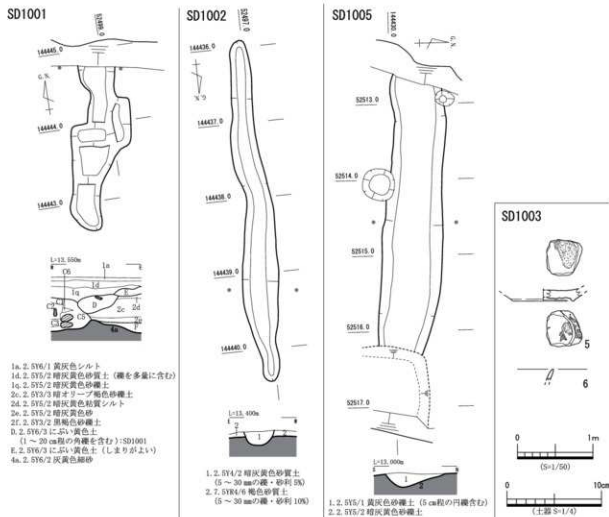
出土遺物は第8図-5・6である。5は肥前系陶器の碗である。底部は削り出し高台で内面に砂目積痕が検出できる。6は肥前系磁器の碗である。

埋没時期は17世紀以降と考えられる。

SE1001



第7図 SE1001 平・断面図及び出土遺物



第 8 図 SD1001 ~ 1003・1005 平・断面図及び出土遺物

SD1004 (第 9 図)

調査区東側で検出し、東側は調査区外になる。検出した規模は幅約 1.7 m × 長さ約 14.0 m、深さ約 0.3 ~ 0.5 m である。主軸方向は東西方向であるが、蛇行している。埋土は A-A' 断面では 4、5 層にあたる。また、1 ~ 3 層に掘返しの痕跡が見られ、波濼された状況を確認でき、複数時期に及ぶものと推測される。しかし、掘削の際に検証が不十分であったため詳細は不明である。断面形状は逆台形である。また、地中埋設物により SD1004 は三叉に掘削した箇所のうち、西側部分は進路が南を向き大きく変わる。当初、西側の大きく進路が変化する部分は別遺構と考えられたが、周辺に同軸方向の遺構が確認できないことから SD1004 の一部であると判断した。

出土遺物は第 9 図 7 ~ 19・M1 である。7 ~ 10 は弥生土器である。その内 7 ~ 9 は特殊器台である。7 は体部と考えられ、横方向の櫛描文と鋸歯文と考えられる文様が確認できる。突帯部は断面形状は方形である。胎土は角閃石や黒色粒を含むが、角閃石の粒径が香東川下流域産で見られるものより大きく、他地域からの搬入品の可能性がある。体部の文様や突帯部の形状から木見型と推測される。8 は脚部と考えられる。外面に櫛描文が見られ、朱が確認できる。9 は口縁部と考えられる。口縁に 3 条の凹線が確認でき、外面に朱と思われる赤色顔料が確認できる。胎土に角閃石や金雲母が含まれる。10 は壺と考えられ、内面にハゲが見られる。11 ~ 13 は須恵器である。11 は甕で外面に格子タタキによる整形が確認できる。12 は鉢で、13 は器種不明である。14 ~ 18 までは土師質土器である。14 は杯で時期は川津 II - 3 頃と推測される。15 は小皿で、16 ~ 18 は足釜である。19 は龍泉窯系の青磁碗である。M1 は火打金と考えられる鉄製品である。

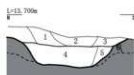
SD1004



52517.0

144432.0

A-A'



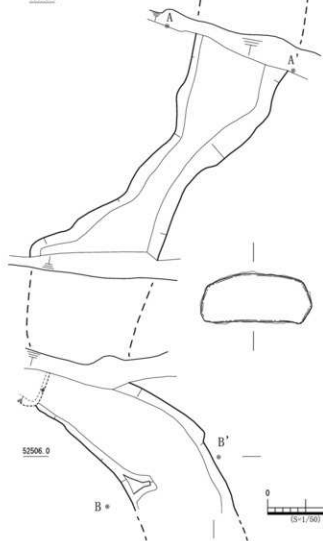
1. 10YR8/6 黄褐色細砂
2. 10YR6/1 暗灰色細砂 (径 10 ~ 20 cm の礫を含む)
3. 10YR6/1 暗灰色細砂
4. 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂 混じり細砂 (径 10 ~ 20 cm の礫を多量に含む)
5. 10YR6/1 暗灰色細砂 (粗砂に多い)
6. 10YR6/2 黄褐色細砂 (7. 5YR3/4 暗褐色細砂を 10% 程度含む)

B-B'

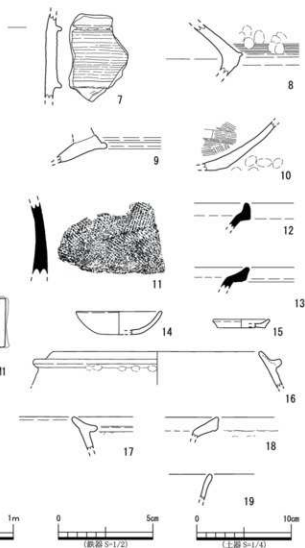


1. 2. 5Y5/1 黄灰色砂礫土 (5 ~ 20 cm の円礫含む)
2. 2. 5Y3/2 黒褐色細砂 (鉄分多量に含む)

52512.0

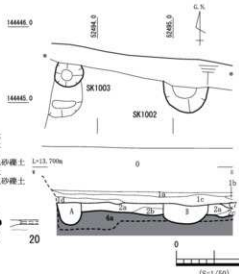


52506.0



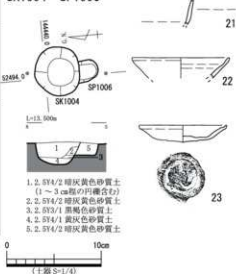
第9図 SD1004 平・断面図及び出土遺物

SK1002・1003



- A. 2. 5Y3/2 黒褐色砂質土
 B. 2. 5Y3/2 黒褐色砂質土
 0. 花崗土
 1a. 2. 5Y6/1 黄灰色シルト
 1b. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト
 1c. 2. 5Y2/2 暗灰黄色砂質土
 1d. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質土
 (層を多量に含む)
 2a. 2. 5Y2/2 暗オリーブ褐色砂礫土
 2b. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土
 2c. 2. 5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫土
 4a. 2. 5Y6/2 灰黄色細砂

SK1004・SP1006



1. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土
 (1~3cm程の円礫含む)
 2. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土
 3. 2. 5Y2/1 黒褐色砂質土
 4. 2. 5Y4/1 黄灰色砂質土
 5. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土

第10図 SK1002～1004・SP1006 平・断面図及び出土遺物

足釜の器形から14世紀以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SD1005 (第8図)

調査区東側で検出し、東側は調査区外になる。東西の延伸状況は調査区外であるため不明である。SP1034、1037に切られている。検出した規模は幅約0.8m×長さ約3.7m、深さ0.2mである。主軸方向は東西で、断面形状はレンズ状である。

SK1001 (第6図)

調査区北西側で検出し、遺構の南側半分は試掘トレンチにより削平され、SP1003に切られている。平面形状は不整な方形で、検出した規模は東西約1.5m×南北約0.5mである。

SK1002 (第10図)

調査区北西側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.6m×南北約0.4m、深さ0.2mである。

SK1003 (第10図)

調査区北西隅で検出し、北側は調査区外である。平面形状は円形になると推測される。検出した規模は東西約0.4m×南北約0.3m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第10図-20の須恵器である。

出土遺物から古代以降となるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1004 (第10図)

調査区西側で検出した。SP1006を切っている。平面形状は円形で、規模は直径約0.6m、深さ約0.3mである。

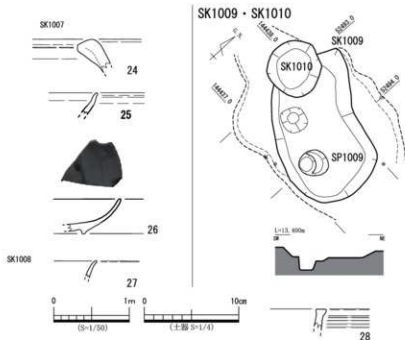
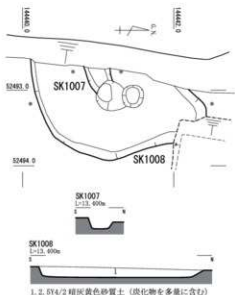
出土遺物は第10図-21～23である。21・22は土師質土器の杯である。23は土師質土器の小皿である。底部に回転ヘラ切りが見られる。時期は川津II・6頃と考えられる。

埋没時期は23の年代観から12世紀後半以降となるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1005 (第6図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、規模は東西約0.6m×南北約0.5mである。

SK1007・1008



第11図 SK1007～1010平・断面図及び出土遺物

SK1006 (第6図)

調査区北西側で検出し、遺構の北側半分は試掘トレンチで削平されている。平面形状は円形になると推測される。検出した規模は東西約0.7m×南北約0.4mである。

SK1007 (第11図)

調査区北西側で検出し、西側は調査区外でSP1007に切られ、SK1008を切っている。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約0.3m×南北約0.3m、深さ約0.1mである。土層状況は不明である。

出土遺物は第11図-24～26である。24は土師質土器で、内面に煤が付着しており、接合痕が確認できる。25は陶器の碗又は皿である。26は磁器の皿で須須は淡青で底部は削り出しである。

埋没時期は26が18世紀後半以降の遺物であるものの、SK1008の切り合い関係から19世紀以降に埋没したと考えられる。

SK1008 (第11図)

調査区北西側で検出した。西側は調査区外で、SK1007に切られている。平面形状は不整な楕円形になると推測され、検出した規模は東西約1.1m×南北約2.3m、深さ約0.1mである。埋土は暗灰黄色砂質土で炭化物を多量に含む。

出土遺物は第11図-27で磁器の端反碗である。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、19世紀以降と考えられる。

SK1009 (第11図)

調査区西側で検出した。SK1010とSP1030に切られている。平面形状は不整な隅丸方形である。東西約2.0m×南北約1.3m、深さ約0.15mである。

出土遺物は第11図-28の弥生土器の特殊器台である。口縁部に3条の凹線文が見られ、外面に朱が確認できる。胎土に角閃石を含む。固化していないが土師質土器の杯も出土している。

埋没時期は中世頃と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

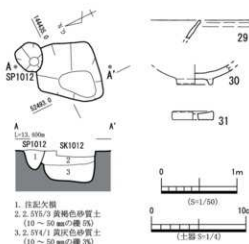
SK1010 (第6図)

調査区西側で検出した。SK1009を切っている。平面形状は円形で、直径約0.7mである。

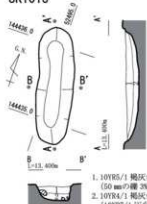
SK1011



SK1012



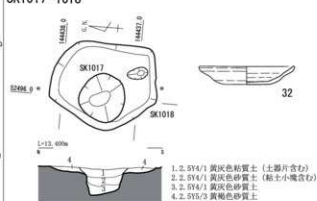
SK1013



SK1014



SK1017・1018



第12図 SK1011～1014・1017・1018 平・断面図及び出土遺物

SK1011 (第12図)

調査区西側で検出した。平面形状は不整な方形で、東西約1.7m×南北約1.3m、深さ約0.3mである。断面形状は方形状である。

SK1012 (第12図)

調査区南西側で検出した。SP1012に切られている。平面形状は方形で、東西約0.7m×南北約0.8m、深さ約0.4mである。

出土遺物は第12図-29～31である。29は土師質土器の杯である。30・31は磁器である。30は瀬戸美濃系陶器の碗で、底部は貼り付け高台である。時期は高松城様相8と考えられる。31は紡錘車と考えられる。

埋没時期は30から19世紀前半～中頃と考えられる。

SK1013 (第12図)

調査区南西側で検出した。平面形状は棒状で、東西約0.5m×南北約1.5m、深さ約0.2mである。図化していないが、須恵器の杯が出土した。

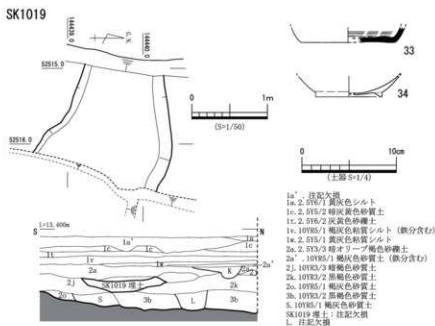
SK1014 (第12図)

調査区南西側で検出した。SP1022に切られている。平面形状は楕円形で、規模は東西約0.7m×南北約0.9m、深さ約0.1mである。また、他の遺構に比べ埋土に円礫を多く含む。

SK1015 (第6図)

調査区南西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.5m×南北約0.4mである。

図化していないが、須恵器が出土した。



第13図 SK1019 平・断面図及び出土遺物

SK1016 (第6図)

調査区南西側で検出した。SP1013に切られている。平面形状は不整形な方形で、規模は東西約1.0m×南北約1.0mである。

SK1017 (第12図)

調査区西側で検出した。SK1018を切っている。平面形状は円形で、直径約0.6m、深さ約0.35mである。埋土は黄灰色の砂～粘土層が3層に分層でき、1層に土器片を含み、2層に粘土塊を含む。

出土遺物は第12図-32で土師質土器の杯である。時期は川津Ⅱ-5頃と考えられる。

埋没年代は遺物の出土量が僅少であるが、32から12世紀中頃と推測され、これらの遺物は遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1018 (第12図)

調査区西側で検出した。SK1017に切られている。平面形状は五角形で、東西約1.1m×南北約1.5m、深さ0.1mである。

SK1019 (第13図)

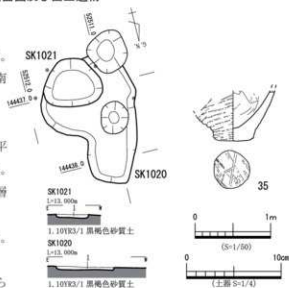
調査区北東側で検出し、遺構の東西は調査区外や攪乱により不明である。検出した規模は東西約1.5m×南北約1.7m、深さ約0.15mである。

出土遺物は第13図-33・34である。33は須恵器の転用碗で、転用前は杯である。34は黒色土器A類の椀である。底部は貼り付け高台である。胎土に黒色粒と赤色粒を含む。

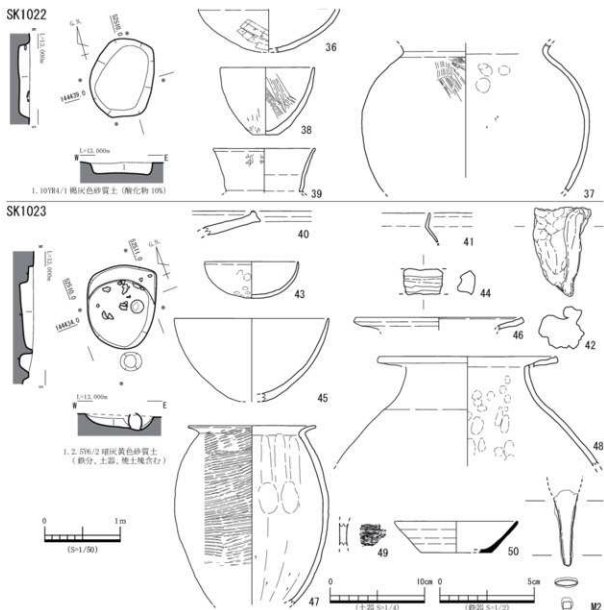
埋没時期は10世紀以降となるが、これらの遺物は遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1020 (第14図)

調査区東側で検出した。SK1021に切られている。平面形状は不整形な方形で、東西約1.3m×南北



第14図 SK1020・1021 平・断面図及び出土遺物



第 15 図 SK1022・1023 平・断面図及び出土遺物

約 1.7 m、深さ約 0.1 m である。SK1020、1021 は土器が出土するものの、深度が極めて薄いことから自然堆積の可能性がある。

出土遺物は第 14 図 -35 で弥生土器の甕である。外面全面にタタキ、底部に木葉痕が見られる。

SK1021(第 14 図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.8 m × 南北約 0.6 m、深さ約 0.1 m である。

SK1022(第 15 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、東西約 0.8 m × 南北約 1.0 m、深さ約 0.15 m である。埋土は褐色色砂質土で酸化物を含んでいる。

出土遺物は第 15 図 -36 ~ 39 である。これらは弥生土器で鉢、甕である。36 の鉢は外面にヘラケズリが見られ、胎土に金雲母を含む。37 の甕は外面にハケが見られる。時期は下川津 VI 式と考えられる。38 の鉢は外面に絞り目、内面にハケが見られる。39 は古式土師器の小型丸底甕である。外面はタテハケが見られる。

埋没時期は 37・39 の年代から古墳時代前期初頭以降となるが、これらの遺物は遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1023 (第 15 図)

調査区東側で検出した。平面形状は隅丸方形で、東西約 0.9 m × 南北約 1.1 m、深さ約 0.25 m である。埋土は暗灰黄色砂質土で鉄分や土器片、焼土塊を多く含むため、これらを廃棄した土坑の可能性はあるが、詳細は不明である。

出土遺物は第 15 図 -40 ~ 50・M2 である。40・41・43・45 ~ 49 は弥生土器である。42・44 は粘土塊である。これらの形状は極めて不整形で、断面は互層状に何種類もの粘土を混ぜ合わせた痕跡を確認できる。スサ等の混和材がないことから土壁ではないと推測される。43 は鉢であるが、手握ねで製作されている。47 は甕で外面全面にタタキが見られ、内面にヘラケズリが見られる。48 は壺である。胎土に角閃石や金雲母を含む。時期は下川津 IV 式と考えられる。49 は体部の薄さから特殊壺の体部である。外面に綾杉文と考えられる文様と朱が見られる。胎土に角閃石を含む。50 は須恵器の杯で内面に火瘡痕、底部には回転ヘラケズリが見られる。他の出土遺物の遺存状況から混入品の可能性がある。M2 は鉄鐵で断面形状は先端を欠損するが柳葉形と推測される。

埋没時期は弥生時代後期後半であるが、これらの遺物は遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1024 (第 16 図)

調査区東側で検出した。SK1025 を切っている。平面形状は楕円形で、規直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

SK1025 (第 16 図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 1.0 m × 南北約 0.9 m、深さ約 0.2 m である。

SK1026 (第 16 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.5 m、深さ約 0.25 m である。

出土遺物は第 16 図 -51 で弥生土器の壺である。胎土に角閃石を含む。

埋没時期は弥生時代後期後半であるが、これらの遺物は遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1027 (第 6 図)

調査区西側で検出し、西側は調査区外である。平面形状は楕円形になると推測され、規模は東西約 0.4 m × 南北約 0.6 m である。

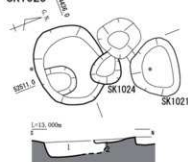
SK1028 (第 6 図)

調査区東側で検出した。平面形状は棒状で、規模は 0.4 m × 南北約 1.0 m である。

SK1029 (第 6 図)

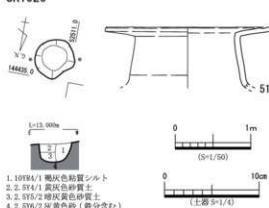
調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SK1025



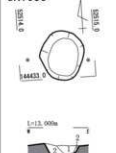
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト (10YR6/4 に近い黄褐色粘質シルト含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (礫を含む)

SK1026



1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
2. 5Y4/1 黄灰色砂質土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
4. 2.9Y6/2 灰黄色砂 (鉄分含む)

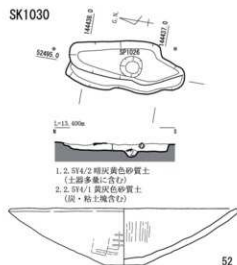
SK1033



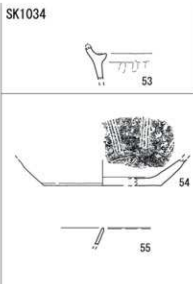
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
3. 2.9Y5/1 黄灰色砂

第 16 図 SK1025・1026・1033 平・断面図及び出土遺物

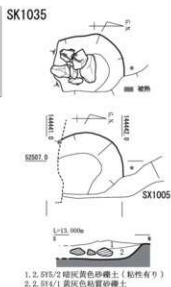
SK1030



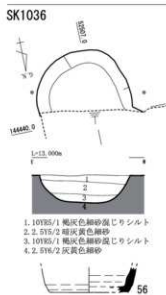
SK1034



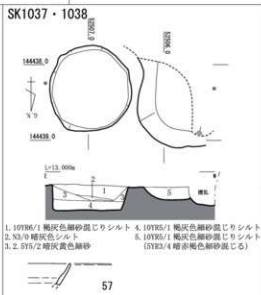
SK1035



SK1036



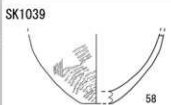
SK1037・1038



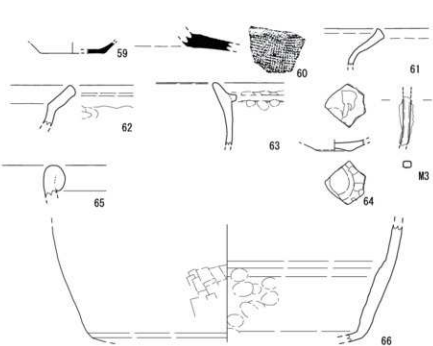
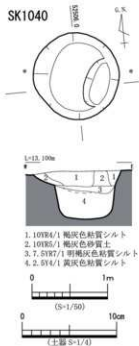
SK1031



SK1039



SK1040



第 17 図 SK1030・1031・1034～1040 平・断面図及び出土遺物

SK1030 (第17図)

調査区西側で検出した。SP1026を切っている。平面形状は棒状で、東西約0.7m×南北約1.5m、深さ約0.2mである。埋土は暗灰黄色砂質土で土器を多量に含んでいる。

出土遺物は第17図-52の弥生土器の鉢である。外面にタタキ後板ナゲが見られる。

SK1031 (第17図)

調査区中央で検出し、南側は攪乱により不明である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.4m×南北約0.3m、深さ約0.1mである。

SK1032 (第6図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で東西約0.4m×南北約0.3mである。

SK1033 (第16図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.6mで深さ約0.2mである。

SK1034 (第6・17図)

調査区北側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.4m×南北約0.4mである。

出土遺物は第17図-53で土師質土器の足釜である。

出土遺物から13世紀以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1035 (第17図)

調査区北側で検出し、南側は試掘トレンチにより削平され、SX1005に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.8m×南北約0.9m、深さ約0.3mである。埋土は2層に分層でき、1層は粘質がある暗灰黄色砂礫土で、2層は黄灰色粘質砂礫土である。また、2層中に円礫が連なり並んでおり、被熱跡が認められる。

出土遺物は第17図-54,55である。54は土師質土器のすり鉢である。55は京信楽系陶器の碗である。埋没時期は55から18世紀以降と考えられる。

SK1036 (第17図)

調査区北側で検出し、北側は試掘トレンチにより削平されている。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約1.2m×南北約0.8m、深さ約0.4mである。

出土遺物は第17図-56で、須恵器の鉢である。

埋没時期は古代以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1037 (第17図)

調査区北側で検出した。平面形状は円形になり、直径約1.1m、深さ約0.4mである。断面形状は方形になる。

SK1038 (第17図)

調査区北側で検出し、西側は後世の開削で不明であり、SX1003に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.5m×南北約0.6m、深さ約0.15mである。

出土遺物は第17図-57で土師質土器の杯である。

埋没時期は中世以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SK1039 (第6・17図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、規模は直径約0.5m、深さ約0.05mである。埋土が浅く、自然堆積の可能性が推測される。

出土遺物は第17図-58で弥生土器の甕で、外面にタタキと黒斑が見られる。

埋設時期は弥生時代後期以降と、遺構面の形成時期から本来の埋設時期を示すものではないと考えられる。

SK1040 (第17図)

調査区南側で検出した。SK1044を切っている。平面形状は円形で、直径約1.1m、深さ約0.6mである。

出土遺物は第17図-59～66・M3である。59・60は須恵器の杯と甕である。60の外面に格子タキによる整形が見られる。61～63は土師質土器で鍋及び足釜である。64・65は陶器の皿と甕である。64は肥前系陶器で内面、底部に砂目積みが確認できる。時期は高松城跡様相2以降と推定される。65は陶器の甕である。66は備前焼の甕である。M3は棒状の鉄製品である。

埋設時期は64の年代から17世紀前半以降と考えられる。

SK1041 (第18図)

調査区南側で検出した。SK1042を切っている。平面形状は楕円形で、直径約1.1m、深さ約0.6mである。埋土は3層に分層でき、3層に10～15cmの円礫を多量に含んでいる。

出土遺物は第18図-67～69である。67は土師質土器の甕である。68は肥前系陶器の碗で底部は削り出し高台である。69は土師器で移動式カマドと考えられる。

埋設時期は68から17世紀以降と考えられる。

SK1042 (第19図)

調査区南側で検出した。SK1041に切られている。平面形状は楕円形で、東西約0.8m×南北約1.5m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第19図-70、71である。70は土師質土器の足釜である。71は備前焼の甕である。

埋没年代は71から16世紀後半以降と考えられる。

SK1043 (第19図)

調査区南側で検出し、東側は調査区外で、SK1042に切られている。検出した規模は東西約0.2m×南北約0.3m、深さ約0.2mである。埋土はA層で暗オリーブ褐色粘質土で円礫を多量に含む。

SK1044 (第19図)

調査区南側で検出し、東側は調査区外になる。SK1040に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.8m×南北約1.5m、深さ約0.35mである。埋土はE1～E4である。E1層は暗灰色黄色砂質土で土器や炭化物を含む。E4層は暗オリーブ褐色粘質シルトで円礫を含む。

出土遺物は第19図-72～75である。72は須恵器の片口鉢である。73、74は土師質土器の足釜である。73の時期は楠井Ⅱ-2頃と考えられる。75は備前焼の甕である。

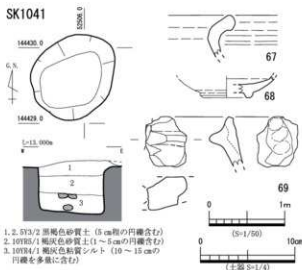
埋設時期は75の年代から17世紀以降と考えられる。

SK1045 (第6図)

調査区南側で検出した。SK1040に切られている。平面形状は円形で、直径約1.1mである。

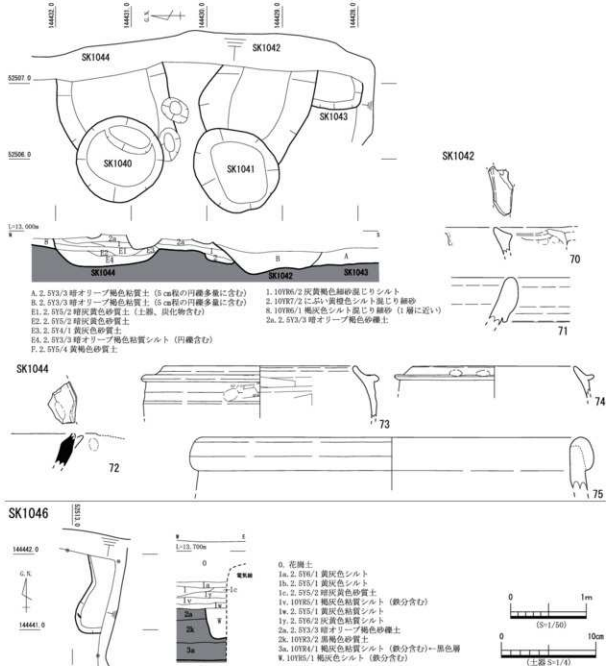
SK1046 (第19図)

調査区北東側で検出し、一部調査区外になる。平面形状は不整形で、検出した規模は東西約0.4m×南北約1.0m、深さ約0.4mである。埋土に鉄分を多く含む。



第18図 SK1041 平・断面図及び出土遺物

SK1042 ~ 44



SK1047 (第6図)

調査区中央で検出した。平面形状は三角形で、規模は東西約0.6m×南北約0.5mである。

SK1048 (第6図)

調査区南東側で検出し、南側は調査区外になり、SP1040に切られている。平面形状は不整形で、検出した規模は東西約1.9m×南北約0.4mである。

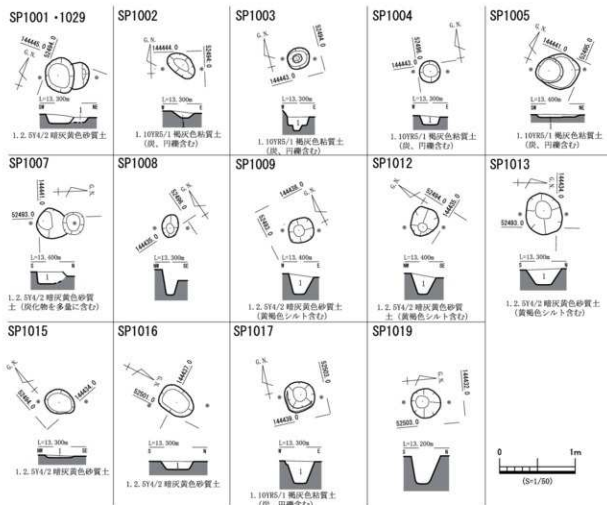
SP1001 (第20図)

調査区北西側で検出した。SP1029を切っている。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

図化はしていないが、土師質土器の杯が出土した。

SP1002 (第20図)

調査区北西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.3m、深さ約0.2mである。



第 20 図 A-ISP 平・断面図①

SP1003 (第 20 図)

調査区北西側で検出した。SK1001 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1004 (第 20 図)

調査区北西側で検出した。平面形状は円形で、直径 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1005 (第 20 図)

調査区北西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.5 m、深さ約 0.05 m である。深度が極めて浅いことから自然堆積の可能性がある。

SP1006 (第 10 図)

調査区北西側で検出した。SK1004 に切られている。平面形状は円形になると推測され、直径約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。

SP1007 (第 20 図)

調査区北西側で検出した。SK1007 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。埋土は暗灰黄色砂質土で多量の炭化物を含む。

SP1008 (第 20 図)

調査区南西側で検出した。SK1014 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。土層状況は不明である。

SP1009 (第 20 図)

調査区西側で検出した。SK1009 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.3 m

である。

SPI012 (第20図)

調査区西側で検出した。SK1012を切っている。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.3mである。

SPI013 (第20図)

調査区南西側で検出した。SK1016を切っている。平面形状は円形で、直径約0.5m、深さ約0.3mである。

SPI015 (第20図)

調査区南西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.05mである。深度が極めて浅いことから自然堆積の可能性がある。

SPI016 (第20図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.2mである。

SPI017 (第20図)

調査区区中央で検出した。平面形状は隅丸方形で、東西約0.4m×南北約0.4m、深さ約0.4mである。

SPI018 (第21図)

調査区南側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.8m、深さ約0.5mである。

出土遺物は第21図-76、77である。76は石臼で芯棒痕がわずかに残存する。材質は凝灰岩で豊島石に分類されるものである。77は丸瓦である。

埋没時期はA-SX1001で出土する瓦類と同一製品と考えられることからA-SX1001の埋没年代から19世紀末以降と推定される。

SPI019 (第20図)

調査区南側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.4mである。土層状況は不明である。

SPI022 (第21図)

調査区西側で検出した。平面形状は隅丸方形で、東西約0.5m×南北約0.6m、深さ約0.5mである。埋土は黄灰色砂質土で炭化物や粘土塊を含む。

出土遺物は第21図-78～80である。78は弥生土器の壺である。肩部に突帯を貼り付け刺突文を施す。79、80は土師質土器の小皿と足釜である。

埋没時期は80から13世紀以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SPI024 (第21図)

調査区南西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.3mである。

SPI025 (第21図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.1mである。

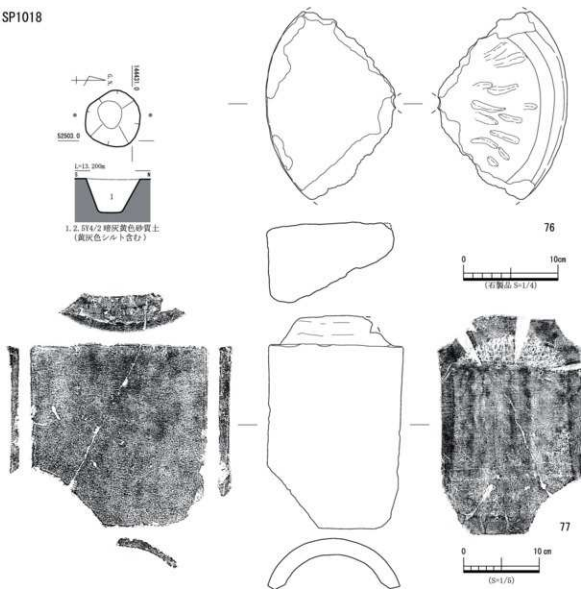
SPI026 (第21図)

調査区西側で検出した。SK1030に切られている。平面形状は円形である。完掘後雨天時に崩落したため、検出当初より遺構の形状が大きくなっているが、直径約0.2m、深さ約0.2mと推計される。土層状況は不明である。

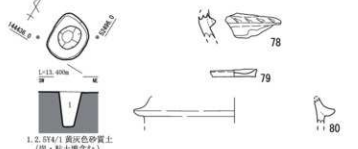
出土遺物は第21図-81で弥生土器の高杯である。外面にヘラミガキが見られ、胎土に金雲母を含む。

埋没時期は弥生時代後期と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SP1018



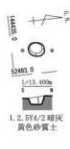
SP1022



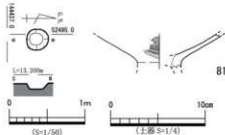
SP1024



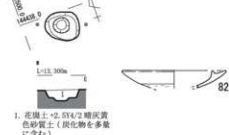
SP1025



SP1026



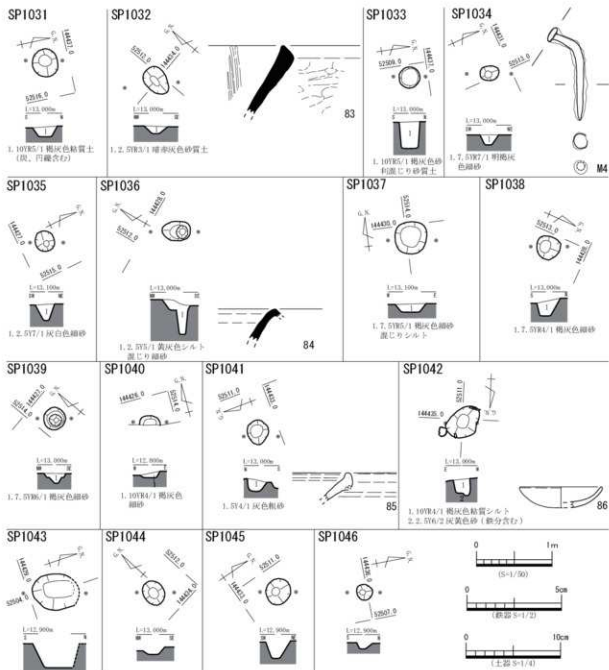
SP1027



SP1030



第 21 図 A-1SP 平・断面図及び出土遺物②



第 22 図 A-ISP 平・断面図及び出土遺物③

SP1027 (第 21 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。埋土は暗灰黄色砂質土で炭化物を多量に含む。

出土遺物は第 21 図 82 で備前焼の燈明皿で、18 世紀中頃である。

SP1029 (第 20 図)

調査区北西側で検出した。SP1001 に切られている。平面形状は円形になると推測され、東西約 0.2 m × 南北約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

SP1030 (第 21 図)

調査区北東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.5 m、深さ約 0.05 m である。深度が極めて浅いことから自然堆積の可能性が考えられる。

SP1031 (第 22 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

SP1032 (第22図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第22図-83で須恵器のすり鉢である。

埋没時期は14世紀中頃と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SP1033 (第22図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.4m、深さ約0.2mである。

SP1034 (第22図)

調査区南東側で検出した。SD1005を切っている。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第22図-M4で丸釘である。

SP1035 (第22図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。また、南北方向にSP1036・1038・1039・1040が1.0m～1.2mの間隔で検出されていることや同一規模であることから番列等の可能性があるが、後世の開削や建物の柱間配置が歪んであることから確証は得られない。

SP1036 (第22図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.5mである。

出土遺物は第22図-84で須恵器の甕である。

埋没時期は9世紀代と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SP1037 (第22図)

調査区南東側で検出した。SD1005を切っている。平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

SP1038 (第22図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.3mである。

SP1039 (第22図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。

SP1040 (第22図)

調査区南東側で検出し、南側は調査区外である。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。

SP1041 (第22図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第22図-85で備前焼の甕である。

埋没時期は15世紀以降と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SP1042 (第22図)

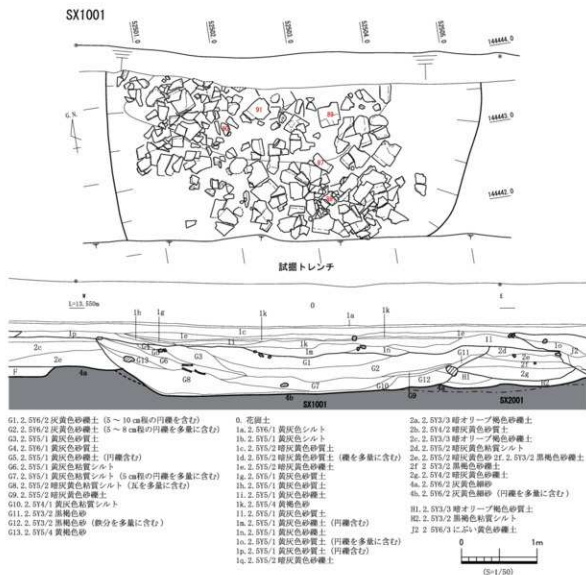
調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第22図-86で土師質土器の小皿で、時期は川津Ⅱ-3と考えられる。

埋没時期は11世紀末頃と考えられるが、遺構面の形成時期から本来の埋没時期を示すものではないと考えられる。

SP1043 (第22図)

調査区南側で検出した。平面形状は円形で、東西約0.5m×南北約0.6m、深さ約0.4mである。



第23図 SX1001 平・断面図

土層状況は不明である。

SPI044 (第22図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。土層状況は不明である。

SPI045 (第22図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。土層状況は不明である。

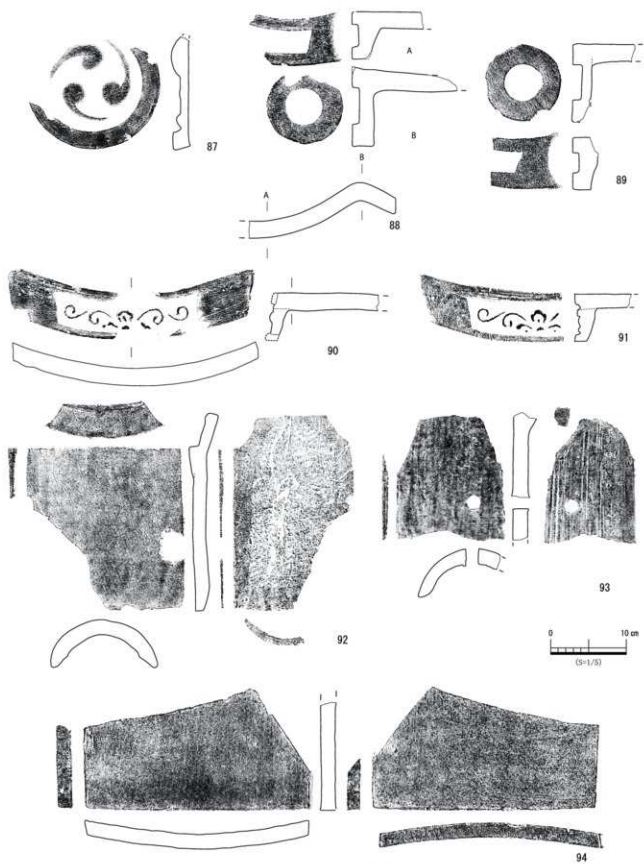
SPI046 (第22図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.1mである。土層状況は不明である。

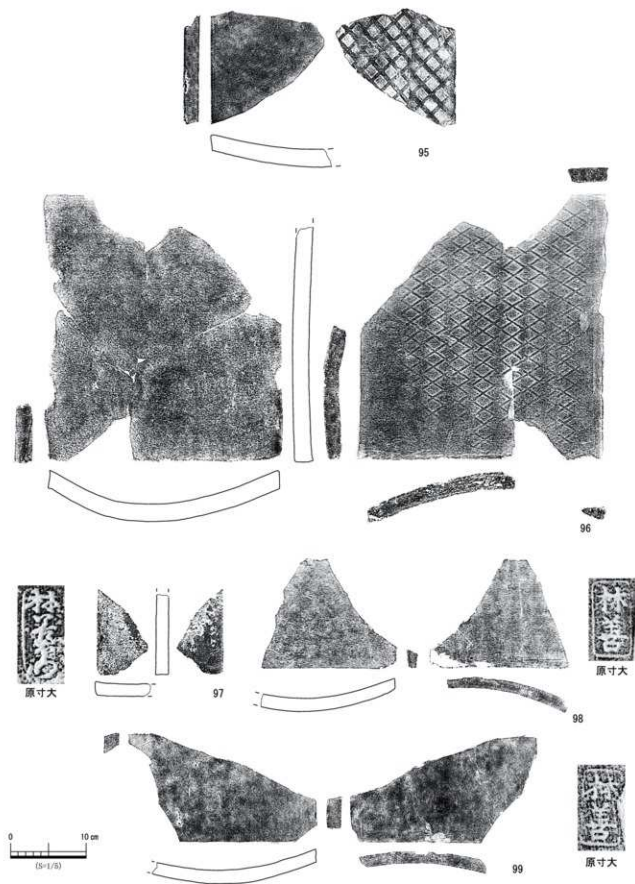
SX1001 (第23～28図)

調査区北側で検出し、大型の廃棄土坑で、検出した規模は東西約5.0m×南北約2.0m、深さ0.5mである。遺構の埋土はG1～G13層である。上面を中心に黄灰色砂礫土が堆積し、円礫を多く含む。下面のG8～G10～G13層にかけては暗灰黄色～黒色の砂～シルトが堆積している。また、多量の瓦類や陶磁器が廃棄された状況で出土した。

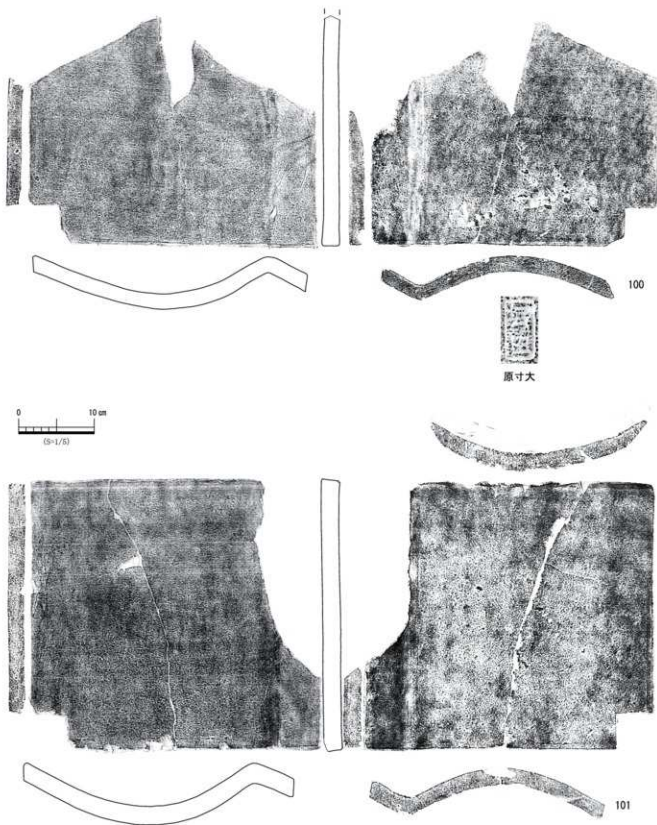
出土遺物は第24～28図・87～106である。87は巴文の軒丸瓦で、文様は全体的に膨らみのある文様である。88・89は軒瓦で瓦当の文様は無文(蛇の目)である。90・91は、文様が簡略化され



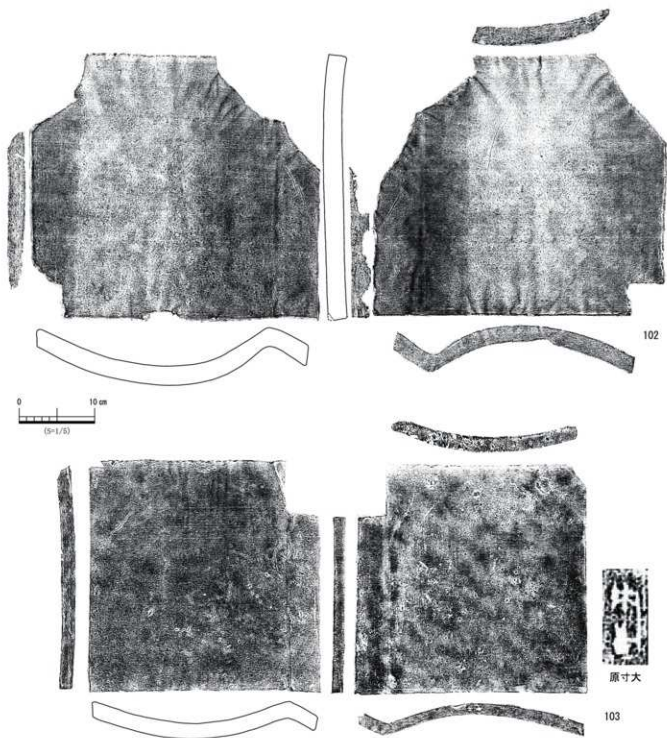
第 24 図 SX1001 出土遺物①



第25図 SX1001出土遺物②

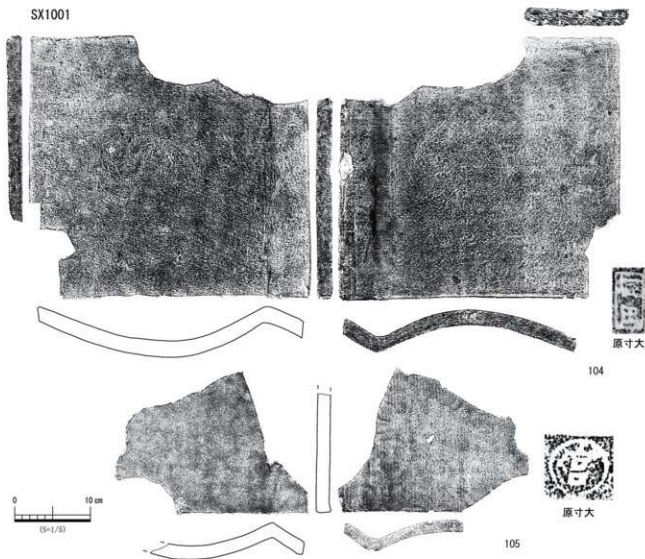


第 26 図 SX1001 出土遺物③



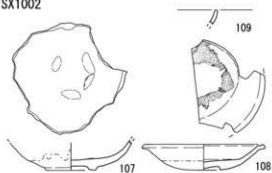
第 27 図 SX1001 出土遺物④

SX1001

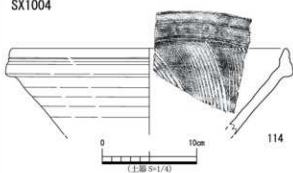


第 28 図 SX1001 出土遺物⑤

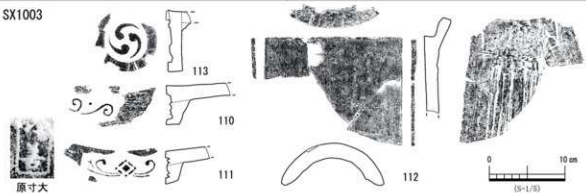
SX1002



SX1004



SX1003



第 29 図 SX1002 ~ 1004 出土遺物

た半裁花菱文系の軒平瓦と考えられる。92は丸瓦で93は隅切丸瓦である。94～99は平瓦である。95の凸面に正格子叩き、96の凸面に斜格子叩きによる整形が見られる。97は凸面、98の前端面、99の端面に「林善」の押印が見られる。100～105は棧瓦である。100・104は左棧瓦で、端面に右から左方向に「前田」の押印が見られる。103は棧瓦で端面に「林善」の押印が見られる。105は端面に「宮」の押印が見られる。106はサスカイトの石器で観察表のみに掲載した。この他に、本報告に図化していないが、硯や寛永通宝と考えられる銭、力士を模ったと考えられる金属玩具（写真図版29）等が出土した。

このように、SX1001からは文字瓦が多数出土しており、「前田」「林善」「宮」を確認している。文字はいずれも刻印で方形と円形印を使用している。空港跡地遺跡でも「林善」等の文字瓦が出土しており、屋号や工人に関連した押印と評価されている。「林善」の押印は空港跡地遺跡の分析から、19世紀初頭から明治時代前半頃の年代を示すと考えられる（佐藤2000）。また、文字瓦の意味も空港跡地遺跡と同様、屋号や工人を示すものと推測される。

以上の遺物は、現林小学校の前身にあたり、調査区周辺に所在をなした明治8年（1875）建設の下林小学校や明治20年（1887）建設の山田郡林尋常小学校で使用された瓦類と推定される。この2校は明治時代末頃に降に改廃築を行っており、この時期を考慮すると、これらの遺物は19世紀末以降に廃絶されたものと推測される。ただし、一部に、18世紀末若しくは19世紀初頭と考えられる檀紙-御殿系の半裁花菱文の軒平瓦（90・91）も認められる。

SX1002（第6・29図）

調査区南西側で検出し、南側は調査区外である。検出した規模は東西約4.2m×南北約2.9mである。

出土遺物は第29図-107～109である。いずれも陶器の碗と皿である。107は肥前系陶器の碗で内面に胎土目による目跡がある。108の皿は内面に砂目積みが見られる。109は陶器の碗と考えられる。

SX1003（第6・29図）

調査区中央で検出した。規模は東西約3.0m×南北約3.0mである。埋土は砂礫を多く含む。

出土遺物は第29図-110～113の瓦類である。113は軒棧瓦であり、文様は巴文である。110、111は軒平瓦である。111は瓦当面に「] 善」と刻印が見られ、「林善」の押印と考えられる。112は丸瓦である。また、図化していないが、多数の磁器が出土した。器種は湯呑や小鉢、茶碗である。湯呑はいずれも渦巻模様である（写真図版16）。染付の技法はプリントであることから19世紀後半以降の遺物と考えられる。

遺構の埋没時期は19世紀後半頃と考えられ、これらの遺物は林小学校の前身である下林小学校や山田郡林尋常小学校で使用されたものと推測される。

SX1004（第6・29図）

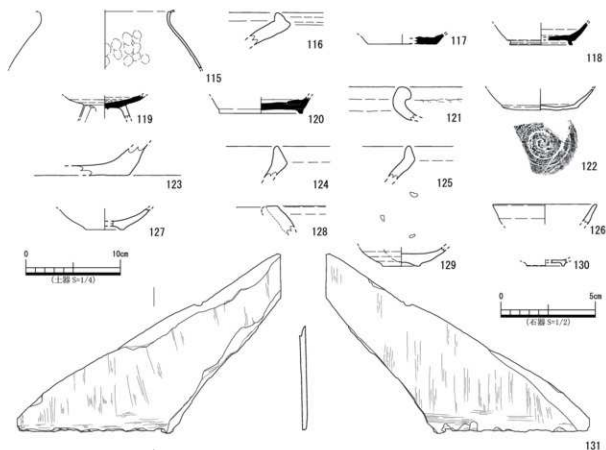
調査区中央で検出した。規模は東西約3.5m×南北約5.0mである。埋土は砂礫を多く含む。

出土遺物は第29図-114で備前焼のすり鉢である。また、図化していないが、多数の陶器が出土した。器種は湯呑、小鉢、茶碗、小皿、須恵、花瓶が出土した。染付の技法はいずれもプリントであることから19世紀後半以降の遺物と考えられる（写真図版16）。

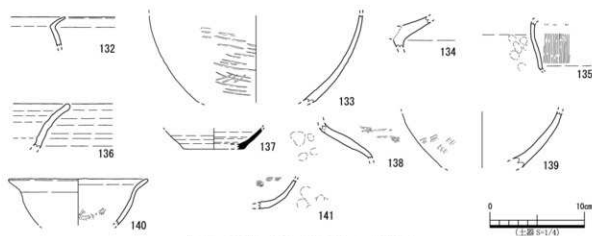
埋没時期は19世紀後半頃と考えられ、これらの遺物は林小学校の前身である下林小学校や山田郡林尋常小学校で使用したものと推測される。

その他の出土遺物（第30図）

遺構検出時に出土した遺物は第30図-115～131である。115・116は弥生土器の壺と考えられ、胎土に115は金雲母、116は角閃石を含んでいる。117～120は須恵器である。117・118は杯で、117の底部は回転ヘラ切りが見られ、118の底部は削り出し高台である。119は高杯でスカシが3ヶ所に見られる。120の器種は不明だが底部に貼り付け高台が見られる。121～125は土師質土器である。



第30図 A-1 遺構検出時出土遺物



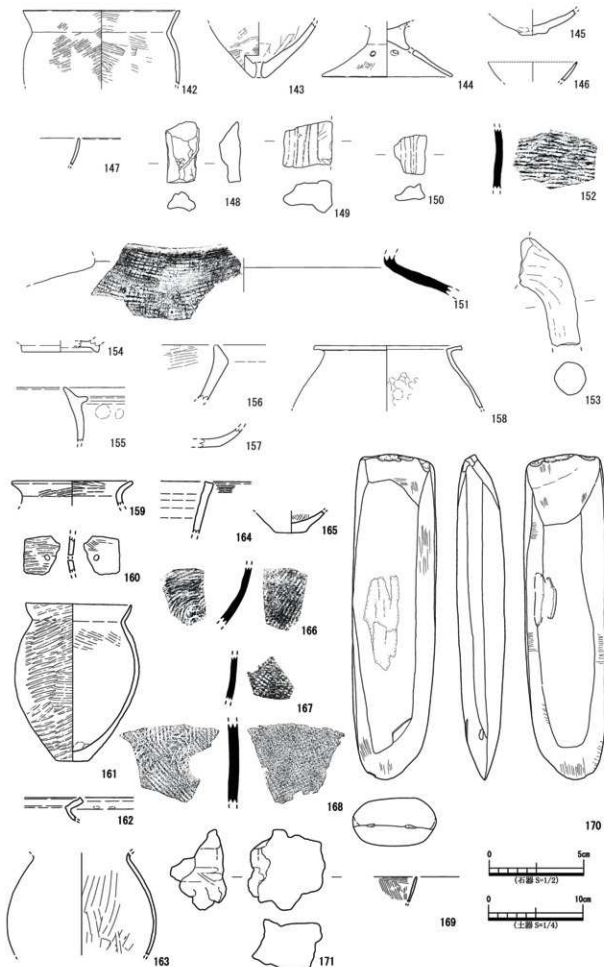
第31図 遺物包含層（第2層）出土遺物①

121は甕である。122は杯で、時期は13世紀頃と考えられる。124・125は鉢である。126は緑軸陶器である。127～130は陶器である。127は肥前系陶器の皿である。129は肥前系陶器の碗で、内面に胎土目がある。130は小皿と考えられる。131は磨製石器の大型石庖丁である。石材は粘板岩である。

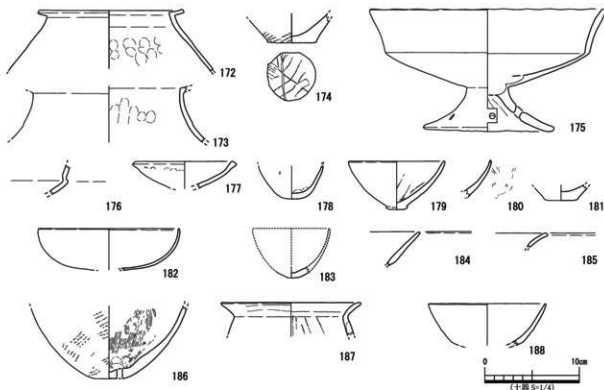
攪乱出土の遺物で図化していないが、底部に「東瀛□軒李八製」と「岐346」（写真図版28）と記銘、印字している陶器が出土した。

遺物包含層（第4～6・31・32・33図）

第3節の基本土層において記述したとおり、調査区東側では黒色土を中心とした遺物包含層を検出した。平面的に確認した範囲は第6図の網掛け部分である。調査区東半分で、黒色層（2a、21～



第 32 図 遺物包含層（第 2 層）出土遺物②



第33図 遺物包含層（第3層）出土遺物

2m[2層]、2n, 3a ~ 3d[3層]）として認識したもので、1面目を形成している層位である。A調査区の地形が西から東に傾斜しており、遺物包含層は調査区中央から、東側・北側にかけて厚く堆積し、多くの弥生時代後期の遺物を包含している。なお、これらの堆積層は、いわゆる泥炭層と呼ばれる低地部の堆積層であるが、多くの土器が廃棄されており、集落の縁辺部で不用品の廃棄場となっていたものと考えられる。そのため、当該層上面で検出した遺構の中には、壁面に土器が突き刺さるようなものもあり、遺構状に認識されたものも含まれていると考えられる。このような状況を鑑み、出土する弥生土器は遺構の本来の時期を示すものではないと考えられる。

また、類似した黒色層（2a）は調査区の東西でも確認でき、調査時には同様の土層として認識していたが、は堆積状況及び層厚等から、経緯の異なるものと考えられる。

出土遺物には、後述するように、時期幅があり、後述する遺物から弥生時代後期以降、次第に土地の平準化が進んだと考えられるが、当該地は瓦質土器の鉢（156）から、15世紀中頃までは、低地（湿地）であったと考えられる。土地の平準化に伴う最終的な居住適地化は、17世紀以降と考えられる。（渡邊）

出土遺物は第31図-132～第33図-188である。132～171は基本土層の第2層中から出土した遺物である。132・133は甕である。132は胎土に金雲母を含む。133は外面にタタキが見られる。134は高杯で円盤充填が見られ、胎土に角閃石と金雲母を含む。135は広口壺である。137は須恵器の杯で、底部に回転ヘラ切りが見られる。138・139は弥生土器の甕である。139は下川津Ⅲ式新相と考えられる。140・141土師器で140は鉢、141は小型壺である。142・143は弥生土器である。142の甕は外面にタタキ、内面に荒いハケが見られる。143の有孔鉢は底部に孔、外面にタタキが見られる。144、145は古式土師器の高杯である。144の高杯は畿内産の可能性があり、脚部に円形スカシを4ヶ所見られる。146・147は土師器の高杯と杯である。148～150は粘土塊である。151・152は須恵器の甕である。153は土師質土器の足釜である。154は緑釉陶器の椀である。155は土師質土器の足釜である。156は瓦質土器の鉢である。157～164は弥生土器である。158～

162は甕である。158は胎土に角閃石と金雲母を含み、時期は下川津Ⅱ式である。161の時期は下川津Ⅲ式新相と考えられる。162は胎土中に角閃石や金雲母を含む。164は鉢である。165は古式土師器の甕と考えられ、胎土に角閃石、金雲母を含む。166～168は須恵器でいずれも甕である。外面整形に166は平行タタキ、167は格子タタキが見られる。169は土師器の鉢と考えられる。170は磨製石斧である。171は粘土塊である。

172～188は基本土層の第3層から出土した遺物である。172～186が弥生土器である。172～174は甕である。とりわけ、173は胎土に角閃石・金雲母・黒雲母を含む。175は高杯で、脚部に円形のスカシが見られる。176は小型丸底壺である。177～184は鉢である。179の時期は下川津Ⅱ～Ⅲ式である。183は原形を留めているが、内外面ともに剥離が著しく正確な器形や厚さは不明である。185は壺と考えられる。186の有孔鉢は底部に孔、外面にタタキ、内面にタテハケが見られる。187は古式土師器の甕である。188は土師器の鉢である。

第5節 A-2調査区の遺構・遺物

A-2調査区で検出した遺構は溝2条、土坑47基、ピット67基、性格不明遺構3基である(第34図)。遺構面は4層上面である。埋土の特徴として褐灰色～黒褐色の砂～シルトの堆積が認められた。2面目は1面目と同様に弥生時代後期後半～古墳時代前期、古代、中世、近世と幅広い年代の遺構・遺物を検出した。2面目も近世以降の開削が著しく、この面の詳細な年代を求めることは難しいが、中世以前の遺構面と考えられる。

遺構の欠番はSK2034・2035・2046・2047・SP2012・2013・2038・2041・2044・2045・2052・2071である。

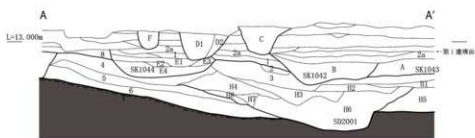
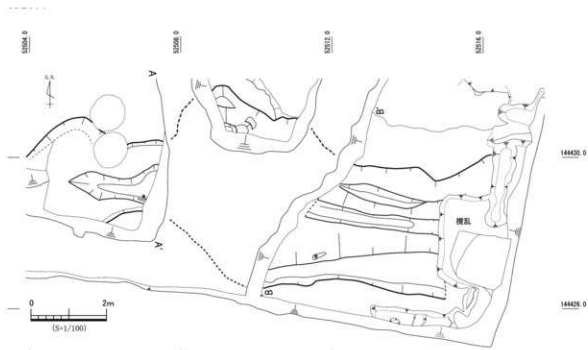
SD2001(第35・36図)

調査区南東側で検出した東西方向の溝で、やや東側で北に振っており、蛇行して延伸する。平面で検出した規模は幅約4.0～1.8m×全長約12.0mである。

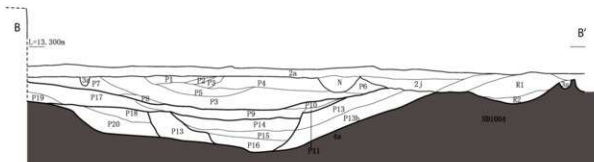
検出時は、遺構として広がり認識できておらず、西側は、調査時に最も水没の著しい状況であったため、灰色粘土の広がりを平面で確認した後に掘削を行った。その結果、下場の形状が溝状を呈し、人骨や遺物が出土したことや中央部でも土坑状遺構として落ちを確認したことから一連の遺構となる可能性が考えられた。この灰色粘土は、これより東側では確認できず、場所や地形によって浸透されず、溜まったヘドロ状の土が土壌化したものと考えられる。

一方で、東側においては、多くの遺構が切り合っており、当初、上記の遺構が延伸すると認識できていなかったが、既述の西側の遺構の検出状況及び壁面近辺で確認した土坑の下部へと切り込んでいく土層を確認できた。また、平面においては、同様な範囲で地山ではない堆積層を確認していたことから、上位の遺構を調査後、改めて掘削を行った結果、同様な遺物が出土するとともに、溝状を呈する掘り方を確認できた。ただし、東側については掘り込みが緩やかで、溝というよりは、流路状遺構と呼ぶべきものと考えられる。また、土層A-A'(土層2～6、H1～H8)・B-B'(土層P1～P20)からも明らかのように、断面形状及び埋積状況から、複数回にわたり次第に埋没した状況を確認することができる。後述するように、人骨片が出土しており、集落の縁辺部にあたるもので、周辺には墓地等の存在が示唆される。(渡邊)

出土遺物は第36図-189～197である。189は特殊器台の口縁部と考えられる。口縁は外側に2方向の揃み出しが見られ、朱が付着している。190・191は須恵器の甕である。191の体部には櫛描きの直線文と波状文が見られる。192～196は土師質土器である。器種は杯や甕、足釜、鉢である。197は備前焼の甕である。また、埋土中から人骨が多数出土した(写真図版29)。判明できた部位は右大腿骨、左脛骨である。特定はできなかったが、寛骨や上脛骨と考えられる部位も出土した。出土状況は各個体が離れた位置で出土したことから、二次的移動によるものと考えられる。部位の



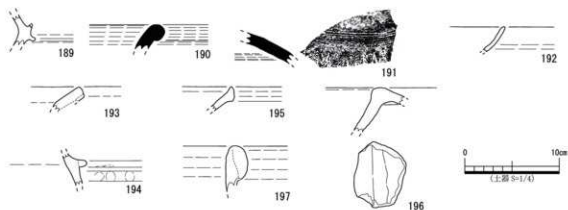
- | | | |
|--|---|---|
| <p>A. 2. S13/3 増オリーブ褐色粘質土 (5 cm 程度の円礫多量を含む)</p> <p>B. 2. S13/3 増オリーブ褐色粘質土 (5 cm 程度の円礫多量を含む)</p> <p>C. 2. S15/2 増灰黄色砂質土</p> <p>D1. 2. S15/2 増灰黄色砂質土</p> <p>D2. 2. S15/2 増灰黄色粘質土</p> <p>E1. 2. S15/2 増灰黄色砂質土 (土源、炭化物含む)</p> <p>E2. 2. S15/2 増灰黄色砂質土</p> <p>E3. 2. S14/1 黄灰色粘質土</p> <p>E4. 2. S13/3 増オリーブ褐色粘質シルト (円礫含む)</p> <p>F. 2. S15/4 黄褐色砂質土</p> | <p>H1. N5/0 灰褐色粘土</p> <p>H2. 2. S14/1 黄灰色粘質土</p> <p>H3. 7. S135/1 褐色粘質土 (5194/6 赤褐色を 10% 含む)</p> <p>H4. 2. S13/2 黒褐色砂礫混じり粘質土</p> <p>H5. 2. S13/2 黒褐色粘質土</p> <p>H6. N5/0 灰褐色土 (骨、遺物含む)</p> <p>H7. 7. S135/1 褐色シルト混じり粘土</p> <p>H8. 7. S135/1 褐色シルト混じり細砂</p> <p>K. 7. S135/1 褐色シルト (7. S135/0 明褐色を 5%)</p> | <p>1. 10196/2 灰黄褐色粘質土混じりシルト</p> <p>2. 10197/2 に近い黄褐色シルト混じり細砂</p> <p>3. 10195/1 褐色シルト混じり細砂</p> <p>4. 10197/2 に近い黄褐色シルト混じり細砂</p> <p>5. 10194/1 褐色シルト混じり細砂</p> <p>6. 10194/1 褐色シルト混じり細砂 (礫含む)</p> <p>7. 10196/1 褐色粘質土混じりシルト (地山)</p> <p>8. 10196/1 褐色シルト混じり細砂 (1 層に近い)</p> |
|--|---|---|



- | | | |
|--|--|--|
| <p>P1. 2. S16/1 黄灰色砂</p> <p>P2. 2. S16/1 黄灰色砂 + 2. S14/1 黄灰色砂質土</p> <p>P3. 2. S16/3 に近い黄灰色砂</p> <p>P4. 2. S16/1 黄灰色砂</p> <p>P5. 2. S14/1 黄灰色砂質土</p> <p>P6. 10195/1 褐色粘質土</p> <p>P7. 10194/1 褐色粘質土</p> <p>P8. 10194/1 褐色粘質土混じり粘質土</p> <p>P9. N5/0 灰褐色粘質土</p> <p>F10. 2. S15/2 増灰黄色砂質土</p> <p>F11. 2. S14/1 黄灰色粘質土</p> | <p>P12. 注記欠損</p> <p>P13a. 2. S13/2 黒褐色粘質土混じり土</p> <p>P13b. 2. S13/2 黒褐色粘質土混じり土 (円礫を多量を含む)</p> <p>P14. 2. S14/1 黄灰色粘質土</p> <p>P15. 2. S15/1 黄灰色砂質土</p> <p>P16. S14/1 灰褐色粘質土混じり粘質土</p> <p>P17. 2. S15/1 黄灰色砂質土</p> <p>P18. 2. S14/1 黄灰色粘質土</p> <p>P19. 10194/1 褐色粘質土</p> <p>P20. 2. S13/2 黒褐色粘質土</p> | <p>R1. 2. S16/2 灰黄色砂</p> <p>R2. 2. S16/3 に近い黄褐色砂</p> |
|--|--|--|



第 35 図 SD2001 平・断面図



第 36 図 SD2001 出土遺物

数量から検出できた個体数は 1 体と推測される。

埋没時期は遺物の年代を特定できないが、16 世紀前半以降と推測される。

SD2002 (第 37 図)

調査区北東側で検出し、北側は攪乱により削平され、SP2066・SP2067 に切られている。検出した規模は幅約 0.4 m × 南北約 3.5 m、深さ約 0.1 m である。溝の主軸方向は南北方向である。

出土遺物は、第 37 図-198 の須恵器の杯である。

埋没時期は古代以降と考えられる。

SK2001 (第 38 図)

調査区西側で検出した。SP2003 を切っている。平面形状は楕円形で、東西約 0.6 m × 南北約 0.7 m、深さ約 0.4 m である。同一位置に A-1 調査時の SK1004 があることから掘り残しの可能性がある。

図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SK2002 (第 38 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.8 m × 南北約 1.1 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 38 図-199・200 で土師質土器の杯である。200 は川津 II - 6 頃と考えられる。

埋没時期は 200 の年代から 12 世紀後半頃と考えられる。

SK2003 (第 38 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.6 m × 南北約 0.5 m、深さ約 0.2 m である。

SK2004 (第 38 図)

調査区北西側で検出し、北側は調査区外になる。平面形状は方形になると推測され、東西約 1.2 m × 南北約 0.7 m、深さ約 0.1 m である。埋土は F 層の黒褐色砂質土である。

出土遺物は第 38 図-201 で古式土師器の二重口縁壺で外面にヘラミガキ、ナデが見られる。胎土に金雲母を含む。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、201 の年代から古墳時代前期初頭頃と考えられる。

SK2005 (第 38 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.5 m × 南北約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

SK2006 (第 38 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.8 m × 南北約 0.6 m、深さ約 0.2 m である。

SK2007 (第 38 図)

調査区北西で検出した。平面形状は不整形で、東西約 1.0 m × 南北約 0.6 m、深さ約 0.2 m である。

SK2008 (第 34 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.6 m × 南北約 0.7 m である。

SK2009 (第39図)

調査区中央で検出した。SK1010を切っており、SK1013・2028・SP2034・2035に切られている。平面形状は楕円形で、東西約1.6m×南北約1.2m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第39図-202～204である。202・203は土師質土器で、202は椀、203は杯である。203は小片であるが、川津II-5頃と推測される。204は弥生土器の甕である。外面にタタキがあり、内面にハケが見られる。

埋没時期は203の年代から12世紀中頃と推測される。

SK2010 (第39図)

調査区中央で検出した。SK2009に切られている。平面形状は楕円形で、東西約1.4m×南北約0.7m、深さ約0.3mである。

SK2011 (第39図)

調査区中央で検出した。SK2012を切っている。平面形状は楕円形で、東西約0.65m×南北約0.6m、深さ約0.16mである。

SK2012 (第39図)

調査区中央で検出した。SK2011に切られている。平面形状は楕円形で、東西約1.0m×南北約1.4m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第39図-205は陶器の天目茶碗である。

SK2013 (第39図)

調査区中央で検出した。SK2009を切り、SK2010に切られている。規模は東西約1.0m×南北約0.7mである。

SK2014 (第39図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.7m×南北約0.6m、深さ約0.1mである。図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SK2015 (第39図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.5m、深さ約0.2mである。

SK2016 (第40図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.3m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。

SK2017 (第40図)

調査区中央で検出した。SX2001に切られている。平面形状は楕円形で、東西約0.8m×南北約0.5m、深さ約0.1mである。

出土遺物は第40図-206で土師器の甕である。図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

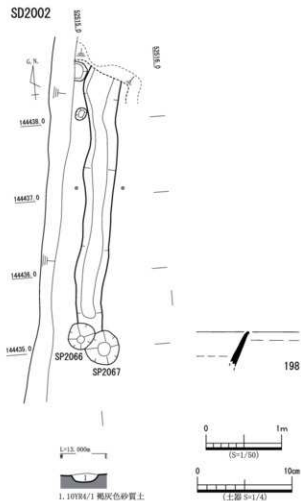
SK2018 (第34図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.5m×南北約0.8mである。

SK2019 (第40図)

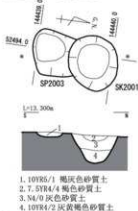
調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.7m×南北約0.4m、深さ約0.3mである。

SD2002



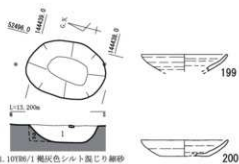
第37図 SD2002 平・断面図及び出土遺物

SK2001・SP2003



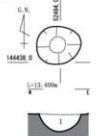
1. 10YR5/1 黒灰色砂質土
2. 7.5YR4/4 褐色砂質土
3. N4/0 灰色砂質土
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土

SK2002



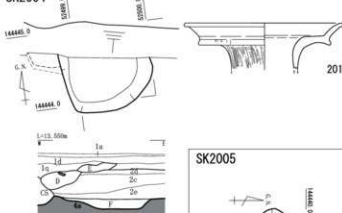
1. 10YR5/1 黒灰色シルト質じり細砂
2. 地山

SK2003



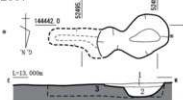
1. 10YR5/1 黒灰色砂質土 (3 cmの礫 1%)

SK2004



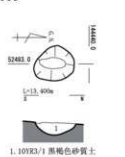
- 1a. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 1b. 2.5Y5/2 暗灰色砂質土 (礫を多量に含む)
- 1c. 2.5Y5/2 暗灰色砂質土
- 2c. 2.5Y3/3 緑オリーブ褐色砂質土
- 2d. 2.5Y5/2 暗灰色粘質シルト
- 2e. 2.5Y5/2 暗灰色粘質砂
- 2f. 2.5Y3/2 赤褐色砂質土
- 4a. 2.5Y6/2 灰黄色細砂
3. 2.5Y6/3 に近い黄色土 (1 ~ 20 cm層の角礫を含む)
5. 2.5Y6/3 に近い黄色土 (しまりがよい)
- F. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土

SK2007



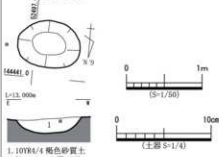
1. 10YR5/1 黒灰色シルト質じり細砂 (上部の埋土の残り?)
2. 10YR6/4 に近い黄褐色細砂 (ややシルト状の土を含む)
3. 10YR5/8 明黄褐色細砂 (1 ~ 10 cmの円礫を 1% 程度含む) 地山

SK2005



1. 10YR3/1 黒褐色砂質土

SK2006



1. 10YR4/4 褐色砂質土 (2 ~ 4 cmの礫 10%)

第 38 図 SK2001 ~ 2007 平・断面図及び出土遺物

図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SK2020 (第 40 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 m である。

SK2021 (第 40 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.7 m、深さ約 0.4 m である。

SK2022 (第 40 図)

調査区中央で検出した。SK2009 に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約 0.4 m × 南北約 0.7 m、深さ約 0.2 m である。

SK2023 (第 40 図)

調査区南側で検出した。SD2001 に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約 1.2 m × 南北約 2.0 m、深さ約 0.15 m である。

出土遺物は第 40 図 -207 で土師質土器の足釜である。図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、13 世紀以降と考えられる。

SK2024 (第 40 図)

調査区南側で検出した。SD2001 に切られている。平面形状は楕円形で、検出した規模は東西約 0.5

m×南北約0.6m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第40図-208で土師質土器の足釜である。

埋没時期は出土遺物が僅少で年代が特定できないが、14世紀以降と考えられる。

SK2025 (第41図)

調査区中央で検出した。SK2012、SP2019に切られている。平面形状は長方形で、東西約0.7m×南北約0.8m、深さ約0.1mである。深度が浅いことや断面形状が不整形であることから自然堆積の可能性も推測される。土層状況は不明である。

出土遺物は第41図-209で、突帯状の土製品と考えられるものが出土した。

SK2026 (第41図)

調査区南西側で検出した。SK2033を切っている。平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.4mである。

SK2027 (第41図)

調査区南西側で検出した。1面目のSX1002に切られている。平面形状は不整形で、検出した規模は東西約1.3m×南北約1.4m、深さ約0.2mである。埋土は褐灰色砂質土で礫を多く含む。

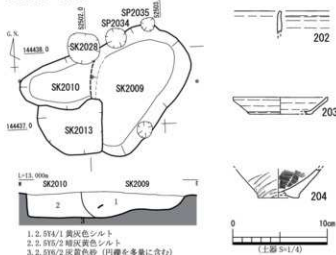
出土遺物は第41図-210で須恵器の杯である。外面に火摩痕が確認できる。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、9世紀以降と考えられる。

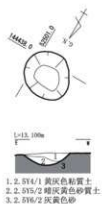
SK2028 (第41図)

調査区中央で検出した。SK2010を切っている。平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.4m、深さ約0.1mである。

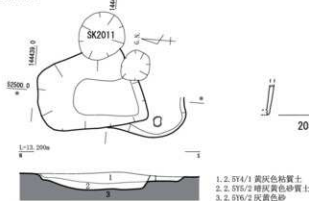
SK2009・2010



SK2011



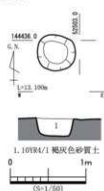
SK2012



SK2014



SK2015



第39図 SK2009～2015 平面・断面図及び出土遺物

SK2029 (第41図)

調査区中央で検出した。1面目のSX1004に切られている。平面形状は隅丸長方形になると推測され、東西約4.0m×南北約1.3m、深さ約0.15mである。

SK2030 (第34図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.3mである。

SK2031 (第41図)

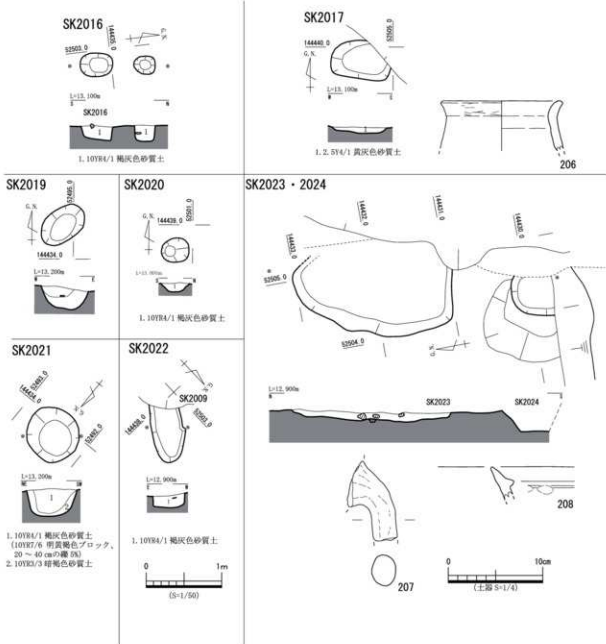
調査区中央で検出した。平面形状は不整形な楕円で、東西約0.6m×南北約0.9m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第41図-211で須恵器の高杯である。脚部と考えられ、スカシが2ヶ所確認できる。TK43・27頃と考えられる。

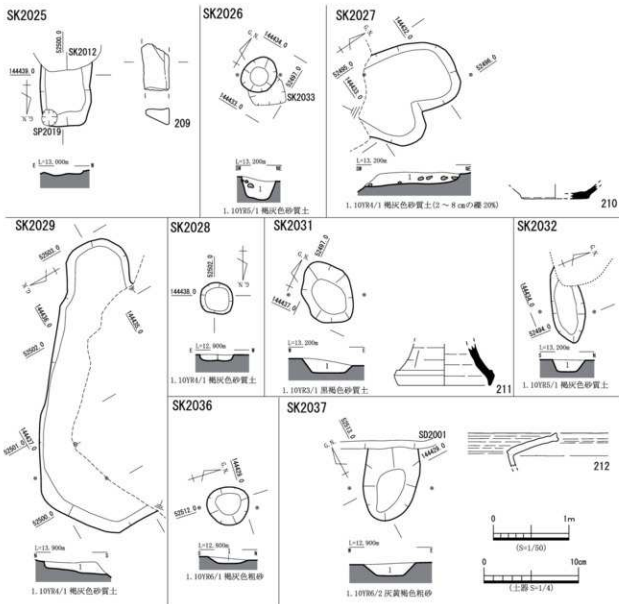
埋没時期は出土遺物が僅少であるが、古墳時代中期末と考えられる。

SK2032 (第41図)

調査区西側で検出し、西側は1面目のSK1012に削平されている。平面形状は楕円形で、検出した規模は東西約1.0m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。



第40図 SK2016～2024 平・断面図及び出土遺物



第41図 SK2025～2029・2031・2032・2036・2037 平・断面図及び出土遺物

SK2033 (第34図)

調査区南西で検出した。SK2026に切られている。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約0.2m×南北約0.4mである。

SK2036 (第41図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、規模は直径約0.5m、深さ約0.1mである。

SK2037 (第41図)

調査区南東側で検出した。SD2001に切られている。平面形状は楕円形で、検出した規模は東西約0.7m×南北約1.0m、深さ約0.2mである。

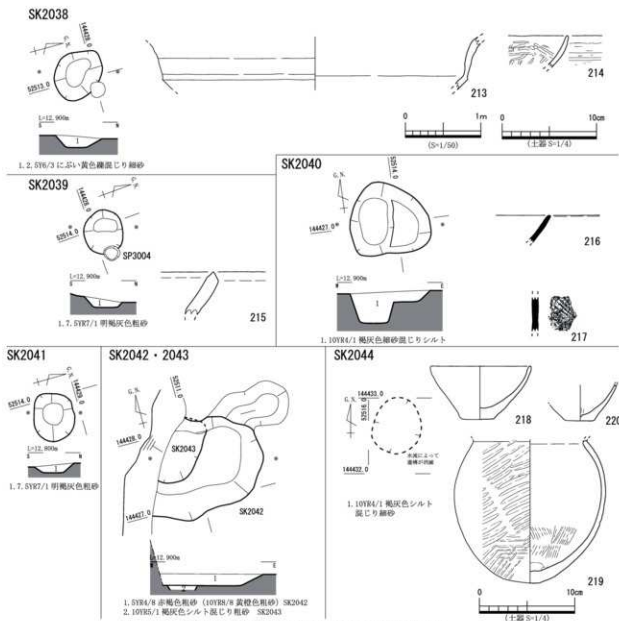
出土遺物は第41図-212で弥生土器の壺で、胎土に角閃石や金雲母を含む。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、212から弥生時代後期後半と推測される。

SK2038 (第42図)

調査区南東側で検出した。3面目で確認したSP3007に切られている。平面形状は楕円形で、東西約0.6m×南北約0.7m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第42図-213、214である。213は弥生土器の鉢である。214は黒色土器Aの椀である。内面にヘラミガキが見られる。



第 42 図 SK2038 ~ 2044 平・断面図及び出土遺物

埋没時期は遺物の年代が特定できないが、古代以降と推測される。

SK2039 (第 42 図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.6 m × 南北約 0.5 m、深さ約 0.15 m である。

出土遺物は第 42 図 -215 で土師質土器の土鍋である。

埋没時期は遺物の出土量が僅少であるが、12 世紀以降と考えられる。

SK2040 (第 42 図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 1.0 m × 南北約 1.0 m、深さ約 0.4 m である。埋土は褐灰色細砂混じりシルト層の単層であるが、段状の断面形状をしていることから柱の抜取穴の可能性が推測される。

出土遺物は第 42 図 -216・217 で須恵器の杯と甕である。217 の甕は外面にタタキが見られる。

埋没時期は 216 から 9 世紀後半以降と考えられる。

SK2041 (第 42 図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径東西約 0.6 m × 南北約 0.55 m、深さ約 0.1 m である。

SK2042 (第42図)

調査区南東側で検出し、西側は調査区外で、SK2043を切っている。平面形状は不整形形で、検出した規模は東西約1.4m×南北約1.2m、深さ約0.1mである。

SK2043 (第42図)

調査区南東側で検出し、西側は調査区外でSK2042に切られている。平面形状は楕円形になると推測される。全掘をしていないが、東西約0.4m×南北約0.9m、深さ約0.05m以上である。

SK2044 (第42図)

調査区東側で検出した。湧水の影響で位置関係のみ把握するに留まり詳細は不明である。

出土遺物は第42図-218～220である。218は弥生土器の鉢である。219は古式土師器の甕である。下川津Ⅵ式と考えられる。220は弥生土器の甕である。

埋没時期は219から古墳時代前期初頭と考えられる。

SK2045 (第43図)

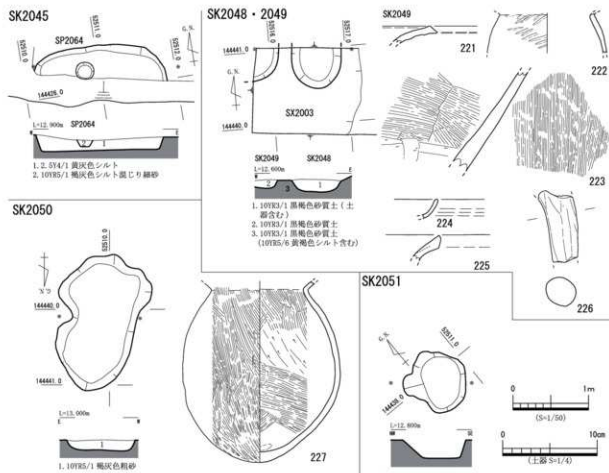
調査区南東側で検出し、南側は調査区外で、SP1064に切られている。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約1.8m×南北約0.45m、深さ約0.1mである。

SK2048 (第43図)

調査区北東側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.66m×南北約0.55m、深さ約0.15mである。

SK2049 (第43図)

調査区北東側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.3m×南北約0.45m、深さ約0.1mである。



第43図 SK2045・2048～2051 平・断面図及び出土遺物

出土遺物は第43図-221～226である。221～223は弥生土器で甕や壺である。222の甕は外面にタタキ、内面にハケが見られる。223は内外面にハケが見られる。224は瀬戸美濃系陶器の皿である。高松城様相8と考えられる。225、226は土師質土器の鍋と足釜である。

埋没時期は224から19世紀前半～中頃以降と考えられる。

SK2050 (第43図)

調査区北側で検出した。平面形状は不整な楕円形で、検出した規模は東西約1.1m×南北約1.8m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第43図-227で古式土師器の甕である。外面全面にハケが見られ、内面にケズリ後ハケが見られる。

埋没時期は遺物の出土量が僅少であるが、古墳時代前期初頭頃と推測される。

SK2051 (第43図)

調査区東側で検出した。平面形状は不整な楕円形で、東西約0.8m×南北約0.8m、深さ約0.3mである。

SP2001 (第34図)

調査区北西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.5mである。

SP2002 (第34図)

調査区北西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.5mである。

SP2003 (第34図)

調査区西側で検出した。SK2001に切られている。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約0.6m×南北約0.5m、深さ約0.1mである。

SP2004 (第34図)

調査区南西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.1mである。

SP2005 (第34図)

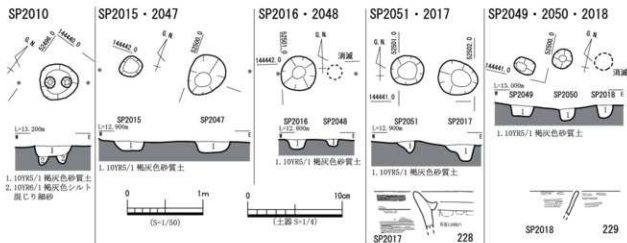
調査区西側で検出した。SP2006・2011との切り合い関係を判断するのは難しく、前後関係や規模は不明である。

SP2006 (第34図)

調査区西側で検出した。前述したように、SP2005・2011と近接しており、前後関係や規模は不明である。

SP2007 (第34図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。



第44図 A-2SP平・断面図及び出土遺物①

SP2008 (第34図)

調査区北西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4mである。

SP2009 (第34図)

調査区北西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4mである。

SP2010 (第44図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.5mで深さ約0.2mである。2本分の細い柱痕跡を検出した。

SP2011 (第34図)

調査区北西側で検出した。検出した規模は東西約0.5m×南北約0.3mである。前述したようにSP2005・SP2006との前後関係等は不明である。

SP2014 (第34図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.3mである。

SP2015 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SP2016 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.45m、深さ約0.2mである。

SP2017 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、規模は東西約0.5m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第44図-228で土師質土器の足釜である。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、13世紀以降と考えられる。

SP2018 (第44図)

調査区中央で検出したが、湧水の影響で平面規模や形状は不明である。深さは約0.2mである。

出土遺物は第44図-229の瓦器の椀で内外面にヘラミガキが見られる。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、古代末以降と推測される。

SP2019 (第45図)

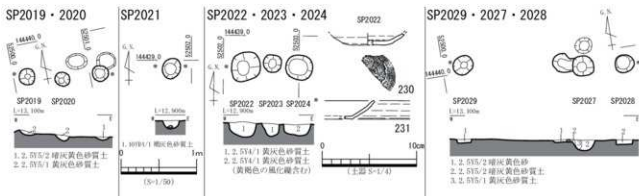
調査区中央で検出した。SK2025を切っている。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.05mである。

SP2020 (第45図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.05mである。

SP2021 (第45図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。



第45図 A-2SP 平・断面図及び出土遺物②

SP2022 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は隅丸方形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 45 図 -230・231 で土師質土器の杯である。230 は底部に回転ヘラ切りが見られる。

SP2023 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。

SP2024 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP2025 (第 46 図)

調査区中央で検出したが、湧水の影響で平面形状や規模は不明で、深さ約 0.1 m である。位置は SP2032 から西に約 0.8 m である。

SP2026 (第 34 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.2 m、深さ約 0.1 m である。埋土が極めて浅いことから自然堆積の一部である可能性がある。

SP2027 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 m である。

SP2028 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.25 m、深さ約 0.05 m である。埋土が極めて浅いことから自然堆積の一部である可能性がある。

SP2029 (第 45 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.05 m である。埋土が極めて浅いことから自然堆積である可能性がある。

SP2030 (第 46 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.35 m × 南北約 0.25 m、深さ約 0.1 m、深さ約 0.2 m である。

SP2031 (第 46 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.35 m、深さ約 0.2 m である。

SP2032 (第 46 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.25 m × 南北約 0.35 m、深さ約 0.1 m である。

SP2033 (第 46 図)

調査区中央で検出したが、平面形状は円形で直径約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。

SP2034 (第 46 図)

調査区中央で検出した。SK2009 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP2035 (第 46 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m、深さ約 0.1 m である。

SP2036 (第 34 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP2037 (第 34 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.2 m × 南北約 0.3 m である。

SP2039 (第 34 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP2040 (第 34 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP2042 (第34図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4 mである。

SP2043 (第34図)

調査区南西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3 mである。

SP2046 (第34図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4 mである。

SP2047 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.5 m×南北約0.6 m、深さ約0.2 mである。

SP2049 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.3 m×南北約0.2 m、深さ約0.15 mである。

SP2050 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3 m、深さ約0.15 mである。

SP2051 (第44図)

調査区北側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4 m、深さ約0.15 mである。

SP2053 (第46図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.25 mである。

出土遺物は第46図-232・233で土師質土器である。232は杯、233は小皿である。23は川津Ⅱ-6と考えられる。

埋没時期は233から12世紀中頃～後半と考えられる。

SP2054 (第46図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.25 m、深さ約0.15 mである。

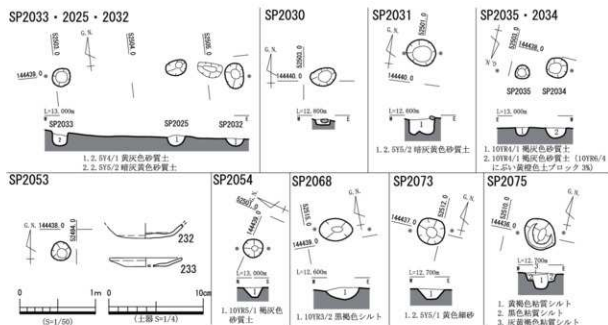
図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SP2055 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.4 m×南北約0.3 mである。

SP2056 (第34図)

調査区南東側で検出し、西側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規



第46図 A-2 平・断面図及び出土遺物③

楕は東西約0.1mである。

SP2057 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.3mである。

SP2058 (第34図)

調査区南東側で検出し、西側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.2mである。

SP2059 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4mである。

SP2060 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2061 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2062 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2063 (第34図)

調査区南東側で検出し、西側は調査区外である。平面形状は楕円形になると推測され、検出した規模は東西約0.2mである。

SP2064 (第34図)

調査区南東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。

SP2065 (第34図)

調査区東側で検出した。1面目のSK1024に切られている。平面形状は楕円形で、直径約0.3mである。

SP2066 (第34図)

調査区東側で検出した。SP2067を切っている。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2067 (第34図)

調査区東側で検出した。SP2066に切られている。平面形状は円形で、直径約0.4mである。

SP2068 (第46図)

調査区北東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.3m、深さ約0.2mである。

SP2069 (第34図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4mである。

SP2070 (第34図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。

SP2071 (第34図)

調査区南側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。

SP2072 (第34図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2073 (第46図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.35m、深さ約0.2mである。

SP2074 (第34図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP2075 (第46図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

SX2001 (第47・48図)

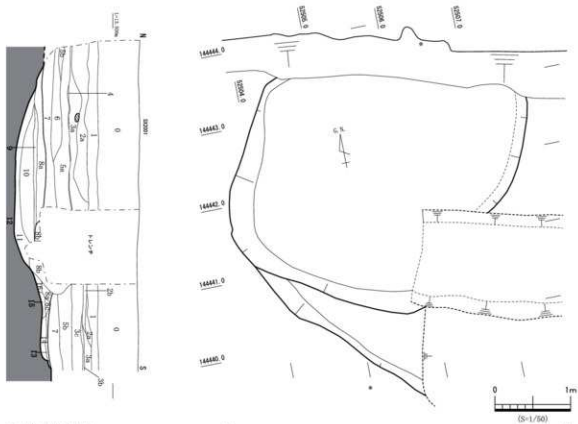
調査区北側で検出し、遺構の東側の上部は攪乱により削平されている。検出した規模は東西約3.7

m×南北約4.2 m、深さ約0.8 mである。ただし、東西幅については、台風等による水没及び地盤形成の土質が軟弱なため、かなり平面形が変化し、大形化してしまったため、断面図の範囲が本来の遺構の規模である。

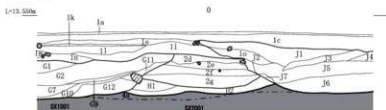
南側にやや浅い窪み状の湧水箇所があり、調理具等の大形の破片が多数出土しており、水場のような使用が想定される場所である。(渡邊)

出土遺物は第48図-234～254である。234は磨製石器の小型方柱状石斧である。石材は結晶片岩である。235～237は須恵器で杯蓋、捏鉢、大甕である。236は東播系と考えられる。237の大甕は底部径が推定で40.2 cmになり、内面にハケが見られる。238・240～251は土師質土器である。238・

SX2001



- 0. 花崗土 (運動場造成)
- 1. 2. S15/2 暗灰黄色砂質土 (礫を多量に含む)
- 2a. 2. S16/1 黄灰色粘質シルト (礫を多量に含む)
- 2b. 2. S16/1 黄灰色粘質シルト (礫を非常に多量に含む)
- 3a. 2. S16/1 黄灰色粘質シルト
- 3b. 2. S15/1 黄灰色粘質シルト
- 3c. 2. S16/1 黄灰色砂礫土
- 4. 花崗土
- 5a. 2. S15/2 暗灰黄色砂礫土 (炭化物含む)
- 5b. 2. S15/2 暗灰黄色粘質土
- 6. 2. S15/2 暗灰黄色砂礫土 (土器含む)
- 7. 2. S14/1 黄灰色砂質土 (炭化物含む)
- 8a. 2. S15/2 暗灰黄色砂質土 (径3～5 cmの円礫を含む)
- 8b. 2. S15/1 黄灰色砂質土 (礫を含む)
- 8c. 2. S14/1 黄灰色砂質土
- 9. 2. S14/1 黄灰色砂質土 粘性有り
- 10. 2. S17/2 灰黄色砂
- 11. 2. S14/1 黄灰色粘質土
- 12. 2. S16/2 灰黄色砂 (埋山)
- 13. 2. S14/1 黄灰色粘質土
- 14. 2. S14/1 黄灰色粘質土
- 15. 2. S17/1 灰白色砂
- 16. 2. S15/2 暗灰黄色粘質土



- 0. 花崗土
- 1a. 2. S16/1 黄灰色シルト
- 1b. 2. S15/2 暗灰黄色砂質土
- 1c. 2. S15/2 暗灰黄色砂礫土
- 1d. 2. S15/2 暗灰黄色砂礫土
- 1k. 2. S15/4 黒褐色砂
- 1l. 2. S15/1 黄灰色砂質土
- 1m. 2. S15/1 黄灰色砂礫土 (円礫含む)
- 1n. 2. S15/1 黄灰色砂礫土
- 1o. 2. S15/1 黄灰色砂質土 (円礫を多量に含む)
- 2a. 2. S15/2 暗灰黄色粘質シルト
- 2b. 2. S15/2 暗灰黄色砂2f, 2. S13/2 黒褐色砂礫土
- 2c. 2. S14/2 暗灰黄色砂礫土
- 4a. 2. S16/2 灰黄色細砂
- G1. 2. S16/2 灰黄色砂礫土 (5～10 cm程の円礫を含む)
- G2. 2. S16/2 灰黄色砂礫土 (5～8 cm程の円礫を多量に含む)
- G7. 2. S15/1 黄灰色粘質シルト (5 cm程の円礫を多量に含む)
- G9. 2. S15/2 暗灰黄色砂礫土
- G10. 2. S14/1 黄灰色粘質シルト
- G11. 2. S13/2 黒褐色砂
- G12. 2. S13/2 黒褐色砂 (炭分を多量に含む)
- H1. 2. S13/3 暗オリーブ褐色砂質土
- H2. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト
- J1. 2. S15/1 黄灰色砂礫土
- J2. 2. S16/3 におい黄灰色砂礫土
- J3. 2. S16/3 におい黄灰色砂礫土
- J4. 2. S15/1 黄灰色砂礫土
- J5. 10T84/1 褐色粘質土
- J6. 10T84/1 褐色粘質土 (5～20 cm程の円礫を多量に含む)
- J7. 2. S15/2 暗灰黄色砂質土

第47図 SX2001 平・断面図



第 48 図 SX2001 出土遺物

245～250 は足釜である。238・245・247 の時期は楠井Ⅰと考えられる。239 は焼成良好な羽釜の破片である。240～242 は杯である。243 は楠井Ⅱ - 1 頃と考えられる。244 は鉢である。245 は外面に板ナデがあり、内面にハケが見られる。251 は器種不明である。252 は瓦器の椀で内面にミガキが見られる。253・254 は磁器の碗で SX1001・1005 の混入物の可能性が考えられる。253 は高台脚部に離れ砂が認められ、呉須は淡青青色である。254 は内面蛇の目軸ハギである。

埋没時期は 13 世紀中頃以降の遺物がほとんどであるが、236・239 から 14 世紀以降と考えられる。SX2002 (第 49 図)

調査区中央で検出した。規模は東西約 2.0 m × 南北約 2.5 m、深さ約 0.3 m である。平面形状は

不整な方形である。他の遺構に比べ規模は大きいが、断面形状は人工的な掘り方でなく、遺物が出土していないことから自然堆積の可能性がある。

SX2003 (第 34・49 図)

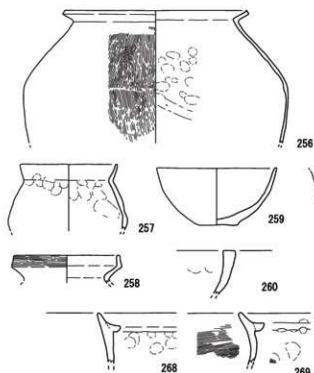
調査区北東側で検出した。湧水のため規模や形状は不明である。遺物は出土しているものの、遺構か、遺物包含層であるかの判断はできなかった。

出土遺物は第 49 図 -255 で弥生土器の甕が出土した。

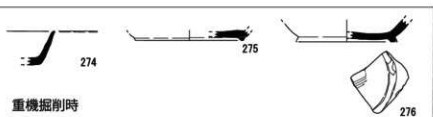
その他の遺物 (第 50 図)

第 50 図 - 256 ~ 273 は遺構検出時に出土した遺物である。257 を除く、256 ~ 260 は弥生土器である。256 ~ 258 は甕である。256 は外面にハケが見られ、胎土に角閃石や金雲母を含む。257 は土師器の甕である。258 は吉備型甕である。259・260 は鉢であり、260 は胎土に金

遺構検出時

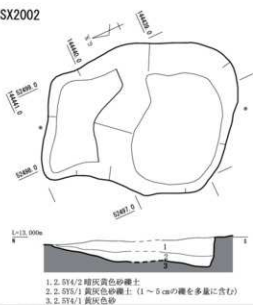


重機掘削時



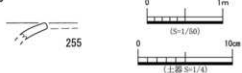
第 50 図 A-2 遺構検出時・重機掘削時出土遺物

SX2002

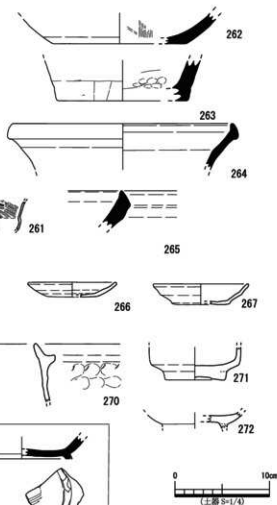


1. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂礫土
2. 5Y5/1 黄灰色砂礫土 (1~5cmの礫を多量に含む)
3. 2. 5Y4/1 黄灰色砂

SX2003



第 49 図 SX2002・2003 平・断面図及び出土遺物



雲母を含む。261は古式土師器の小型丸底甑で内面にハケが見られる。262～265は須恵器ですり鉢、甕、壺、鉢である。266～270は土師質土器で小皿、杯、足釜である。268の胎土は金雲母を含む。時期は楠井Ⅰ期と考えられる。269は内面にハケが見られる。271は陶器の香炉と考えられ、底部は貼り付け高台である。273は観察表のみの掲載だが石製品で、石材は流紋岩である。

第50図-274～276は重機掘削時に出土したもので須恵器の杯と壺である。

第6節 A-3 調査区の遺構・遺物

3面目は調査区西側と東側でピット等の遺構を検出した(第34図)。当該面の遺構は赤線で示している。遺構は溝1条、土坑4基、ピット11基を検出した。

SD3001は調査区東側で確認し、幅約0.3m、東西約5.1m、深さ約0.2mである。溝の延伸方向は調査区外のため不明である(第34図)。

土坑はSK3001～3005を検出し、平面形状は楕円形や方形で東西約0.4～0.5m×南北約0.2m～0.5mである(第34図)。

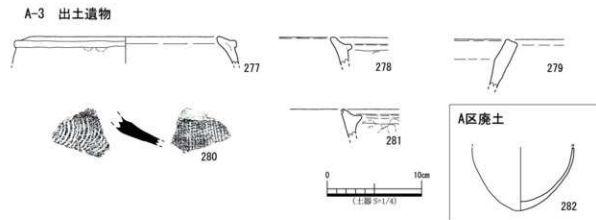
ピットはSP3001～3013を検出し、平面形状は円形や楕円形で、直径約0.2～0.4mである(第34図)。

出土遺物は第52図-277～281である。277～279はSD3001から出土した土師質土器である。277～278は足釜で、279は捏鉢で、胎土に金雲母を含む。280はSP3002から出土した須恵器の甕である。内面に青海波紋が見られ、外面に細かい正格子と考えられるタタキが見られる。281は遺構検出中に出土した土師質土器の足釜である(第34図)。

以上の遺物は土師質土器等の中世を示す遺物が見られることから、2面目の調査中に検出し得なかった遺構と考えられ、調査の便宜上3面目としているが、2面目に帰属する遺構と推測される。

その他の遺物

第51図-282はA調査区廃土から出土した遺物で、弥生土器の鉢である。



第51図 A-3 出土遺物・A調査区その他の遺物

第7節 B調査区基本土層

B区の基本土層は上層から、耕作土（第0層）、褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルト（第52・53・54図1層、1'層、33層）が堆積し、その下層が地山面という堆積状況である。ただし、調査区の東西で、地形の微細な起伏があるとともに、北に向かって低くなっており、上記の第1層、1'層、33層の堆積状況が場所によって異なっている。これらの堆積土が、面的に広がる範囲（SH1070周辺、SH1034以東）が広く認められ、調査では便宜的に、耕作土直下を1面目として調査した後、上記の褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルト直下を2面目として調査を実施した。そのため、1面目で、地山を検出した範囲では、弥生時代後半期以降の遺構を検出し、褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルトに掘り込まれた遺構は、古代以降、その下層、すなわち2面目で古墳時代中期以前の遺構を検出している。本来は、1面目で2面目を検出できる可能性もあったが、遺構埋土の上半部が擾乱されることで、褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルト層が形成されたと考えられ、遺構の検出が困難であったものと考えられる。なお、報告は調査順序に基づき、B-1・B-2面として報告を行うが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけての集落跡は本来的には同一面に展開していたものである。

ただし、調査区南側に向かって遺構の掘り込みが浅くなる傾向があり、本来は調査で検出した遺構面よりも高い位置に掘り込み面があったものと考えられ、特に南側は削平が顕著であると考えられる。

以上の成果から、当該調査区は、東西の地形の起伏に加え、南北方向の地形の起伏、土地の平準化に伴う削平が一定程度見込まれるため、本来的には遺構面が複数あったものと考えられる。（渡邊）

第8節 B-1調査区の遺構・遺物

B-1調査区で検出した遺構は堅穴建物跡3棟、掘立柱建物跡2棟、柵列跡2列、溝11条、土坑25基、ピット42基である（第55図）。主な時代は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭、古代、近世である。遺構分布状況は調査区中央から西にかけて建物跡やそれに関連すると推測される土坑等が広がる。東側は後世の開削等で全容は不明だが東西方向と南北方向の溝跡が多数検出できることから、畠等の土地利用が推測される。

SH1034（第56図）

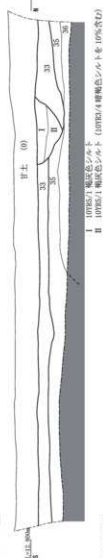
調査区中央で検出した。遺構の西半分が調査区外になりSK1044等の削平を受けており全体の様相は不明であるが、堅穴建物状遺構を呈するものである。検出した規模は東西約1.8m×南北約2.0m、深さ約0.3mである。埋土は4層に分層でき、褐灰色～にぶい黄褐色の極細砂～シルト質極細砂である。遺構中央部の畦畔の両側で、遺構の在り方が大きく異なるため、建物遺構であるかは判断が難しい。SP1043、P5等が支柱穴になる可能性が想定できる。

確実に遺構に伴うピットは5基であるが、いずれも配置及び規模等から機能は不明と言わざるを得ない。P1の平面形状は円形で、直径約0.2mである。P2の平面形状は円形で、直径約0.2mである。P3の平面形状は円形で、直径約0.1mである。P4の平面形状は楕円形で、直径約0.2mである。P5の平面形状は楕円形で、直径約0.4mである。

SH1034を取り囲むようにSD1040が「コ」の字型に掘られ、位置関係や建物と溝の深さが同一であることから建物に伴うものと考えられるが、仮に建物遺構であるとすれば、溝の切れ方から西側が入口である可能性が考えられる。（渡邊）

出土遺物は第56図-283～290である。283～288は弥生土器である。283はサブトレンチ内から出土した壺である。284～289は住居の北東ブロックを掘削した際に出土したものである。284と

西区西壁

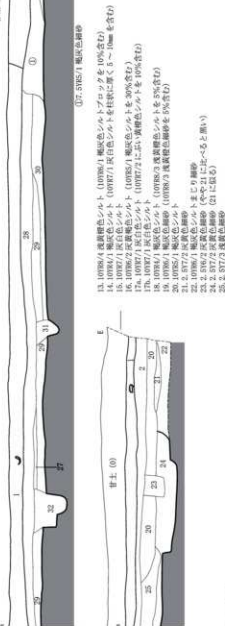


0. 露出上 黒灰色細砂
1. 10785/1 黒灰色シルト
2. 10786/1 黒灰色シルト
3. 10786/1 黒灰色シルト
4. 10785/1 黒灰色細砂まじりシルト (灰・燻灰を含む) 一様土
5. 10785/2 灰黄褐色細砂 (10786/1 黒灰色細砂を10%) 塩土? (灰黄)
6. 10785/1 黒灰色細砂 (岡山アロツクを40%含む)
7. 10785/2 灰黄褐色細砂 (10786/1 黒灰色シルトを10%含む)
8. 10785/2 灰黄褐色細砂 (10786/1 黒灰色シルトを10%含む)
9. 10785/2 灰黄褐色細砂 (10786/1 黒灰色シルトを10%含む)
10. 10786/1 黒灰色シルト (10786/3 浅黄褐色シルトを25%含む)
11. 10786/1 黒灰色シルト (10786/3 浅黄褐色シルトを25%含む)
12. 10786/1 黒褐色シルト

西区北壁



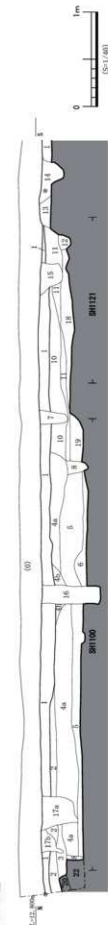
西区東壁



26. 2. 837/1 灰白色細砂
28. 10786/1 黒灰色シルト
29. 10786/1 黒灰色シルト
30. 10786/1 黒灰色シルト
31. 10784/1 黒灰色シルト
32. 10787/1 灰白色シルト
33. 10787/1 灰白色シルト
34. 10787/1 灰白色シルト
35. 10786/1 黒灰色シルト
36. 2. 837/1 灰白色まじり細砂
37. 10785/1 黒灰色シルト

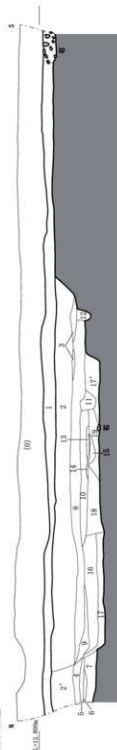
13. 10786/1 浅黄褐色シルト (10786/1 黒灰色シルトアロツクを10%含む)
14. 10786/1 黒灰色シルト (10787/1 灰白色シルトを柱状に厚く5~10cmを含む)
15. 10786/1 灰黄褐色シルト (10785/1 黒灰色シルトを30%含む)
16. 10786/1 灰黄褐色シルト (10787/2 灰白色シルトを10%含む)
- 17a. 10787/1 灰白色シルト (10787/2 灰白色シルトを10%含む)
- 17b. 10787/1 灰白色シルト
18. 10786/1 黒灰色細砂 (10786/3 浅黄褐色シルトを5%含む)
19. 10786/1 黒灰色細砂 (10787/3 浅黄褐色シルトを5%含む)
20. 10785/1 黒灰色シルト
21. 2. 837/2 灰黄褐色細砂
22. 10786/1 黒灰色シルト
23. 10786/1 黒灰色細砂 (全土に粘土と混る)
24. 2. 837/2 灰黄褐色細砂 (21に似る)
25. 2. 837/2 浅黄褐色細砂

西区南壁



第52図 B区土層断面図①

東区東壁



東区南壁①



1. 10783/1 黄褐色シルト
 1. 10783/1 黄褐色シルト
 1. 10783/1 黄褐色シルト (10783/1 黄褐色シルト 50%)
 2. 10784/1 黄褐色シルト (10783/1 黄褐色シルト 50%)
 3. 10782/1 黄褐色シルト (10785/2 灰黄褐色シルト 5%)
 4. 10787/1 灰白色シルト (10787/1 黄褐色シルトをアロップ状に含む)
 5. 10786/1 灰白色シルト
 6. 10786/1 黄褐色シルト
 7. 10787/1 に近い、黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 5%)
 8. 10785/1 黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 5%) --- 埋上
 9. 10785/1 黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 5%)
 10. 10785/2 灰黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 15%) 頂を少量含む
 11. 10786/1 黄褐色シルト (遺物含む)
 12. 10786/1 黄褐色シルト

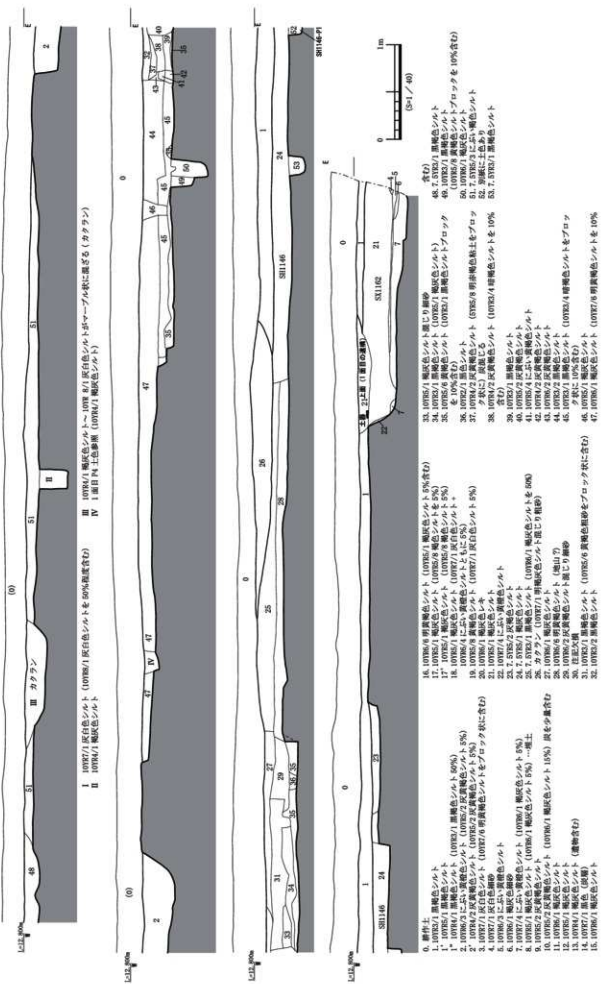
14. 10787/1 黄色 (遺物)
 15. 10786/1 黄褐色シルト (10785/1 黄褐色シルト 5%含む)
 16. 10785/1 黄褐色シルト (10785/1 黄褐色シルト 5%)
 17. 10785/1 黄褐色シルト (10785/1 黄褐色シルト 5%) 17 層と同じ
 18. 10785/1 黄褐色シルト (10787/1 灰白色シルト+10786/4 に近い、黄褐色シルトともに 5%)
 19. 10785/1 黄褐色シルト (10787/1 灰白色シルト 5%)
 20. 10785/1 黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 5%)
 31. 10786/2 灰黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 10%)
 32. 10786/1 黄褐色シルト (10786/1 黄褐色シルト 10%)
 33. 10784/1 黄褐色シルト (遺物含む)
 34. 10785/1 黄褐色シルト (遺物含む)
 35. 10782/1 黄褐色シルト
 36. 10786/1 黄褐色シルト (10784/1 黄褐色シルト 15%)
 37. 10786/1 黄褐色シルト埋じり面砂 (10784/1 黄褐色シルト 15%)

東区南壁②



1. 灰黄褐色・黄褐色シルト質砂層 (10785/2-4/1)
 2. 灰黄褐色シルト質砂層 (10785/2) 埋上
 3. 灰黄褐色砂層 (10786/2, 1mm~50mmの石を含む)
 4. に近い、黄褐色シルト (10787/2) 埋り床
 5. 黄褐色砂層 (10786/1, 1mm~4mmの石を多量に含む)

東区北盤

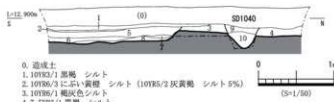
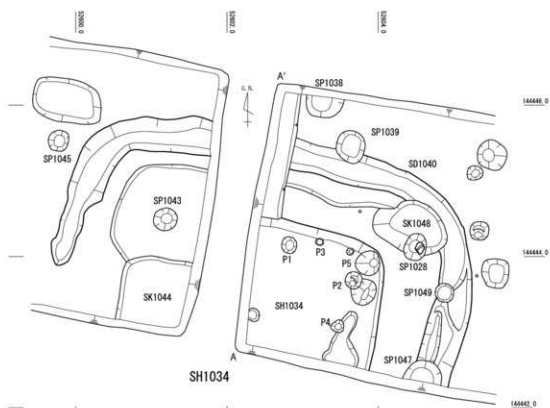


第 54 図 B 区土層断面図③

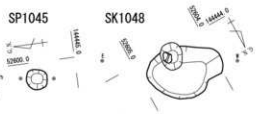
6. 新井土
7. 10762/1 黒褐色シルト
8. 10762/2 黒褐色シルト
9. 10762/3 黒褐色シルト
10. 10762/4 黒褐色シルト
11. 10762/5 黒褐色シルト
12. 10762/6 黒褐色シルト
13. 10762/7 黒色(原層)
14. 10762/8 黒褐色シルト
15. 10762/9 黒褐色シルト
16. 10762/10 黒褐色シルト
17. 10762/11 黒褐色シルト
18. 10762/12 黒褐色シルト
19. 10762/13 黒褐色シルト
20. 10762/14 黒褐色シルト
21. 10762/15 黒褐色シルト
22. 10762/16 黒褐色シルト
23. 10762/17 黒褐色シルト
24. 10762/18 黒褐色シルト
25. 10762/19 黒褐色シルト
26. カクラン (10762/1 明褐色シルトを主とし、黒褐色シルトを伴う)
27. 10762/2 黒褐色シルト
28. 10762/3 黒褐色シルト
29. 10762/4 黒褐色シルト
30. 10762/5 黒褐色シルト
31. 10762/6 黒褐色シルト
32. 10762/7 黒褐色シルト
33. 10762/8 黒褐色シルト
34. 10762/9 黒褐色シルト
35. 10762/10 黒褐色シルト
36. 10762/11 黒褐色シルト
37. 10762/12 黒褐色シルト
38. 10762/13 黒褐色シルト
39. 10762/14 黒褐色シルト
40. 10762/15 黒褐色シルト
41. 10762/16 黒褐色シルト
42. 10762/17 黒褐色シルト
43. 10762/18 黒褐色シルト
44. 10762/19 黒褐色シルト
45. 10762/20 黒褐色シルト
46. 10762/21 黒褐色シルト
47. 10762/22 黒褐色シルト
48. 10762/23 黒褐色シルト
49. 10762/24 黒褐色シルト
50. 10762/25 黒褐色シルト
51. 10762/26 黒褐色シルト
52. 10762/27 黒褐色シルト
53. 10762/28 黒褐色シルト
54. 10762/29 黒褐色シルト
55. 10762/30 黒褐色シルト
56. カクラン (10762/1 明褐色シルトを主とし、黒褐色シルトを伴う)
57. 10762/2 黒褐色シルト
58. 10762/3 黒褐色シルト
59. 10762/4 黒褐色シルト
60. 10762/5 黒褐色シルト
61. 10762/6 黒褐色シルト
62. 10762/7 黒褐色シルト
63. 10762/8 黒褐色シルト
64. 10762/9 黒褐色シルト
65. 10762/10 黒褐色シルト
66. 10762/11 黒褐色シルト
67. 10762/12 黒褐色シルト
68. 10762/13 黒褐色シルト
69. 10762/14 黒褐色シルト
70. 10762/15 黒褐色シルト
71. 10762/16 黒褐色シルト
72. 10762/17 黒褐色シルト
73. 10762/18 黒褐色シルト
74. 10762/19 黒褐色シルト
75. 10762/20 黒褐色シルト
76. 10762/21 黒褐色シルト
77. 10762/22 黒褐色シルト
78. 10762/23 黒褐色シルト
79. 10762/24 黒褐色シルト
80. 10762/25 黒褐色シルト
81. 10762/26 黒褐色シルト
82. 10762/27 黒褐色シルト
83. 10762/28 黒褐色シルト
84. 10762/29 黒褐色シルト
85. 10762/30 黒褐色シルト
86. カクラン (10762/1 明褐色シルトを主とし、黒褐色シルトを伴う)
87. 10762/2 黒褐色シルト
88. 10762/3 黒褐色シルト
89. 10762/4 黒褐色シルト
90. 10762/5 黒褐色シルト
91. 10762/6 黒褐色シルト
92. 10762/7 黒褐色シルト
93. 10762/8 黒褐色シルト
94. 10762/9 黒褐色シルト
95. 10762/10 黒褐色シルト
96. 10762/11 黒褐色シルト
97. 10762/12 黒褐色シルト
98. 10762/13 黒褐色シルト
99. 10762/14 黒褐色シルト
100. 10762/15 黒褐色シルト
101. 10762/16 黒褐色シルト
102. 10762/17 黒褐色シルト
103. 10762/18 黒褐色シルト
104. 10762/19 黒褐色シルト
105. 10762/20 黒褐色シルト
106. 10762/21 黒褐色シルト
107. 10762/22 黒褐色シルト
108. 10762/23 黒褐色シルト
109. 10762/24 黒褐色シルト
110. 10762/25 黒褐色シルト
111. 10762/26 黒褐色シルト
112. 10762/27 黒褐色シルト
113. 10762/28 黒褐色シルト
114. 10762/29 黒褐色シルト
115. 10762/30 黒褐色シルト



第55図 B-1 遺構配置図

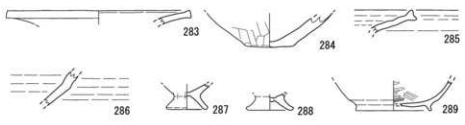


0. 造成土
 1. 10YR3/1 黒褐 シルト
 2. 10YR3/2 に近い黄褐色 シルト (10YR5/2 灰黄褐色 シルト 5%)
 3. 10YR6/1 褐色シルト
 4. 7.5YR3/1 黒褐 シルト
 5. 10YR5/2 に近い黄褐色 + 10YR4/1 褐色シルト 質極細砂
 6. 10YR5/1 褐色シルト 質極細砂
 7. 10YR6/1 褐色シルト 質極細砂 地山を 7% 含む
 8. 10YR8/2 浅黄褐色シルト + 10YR6/1 褐色シルト 質極細砂
 9. 10YR4/1 褐色シルト 質極細砂
 10. 10YR5/1 褐色シルト + 10YR7/2 に近い黄褐色シルト 質極細砂

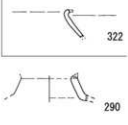


1. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト
 1. 10YR4/1 褐色粘質シルト (遺物多量に含む)
 2. 10YR4/1 褐色粘質シルト (地山ブロック含む)

SH1034



SD1040



282 - サブトレンチ内
 284 ~ 289 - 北東部一段下げ
 290 - 埋土
 0 10cm
 (土部 S=1/4)

第 56 図 SH1034・SD1040・SK1048・SP1045 平・断面図及び出土遺物

285は壺で、284は外面に板ナデが見られる。286は鉢である。287、288は製塩土器である。285・287は胎土に角閃石や金雲母を含む。289は黒色土器の椀で内面にミガキが見られる。黒色処理は内外面に見られ、胎土に金雲母を含む。290は埋土から出土した土師器の壺である。時期は川津Ⅱ-5頃と考えられる。289・290は混入品の可能性が高い。また、図化していないが、弥生土器の高杯が出土した。

埋没時期は遺物の年代を特定できないが、弥生時代後期中葉以降と考えられる。

SH1050(第57・58図)

調査区西側で検出した。建物の西側はSK1068によって切られている。平面形状は隅丸方形で、検出した規模は東西約5.0m×南北約4.2m、深さ約0.05mである。上面はかなり削平されたと考えられる。埋土は褐灰色粘質シルトの単層である。周溝や貼床は見られなかったが、上面がかなり削平されていることを考慮すると埋土と認識した層は貼床の可能性も考えられ、さらに南側へと遺構が延びる可能性もある。

建物に伴う遺構はピット5基、中央土坑1基、地床炉1基である。ピットは方形に配置されていることから主要なピットはP1・3・4・5と考えられる。いずれも平面で柱痕跡を確認することができたが、柱痕は遺存していなかった。P1の平面形状は円形で、東西約0.6m×南北約0.5m、深さ約0.5mである。灰黄褐色～黒褐色粘質シルトの4層に分層できる。P2の平面形状は楕円形で、直径約0.5m、深さ約0.2mである。2層に分層でき、1層は黒褐色粘質シルト、2層は灰黄褐色粘質シルトで鉄分を含む。P3の平面形状は楕円形で、東西約0.7m×南北約0.5m、深さ約0.4mである。6層に分層でき、にぶい黄褐色～黒褐色の粘質シルト～シルトである。P4の平面形状は楕円形で、直径約0.5m、深さ約0.4mである。2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を含み、2層は褐灰色粘質シルトである。P5は南側が調査区外で、検出できた規模は東西約0.5m×南北約0.6m、深さ約0.3mである。埋土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘質シルトで2層は地山ブロックを含む褐灰色粘質シルトである。

中央土坑(K1)は東西約1.5m×南北約0.7mの規模である。土坑周辺で土器が多数出土している。地床炉はK1の北側で検出した。直径約0.4mの範囲が焼け、焼土等を検出した。炉を囲うような石材等は検出できなかった。

出土遺物は第58図-291～296である。291・292はK1から出土した弥生土器の壺と鉢である。291は頸部にヘラミガキが見られる。時期は下川津Ⅳ式頃と推測される。292の鉢は内面にハケが見られる。293、294はP4から出土した弥生土器で、293は壺で胎土に金雲母や黒色粒等を含む。294は高杯で、脚部に円形のスカシが見られる。295・296は北西区から出土した弥生土器の甕と鉢である。図化していないが、P3から弥生土器の甕が出土した。

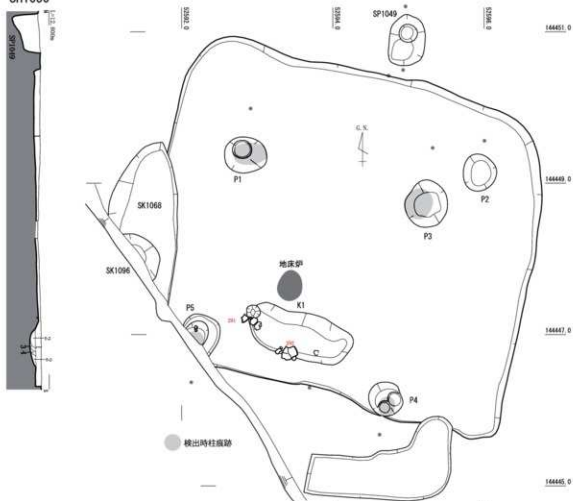
埋没時期は291の年代から弥生時代後期後半と推測される。

SH1070(第59・60図)

調査区西側で検出した。平面形状は隅丸方形である。東西約5.2m×南北約6.0m、深さ約0.2mである。周溝は南側と東側半分のみで検出した。また、周溝内や壁面に沿った位置で小型のピットをほぼ等間隔で検出しており、周壁の板止め等によるものと推測される。埋土は7層に分層でき、黄灰色～黒褐色の粘質シルトである。焼土を確認し、炉等の可能性が考えられたが、それらの痕跡は確認できなかった。

ピットは5基検出し、建物に伴う支柱穴はP1・2・3・4と考えられる。P1～P4の配置から方形に支柱穴を配置したと考えられる。P1の平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.4mである。埋土は5層に分層でき、黄灰色～暗灰色の粘質シルトである。P2の平面形状は円形で、直径約0.5m、深さ約0.3mである。埋土は5層に分層でき、黄褐色～暗褐色の粘質シルトである。P3の平面形状は円形で、直径約0.4mで深さ約0.5mである。埋土は4層に分層でき、暗褐色～黒褐色の粘質シ

SH1050



1:12,800

1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (遺物を多量に含む)
3. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト
4. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (3層ブロック含む)



1:12,800



1. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
3. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト (遺物含む)
4. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (遺物含む)
5. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
6. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト



1:12,800



1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (炭化物含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト



1:12,800



1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
3. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
4. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (鉄分含む)



1:12,800



1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (地山ブロック含む)

地床炉



1:12,800



1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
2. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
3. 10YR6/2 に近い黄褐色粘質シルト



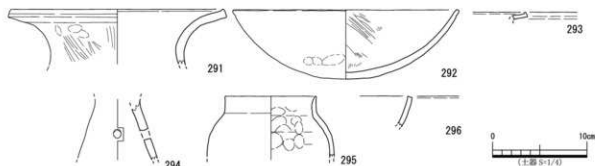
1:12,800



1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分含む)



第 57 図 SH1050 平・断面図



第 58 図 SH1050 出土遺物

ルトである。4層は柱痕と考えられる。P4の平面形状は円形で、直径約0.5mで深さ約0.4mである。埋土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘質シルト、2層は暗灰色粘質シルトである。P5の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。

出土遺物は第60図-297～312である。断面観察用のベルトを十字に設定し遺物を取り上げた。床面出土遺物は297～302である。297～300は弥生土器である。297は有孔鉢と考えられ、外面はタキ後タテハケ、内面はタテハケが見られる。298は甕で内面にヘラケズリが見られ、胎土に長石を多量に含む。時期は下川津V式新相頃と考えられる。299・300は鉢である。301～303は石製品の叩き石で、材質は砂岩である。重量は400～1400gを計る。302・303は観察表のみ掲載した遺物である。304はP1から出土した弥生土器の甕で胎土に金雲母や角閃石を含む。305は南東区から出土した弥生土器の甕である。時期は下川津V式古相頃と考えられる。306～309は北西区から出土した弥生土器である。306は鉢、307は甕である。308・309は甕で、前者は胎土に金雲母や角閃石を含む。310～312は埋土中から出土した弥生土器の甕である。310の甕は外面にミガキが見られる。312の鉢は外面にタキが見られる。また、図化していないが、南東区から弥生土器の高杯、埋土から弥生土器の複合口縁壺が出土した。

埋没時期は298・305から弥生時代後期後半～後期末頃と考えられる。

SB1018 (第61図)

調査区中央で検出した。構成する柱穴はP1～P10である。建物は東西棟で桁行2間×梁行3間以上と考えられる。1面目ではすべて認識できず、2面目の調査時にP2を確認した。柱間は全て約2.0mの等間隔である。建物構造は、身舎は正方形で東に廂を持つ建物と考えられる。柱穴の平面形状は円形又は楕円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。SK1025に切られて全様は不明であるが、P4・P5間に柱穴と考えられる掘り込みを確認している。

P2から第61図-327、M8が出土した。327は弥生土器の甕である。胎土に金雲母を含む。M8はP1から出土した有稜系定角式の鉄鏝である。鏝身部から茎部にかけて平坦である。生産時期が特定される遺物で弥生時代後期末～古墳時代前期のものと考えられる。

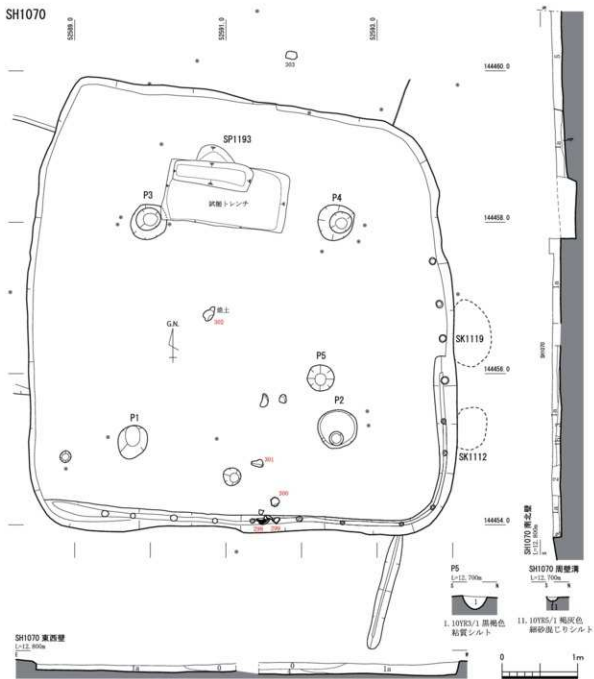
埋没時期は古墳時代前期以降と推測されるが、廂付建物を考慮すると古代等、時期の新しいものの可能性もある。

SB1041 (第62図)

調査区中央で検出した。北側は調査区外であるため不明である。構成する柱穴はSP1031、1032、1035～1037である。建物は南北棟で桁行2間以上×梁行1間である。柱間の間隔は桁行方向で1.2m(4尺)、梁行方向で1.5m(5尺)の等間である。また、梁行方向にビットと想定される掘り込みが検出でき、2間分あった可能性があるが、他のビットを検出することができず、上記の規模を想定している。

SP1031の平面形状は不整な円形で、直径約0.4m、深さ約0.3mである。埋土は暗褐色粘質シル

SH1070

SH1070 東西壁
L=12,800m

0. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト (1a層よりやや深い)
1a. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト (遺物含む)
1b. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト
2. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト

3. 2. S13/1 黄灰色粘質シルト
4. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト
5. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト + 2. S16/3 に近い黄灰色粘質シルト



L=12,790m



1. 2. S13/1 黒褐色粘質シルト
2. N3/0 増状色粘質シルト



L=12,790m



1. 2. S13/1 黒褐色粘質シルト
2. 2. S13/1 黒褐色粘質シルト (地山ブロック含む)
3. 2. S13/2 黒褐色粘質シルト
4. N3/0 増状色粘質シルト



L=12,790m



1. N3/0 増状色粘質シルト
2. 10YR5/6 黄褐色粘質シルト
3. N3/0 増状色粘質シルト (灰化物含む)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土
5. N3/0 増状色粘質シルト
+ 4層をブロック状に含む

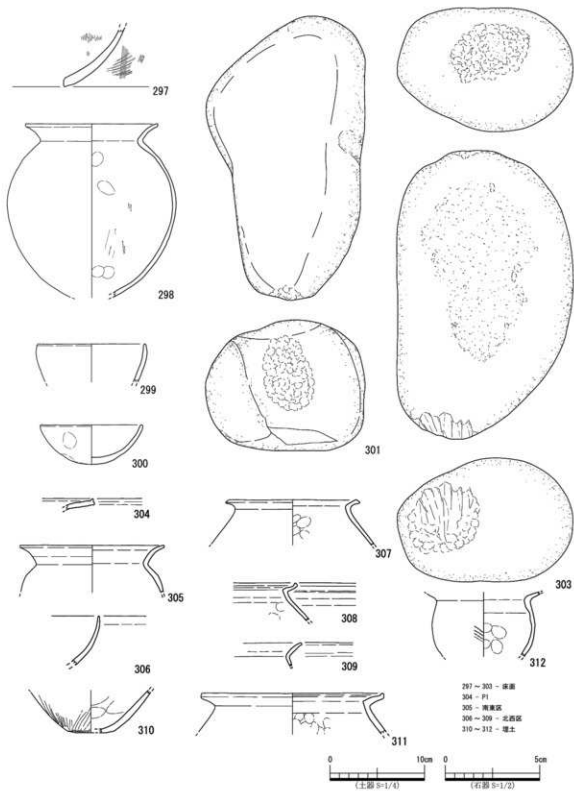


L=12,790m



- 1a. 2. S14/1 黄灰色粘質シルト
1b. 2. S14/1 黄灰色粘質シルト (4層をブロック状に含む)
2. 2. S13/2 増状黄色粘質シルト
3. 2. S13/1 黄灰色粘質シルト
4. N3/0 増状色粘質シルト

第59図 SH1070 平・断面図



第 60 图 SH1070 出土遺物

トの単層である。SP1032の平面形状は隅丸方形で、直径約0.5m、深さ約0.15mである。埋土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘質シルトで、2層は灰黄褐色粘質シルトである。SP1035の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。SP1036の平面形状は楕円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。SP1037の平面形状は隅丸方形で、東西約0.3m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。埋土は3層に分層できる。1層は褐灰色粘質シルトである。2層は炭を含む黒褐色粘質シルト層である。3層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。

柱間の間隔が唐尺であることを考慮すると奈良時代以降と推測される。

SA1042 (第63図)

調査区西側で検出した。東西方向に展開する柱穴列群である。構成する柱穴は5基で、西側からSP1094・SP1069・SP1071・SP1049・SP1072である。延伸方向は調査区外であるため不明である。柱間の間隔は1.1m～1.3mである。対になる柱穴が確認できないことから櫛列と考えられる。集落域の最も西側に位置する点も重要である。

SP1094は平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.6mである。SP1069の平面形状は円形で直径約0.3m、深さ約0.2mである。SP1071の平面形状は円形で、直径約0.3m×深さ約0.3mである。SP1049の平面形状は楕円形で、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.3mである。SP1072の平面形状は楕円形で東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第63図-338・339である。338はSP1069から出土した弥生土器の高杯である。339はSP1072から出土した弥生土器の甕である。

SA1042とSH1050は近接した関係であり、ほぼ同軸に位置することから建物に伴う何らかの施設の可能性はあるが、SA1042の年代が不明であること、一部が調査区外であることから一体としての評価が難しい。

SA1074 (第63図)

調査区西側で検出した。構成する柱穴は4基で、P1～3、SP1092である。櫛列の主軸方向は南西から北東方向である。延伸方向は調査区外であるため不明である。

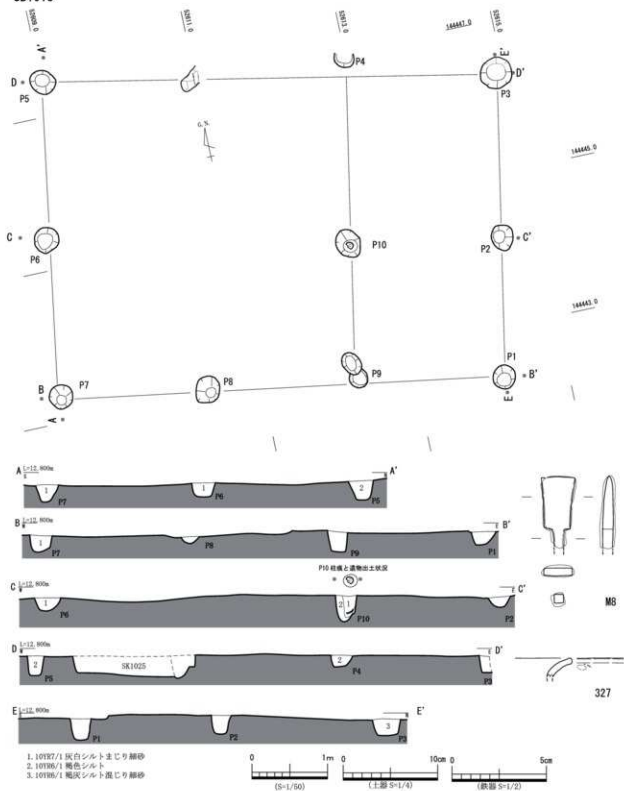
P1の平面形状は円形で、直径約0.5m、深さ約0.4mである。埋土は5層に分層でき、明黄褐色～黒褐色の粘質シルトである。そのうち、5層は炭化物を含んだ堆積層である。P2はP1から西に2.0mに位置する。平面形状は円形で、直径約0.6m、深さ約0.4mである。埋土は3層に分層でき、黄灰色～黒褐色の粘質シルトで、いずれも地山ブロックを含む。P3はP2から西に1.7mに位置する。規模は東西約0.6m×南北約0.6m、深さ約0.4mである。埋土は4層に分層でき、浅黄色～黒褐色の粘質シルトである。SP1092の平面形状は楕円形で、東西約0.8m×南北約0.6m、深さ約0.5mである。埋土は2層に分層でき、1層は暗灰色粘質シルトで、2層は黄灰色粘質シルトである。

柱穴の柱間距離は1.7～2.0mと比較的に規格性が認められる。また、柱穴の規模もほぼ同一である。当初は柱穴の規模や柱間が概ね等間隔であることから掘立柱建物跡になると推測された。しかし、対になる柱穴が検出できなかったため櫛列と考えられる。遮蔽する対象は同時期に位置するSH1070が挙げられるが、主軸方向が異なるため、本調査地内に存在した可能性は低いと考えられる。そのため、対象物は北側の調査区外に存在すると推測される。

出土遺物は第63図-313～317である。313～316はP1から出土した遺物である。313～315は弥生土器の鉢である。313は鉢の中でも小型で外面はタタキ後ナデで、内面はヘラケズリである。313の年代は下川津VI式か、これよりも新しい時期のものと考えられる。314は外面に板ナデ、内面に粗いハケが見られる。315は内面にハケ、外面に板ナデが見られる。316は古式土師器の小型丸底甕である。317はP2から出土した弥生土器の高杯である。

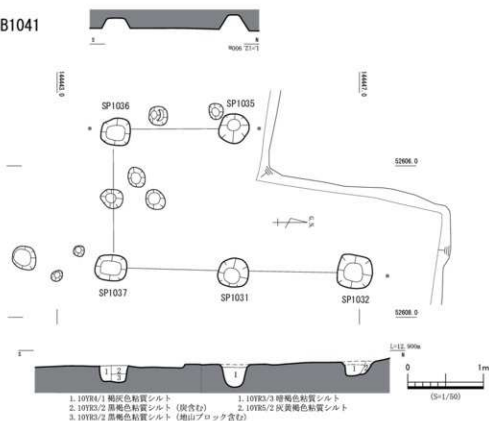
埋没時期は316から弥生時代後期末と推測される。

SB1018



第 61 図 SB1018 平・断面図及び出土遺物

SB1041



第62図 SB1041 平・断面図

SD1002 (第64図)

調査区東側で検出した。溝の延伸状況は開削等により不明である。規模は東西約1.0m×南北約0.3m、深さ約0.05mである。溝の主軸方向は東西方向である。以下、SD1003・1010等の調査区東側に位置する溝は方形を組むように検出されたことから、ある程度の規格性を持った溝と考えられ、畝等の土地利用が推測される。また、後世の開削も考慮しなければならないが、各溝跡の深さがほぼ同等であることも規格性を持つ溝であることを示すと考えられる。埋土が判明している溝跡はいずれも同一の埋土であることから同時期に埋没したと推測される。

出土遺物は第64図-318・319・M5である。318・319は弥生土器である。318は甕と考えられる。319は壺で多数の回線が見られ、胎土に金雲母を含む。M5は近代の丸釘である。

埋没時期は近代以降と考えられる。

SD1003 (第64図)

調査区東側で検出した。規模は東西約2.3m×南北約0.4mである。溝の主軸方向は東西方向である。溝の延伸状況は削平等で不明である。

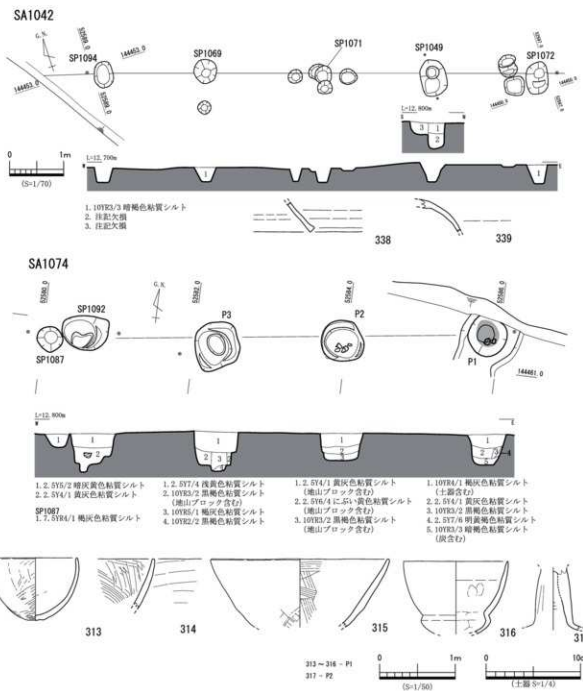
SD1004 (第55図)

調査区東側で検出し、遺構の南側は調査区外である。規模は東西約0.5m×南北約1.8mである。主軸方向は南北方向である。溝の延伸状況は削平等で不明である。

SD1005 (第55・64図)

調査区東側で検出した。規模は東西約0.3m×南北約1.0mである。主軸方向は南北方向である。溝の延伸状況は削平等で不明である。

出土遺物は第64図-320の土師質土器の杯である。川津Ⅱ-6頃と考えられる。



第 63 図 SA1042・1074 平・断面図及び出土遺物

埋没時期は遺物の出土量が僅少であるが、12 世紀後半頃と考えられる。

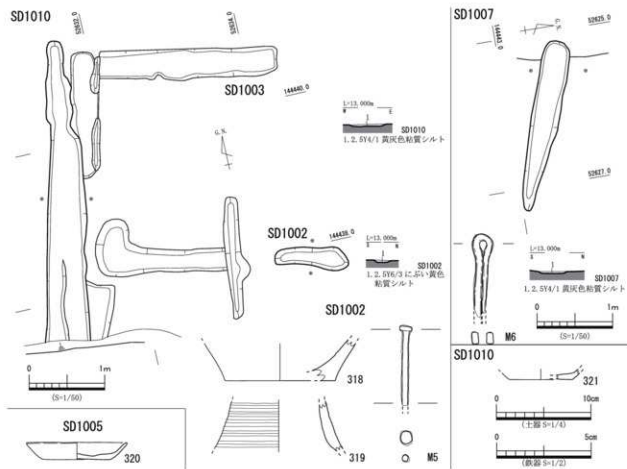
SD1006 (第 55 図)

調査区東側で検出した。規模は東西約 0.3 m × 南北約 1.0 m である。主軸方向は南北方向である。溝の延伸状況は削平等で不明である。

SD1007 (第 64 図)

調査区東側で検出した。規模は東西約 2.2 m × 南北約 0.4 m、深さ約 0.05 m である。主軸方向は東西方向である。溝の延伸状況は削平等で不明である。

出土遺物は第 64 図 - M6 で鋸状金具である。



第 64 図 SD1002・1003・1005・1007・1010 平・断面図及び出土遺物

SD1010 (第 55・64 図)

調査区東側で検出し、南側は調査区外である。規模は東西約 0.5 m × 南北約 4.0 m、深さ 0.05 m である。主軸方向は南北方向である。溝の延伸状況は開削等で不明である。

出土遺物は第 64 図 - 321 で土師質土器の杯である。

SD1013 (第 55 図)

調査区東側で検出し、南側は調査区外である。規模は東西約 0.5 m × 南北約 2.9 m である。主軸方向は南北方向である。溝の延伸状況は開削等で不明である。

SD1015 (第 55 図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外である。検出した規模は幅 0.2 m × 長さ約 4.2 m である。T 字型を呈しており、東西・南北の 2 方向に分かれる。東に延伸する部分は幅約 0.2 m × 長さ約 1.3 m である。東西方向と南北方向の切り合い関係がないことから同時期に埋没したと考えられる。

SD1026 (第 55 図)

調査区中央で検出した。規模は幅約 0.4 m × 長さ約 2.3 m である。溝の主軸方向は東西方向である。延伸状況は不明であるが、東側に同様の掘り込みが見られるため、東に延伸し、SD1015 の東西方向の溝に絞く可能性がある。

SD1040 (第 56 図)

調査区中央で検出し、南側は後世の削平や調査区外で不明である。検出した規模は、東西約 5.0 m × 東側南北約 2.0 m、西側南北約 2.0 m、幅約 0.6 m、深さ約 0.3 m である。平面形状は SH1034

等を囲むように「コ」の字型を呈している。SH1034との時期差は不明であるが、配置関係から住居の排水溝等の役割を担っていたと推測される。

出土遺物は第56図-322の弥生土器の甕である。

SK1001 (第55図)

調査区東側で検出し、東側は調査区外である。検出した規模は東西約1.0m×南北約0.4mである。

SK1008 (第55図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外である。検出した規模は東西約3.1m×南北約0.4mである。遺構の広がり明らかにできていないが、形状や主軸方向から溝の可能性も考えられる。

SK1009 (第55図)

調査区東側で確認し、試掘トレンチにより削平され、SD1007、SK1008に切られている。平面形状は長方形で、検出した規模は東西約1.0m×南北約1.8mである。

SK1011 (第55図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.3m×南北約0.4mである。

SK1012 (第55図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、規模は東西約0.4m×南北約0.6mである。

SK1014 (第55図)

調査区東側で検出し、南側は調査区外である。平面形状は長方形になると推測され、検出した規模は東西約1.4m×南北約1.6mである。

SK1016 (第55図)

調査区東側で検出し、北側は攪乱により削平されている。平面形状は楕円形になると推測される。検出した規模は東西約0.5m×南北約0.7mである。

SK1017 (第55図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外で、SK1020を切っている。検出した規模は東西約0.3m×南北約0.6mである。周辺で検出した溝跡と主軸方向が同一であることや幅が類似することから溝跡の可能性もある。

SK1019 (第55図)

調査区中央で検出した。SK1022に切られている。平面形状は長方形になると推測され、検出した規模は東西約0.4m×南北約0.2mである。

SK1020 (第55図)

調査区中央で検出し、北側は調査区外で、SK1017に切られている。検出した規模は東西約4.3m×南北約0.4mである。平面形状から溝の可能性も推測される

SK1021 (第65図)

調査区中央で検出した。平面形状は方形で、東西約0.3m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。埋土は3層に分層でき、1層と3層で焼土を検出した。

SK1022 (第65図)

調査区中央で検出した。SK1019を切っている。平面形状は隅丸方形で、東西約1.7m×南北約1.7m、深さ約0.4mである。

出土遺物は第65図-323・M7である。323は肥前系陶器の鉢である。M7は用途不明の鉄製品である。

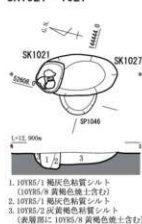
SK1024 (第55図)

調査区中央で検出し、南側は調査区外である。検出した規模は東西約3.0m×南北約7.2mである。平面形状から溝の可能性も考えられる。

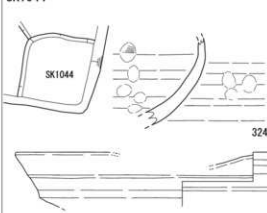
SK1025 (第55図)

調査区中央で検出した。平面形状は方形で、東西約1.9m×南北約1.0mである。

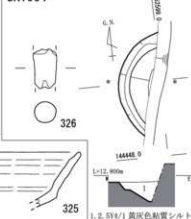
SK1021・1027



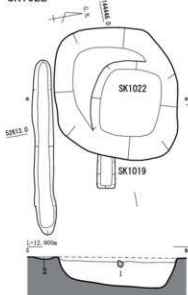
SK1044



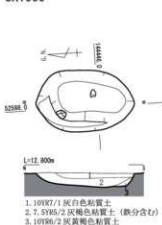
SK1064



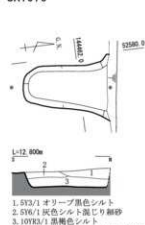
SK1022



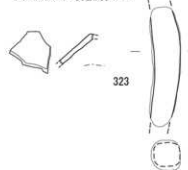
SK1060



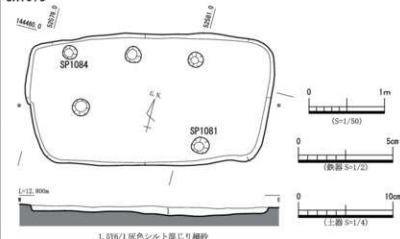
SK1076



1. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
(10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト含む)
2. 2. 5Y6/3 に近い黄色粘質シルト



SK1075



第 65 図 B-1SK 平・断面図及び出土遺物

SK1027 (第 65 図)

調査区中央で検出した。SK1021 に切れ、SP1046 を切っている。平面形状は楕円形で、東西約 0.5 m × 南北約 1.0 m、深さ約 0.2 m である。埋土は SK1021 の第 3 層と同じく灰黄褐色粘質シルトで焼土を含んでいる。

SK1044 (第 65 図)

調査区中央で検出し、東側と南側は調査区外である。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約 0.9 m × 南北約 0.8 m である。

出土遺物は第 65 図・324・325 で弥生土器で、324 は壺と考えられ、325 は片口鉢である。

SK1048 (第56図)

調査区中央で検出した。SP1028に切られ、SD1048を切っている。平面形状は楕円形で、規模は東西約1.0m×南北約0.7m、深さ約0.2mである。

SK1060 (第65図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、東西約0.8m×南北約1.3m、深さ約0.2mである。

SK1064 (第65図)

調査区中央で検出し、東側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約1.4m×南北約0.5m、深さ約0.4mである。

出土遺物は第65図-326で土師質土器の足釜である。

SK1067 (第55図)

調査区西側で検出し、南側は調査区外である。SK1068を切っている。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.5m×南北約0.3mである。

SK1068 (第55図)

調査区西側で検出し、南側は調査区外である。SK1067に切られている。検出した規模は東西約1.0m×南北約2.0mである。平面形状から溝の可能性が考えられる。

SK1075 (第65図)

調査区西側で検出した。SP1081・1084に切られている。平面形状は長方形で、東西約3.3m×南北約1.8m、深さ約0.15mである。

SK1076 (第65図)

調査区西側で検出し、北側は調査区外である。平面形状から溝になる可能性も推測され、検出した規模は東西約0.9m×南北約1.1m、深さ約0.2mである。

SK1083 (第55図)

調査区西側で検出した。南側は調査区外で、平面形状は不明である。検出した規模は東西約0.8m×南北約0.15mである。

SP1023 (第55図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP1028 (第55・66図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。埋土中に拳大の円礫を検出した。

出土遺物は第66図-328で土師質土器の椀である。

SP1029 (第55・66図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.3mである。埋土は褐灰色粘質シルトで焼土を含む。

SP1030 (第66図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。

SP1033 (第66図)

調査区中央で検出した。平面形状は方形で、東西約0.4m×南北約0.5m、深さ約0.3mである。埋土は褐灰色粘質シルトで鉄分や円礫を含んでいる。

出土遺物は第66図-329～332である。329は須恵器の壺である。330～332は土師器で330、331は杯である。両者とも底部に回転ヘラ切りが見られる。332は小皿で底部に回転ヘラ切りが見られる。時期は川津Ⅱ-6～7と考えられる。

埋没時期は332から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

SP1038 (第 55 図)

調査区中央で検出し、北側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、東西約 0.5 m × 南北約 0.2 m である。

SP1039 (第 55 図)

調査区中央で検出した。SD1040 を切っている。平面形状は円形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.4 m である。

SP1043 (第 55 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1045 (第 56 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

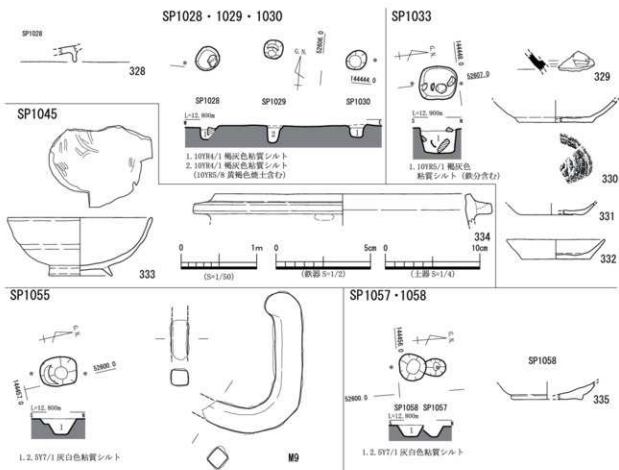
出土遺物は第 66 図 -333・334 である。333 は黒色土器 A 椀で、内面のみ黒くヘラミガキがあり、底部に高台の貼り付けが見られる。時期は川津Ⅱ-6 頃と考えられる。334 は土師質土器の足釜である。

SP1046 (第 55 図)

調査区中央で検出した。SK1027 に切られている。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約 0.3 m × 南北約 0.5 m である。

SP1051 (第 55 図)

調査区西側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約 0.4 m × 南北約 0.2 m である。



第 66 図 B-1SP 平・断面図及び出土遺物①

SP1052 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は方形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.2 m である。

SP1053 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.3 m × 南北約 0.2 m である。

SP1054 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m である。

SP1055 (第 66 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.2 m、深さ約 0.3 m である。
平・断面形状から柱を抜き取ったような痕跡があり柱穴と考えられる。

出土遺物は第 66 図 - M9 で釘である。

SP1056 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1057 (第 66 図)

調査区西側で検出した。SP1058 に切られている。平面形状は楕円形で、東西約 0.2 m × 南北約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1058 (第 66 図)

調査区西側で検出した。SP1057 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 m である。

出土遺物は第 66 図 - 335 で土師質土器の杯である。

埋没時期は出土遺物が僅少であるが、11 世紀以降と考えられる。

SP1059 (第 67 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 67 図 - 336 弥生土器の鉢である。

SP1061 (第 55 図)

調査区東側で検出した。SP1067 を切っている。平面形状は楕円形で、東西約 0.3 m × 南北約 0.4 m である。

SP1062 (第 55 図)

調査区西側で検出した。SP1063 を切っている。平面形状は楕円形で、東西約 0.3 m × 南北約 0.2 m である。

SP1063 (第 55 図)

調査区西側で検出した。SP1062 に切られている。平面形状は楕円形で、検出した規模は東西約 0.3 m × 南北約 0.5 m である。

SP1065 (第 55 図)

調査区西側で検出し、東側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約 0.1 m × 南北約 0.3 m である。

SP1066 (第 55 図)

調査区西側で検出し、東側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約 0.1 m × 南北約 0.2 m である。

出土遺物は第 67 図 - 337 で弥生土器である。

SP1067 (第 55 図)

調査区西側で検出した。SP1059・1061 に切られている。平面形状は円形で、直径約 0.4 m である。

SP1073 (第 67 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m、深さ約 0.3 m である。

出土遺物は第 67 図 -340 で弥生土器の甕である。

SP1077 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1078 (第 67 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.24 m、深さ約 0.2 m である。埋土は灰黄褐色粘質シルトで土器片を多く含む。

出土遺物は第 67 図 -341 ~ 344 で、弥生土器である。341・344 は鉢である。342・343 は手捏ね土器である。343 は底部に穿孔が見られる。344 は鉢で外面にタタキ、内面にハゲが見られる。時期は下川津 V 式頃と推測される。

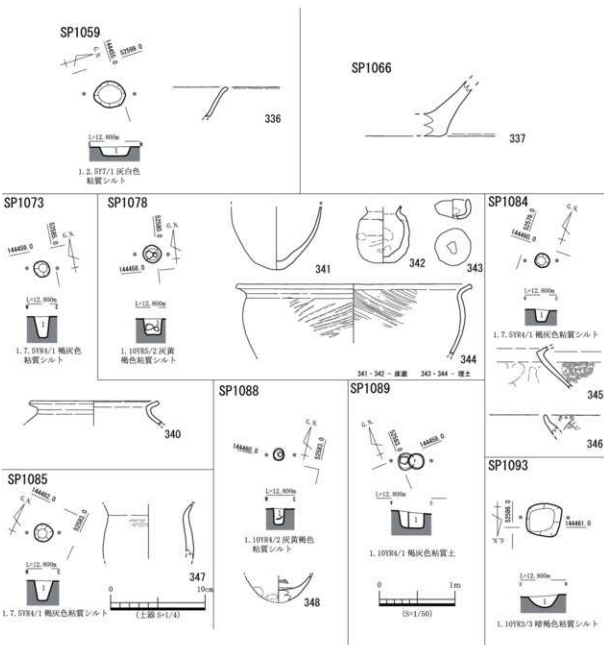
埋没時期は 344 から弥生時代後期末以降と推測される。

SP1079 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1080 (第 55 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。



第 67 図 B-1SP 平・断面図及び出土遺物②

SP1081 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP1082 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。

SP1084 (第67図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第67図-345・346である。は弥生土器の甕で、346は装飾器台である。345の外面には横ナゲ、タテハケが見られる。346は口縁部に竹管文や鋸歯文と考えられるヘラ描きが見られる。

SP1085 (第67図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第67図-347で弥生土器の甕でタタキが見られる。

SP1086 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2mである。

SP1087 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP1088 (第67図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.15m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第67図-348で弥生土器の鉢である。

SP1089 (第67図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.2mである。

SP1090 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP1091 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.3mである。

SP1093 (第67図)

調査区西側で検出した。平面形状は方形で、東西約0.4m×南北約0.4m、深さ約0.2mである。

SP1095 (第55図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約0.4mである。

遺物包含層 (第52・68図)

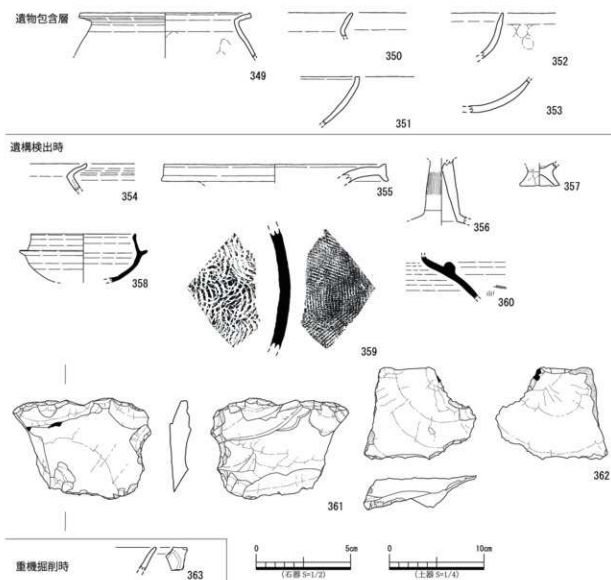
調査区西側では褐色土層が広がっており、色調が黒色に近く、A区東側や第2次調査で検出した遺物包含層と同時期の遺物が出土することから、同一のものである可能性がある。範囲は図示できていないが、北側の土層断面を見ると西壁から約18mの地点まで堆積していたと考えられる。

出土遺物は第68図-349～353で弥生土器である。349・350は甕である。351・352は鉢で前者は金雲母を含む。353は壺と考えられる。355の高坏は下川津Ⅲ式と考えられる。また、図化していないが、製塩土器や甕が出土している。

その他の遺物 (第68図)

遺構検出時に出土した遺物は第68図-354～362である。354～357は弥生土器である。356は高杯で脚部の外面にハケが見られる。358～360は須恵器である。359は甕で外面にタタキ、内面に青海波文が見られる。361・362は石器である。361は打製石庖丁で、材質はサヌカイトである。

また、重機掘削時に第68図-363の龍泉窯系青磁碗が出土した。外面に鑄蓮弁が見られる。



第 68 図 B-1 遺物包含層・遺構検出時・重機掘削時出土遺物

第 9 節 B-2 調査区の遺構・遺物

B-2 調査区で検出した遺構は堅穴建物跡 13 棟、掘立柱建物跡 1 棟、柵列跡 1 列、溝 2 条、土坑 11 基、ビット 65 基、性格不明遺構 1 基である (第 69 図)。

主な時代は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭、古墳時代中期末と考えられる。調査区全域で堅穴建物跡を検出している。

欠番は 1113・1167・1168 である。

SH100 (第 70～72 図)

調査区西側で検出し、東側は調査区外であり、SH101 と SH121 を切っている。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約 2.9 m × 南北約 4.3 m、深さ約 0.3 m である。建物跡の埋土は 6 層に分層でき、褐灰色～灰黄褐色の細砂～シルトが堆積している。4a 層は炭化物や遺物を多く含み、5 層は貼床と考えられる。周壁溝も検出した。

建物に伴う遺構はビット 8 基と中央土坑 1 基である。建物に伴う支柱穴は P1・P2・SP1120・SP1134・SP1175・SP1192・SP1196・SP1197 と考えられる。支柱穴の配置は検出した範囲が狭小であるため、確定的な判断はできないが、不規則な配置であると考えられる。P1 は中央土坑 (K1) に切られている。平

面形状は円形で、直径約0.2m、深さ約0.4mである。P2もP1と同様の規模である。埋土はいずれも黒褐色シルトである。SP1120の平面形状は円形で、直径約0.3mで深さ約0.2mである。SP1134の平面形状は円形で、直径約0.3mである。SP1175の平面形状は円形で、直径約0.3mで深さ約0.3mである。SP1192の平面形状は円形で、直径約0.2mである。また、支柱穴の直径の規模が0.2m台のものが見られ、方形に支柱穴を配置している堅穴建物と比較すると小型である。

中央土坑(K1)は建物中央に位置する。平面形状は隅丸長方形で、東西約0.5m×南北約1.5m、深さ約0.1mである。

出土遺物は第71図-364～第72図-421である。床面及びK1等から出土した遺物はわずかで、そのほとんどが埋土からの出土であるため、一活性は極めて低い。断面観察用のベルトを東西に設置し、北側と南側で遺物を取り上げている。364は古式土師器の二重口縁壺である。時期は下川津VI式頃と考えられる。外面にタテハケが見られる。365～367は石製品で材質はいずれも砂岩である。365は叩き石で顔料が付着している。366・367は観察表のみの掲載である。366は台石である。367は砂岩の石製品である。368は弥生土器の鉢で内面全面にハケが見られる。369・370はK1から出土した弥生土器である。369は甕で、370は小型丸底壺で内面に工具痕が見られる。371～385は南側下層(4a層)から出土した遺物である。371～382は弥生土器である。371～377は甕である。371は外面にタテハケ後ヨコハケが見られる。372を除く甕の胎土に金雲母や角閃石を含む。377の甕は外面にタタキ後タテハケ、内面にタテハケが見られる。体部と底部に意図的な穿孔が2ヶ所見られる。時期は下川津V式古相と考えられる。378～380は壺である。379、380に角閃石や金雲母を含む。380の時期は下川津V式頃と考えられる。381は鉢で内面にハケが見られ、断面に粘土紐の輪積みが見られる。383・384は古式土師器である。383は鉢で、384は吉備系甕で外面に櫛描文が施される。386・387は南側上層(1層)から出土した遺物で、いずれも土師器と考えられる、上面からの混入品である可能性がある。385・386は甕で前者は外面にタタキ、内面にハケが見られる。387は甕の把手と考えられるが、土製支脚の可能性もある。388～401は南側の埋土中から出土したもので、すべて弥生土器である。388～390は甕である。388は外面にタタキが見られる。391～393は壺である。391・392に金雲母や角閃石を含む。394～399は鉢で、ほとんどの鉢の胎土に角閃石や金雲母を含む。395は内面に板ナデが見られる。400は製塩土器である。401は器種不明である。402～404は甕である。404は内外面にハケが見られる。405・406は高杯で、405は脚部に円形スカシが2ヶ所見られる。407・408は鉢である。409～418は検出時に出土した遺物である。その内409～415は弥生土器である。408は鉢で内外面にハケが見られる。409は甕で内面にケズリが見られる。410は壺で内面にハケが見られる。411・412は高杯である。411は外面にヨコナデとタテハケが見られ、胎土に角閃石や金雲母が見られる。412は外面にタテハケが見られる。413～415は鉢と考えられる。414は内面にハケが見られる。416～418は古式土師器でいずれも高杯である。416は内面に凹線1条、ヘラケズリが見られる。418の胎土に金雲母が見られる。419～421は埋土中から出土した遺物で、419・420は弥生土器の甕で421は砂岩の叩き石である。

建物の時期は、床面直上で弥生時代後期末頃の土器が出土することからこの頃まで使用したと考えられる。その後、古墳時代前期初頭までに埋没したと考えられる。

SH1101 (第73図)

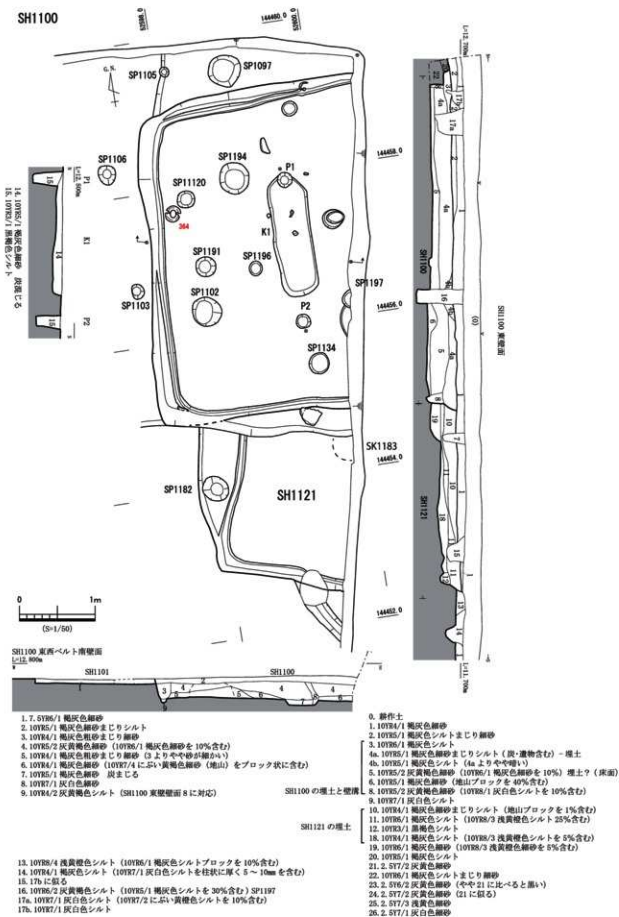
調査区西側で検出し、北側は調査区外、東側はSH1100により削平されている。平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約2.0m×南北約5.0m、深さ約0.05mである。形状から堅穴建物遺構と考えられるが、削平が著しく、本来の形状及び構造は不明である。周壁溝は検出していない。

建物に伴う遺構はビット2基で、SP1104・1107を検出した。SP1104の平面形状は円形で、直径約0.4

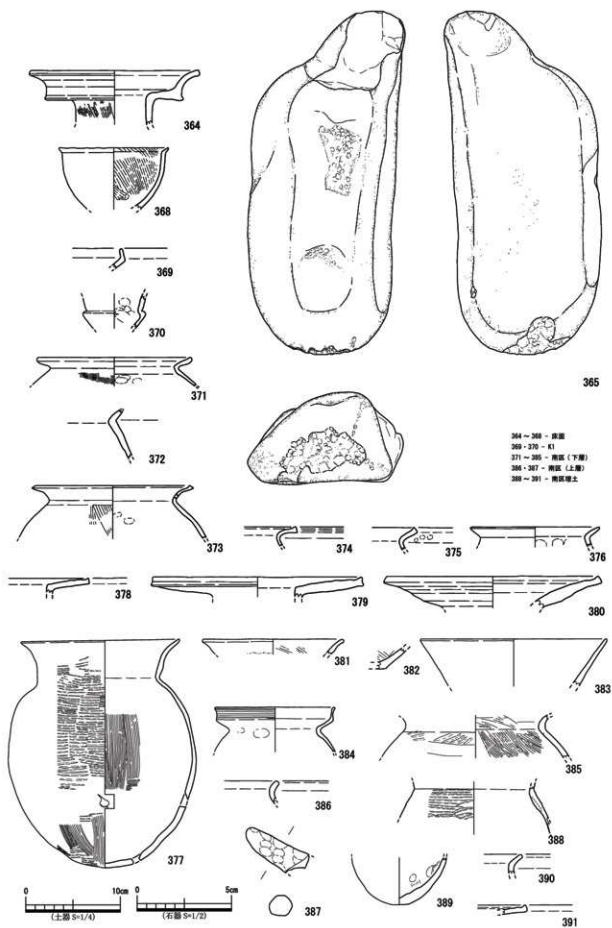


第 69 図 B-2 遺構配置図

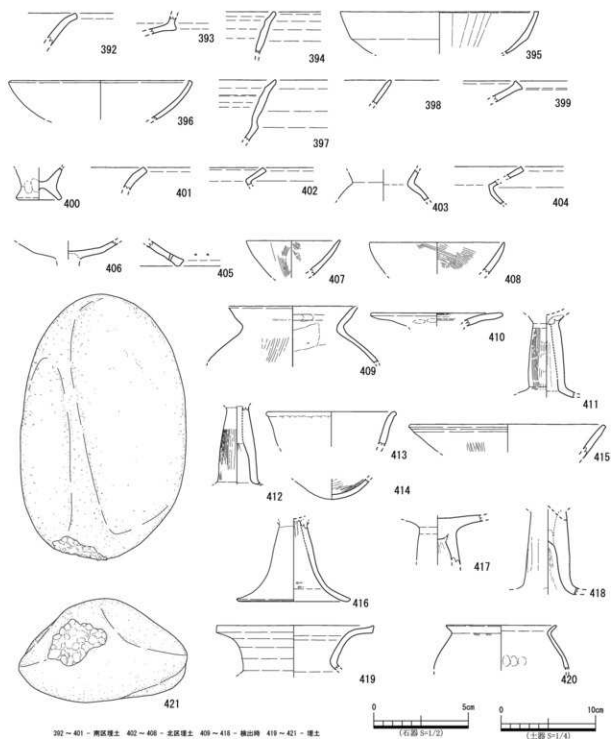
SH1100



第 70 図 SH1100・1121 平・断面図



第 71 图 SH1100 出土遺物①

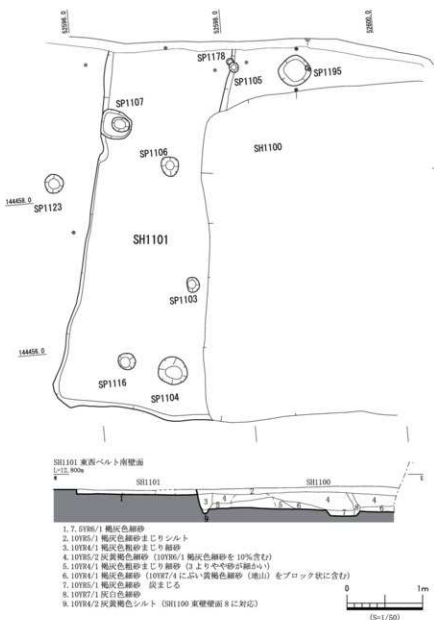


第 72 図 SH1100 出土遺物②

mである。SP1107の平面形状は隅丸方形で、東西約0.4m×南北約0.4mである。柱痕跡を検出した。埋没時期は遺物が出土していないため詳細は不明であるが、SH1100との切り合い関係から弥生時代後期末以前と考えられる。

SH1115 (第 74・75・93 図)

調査区西側で検出し、北側は調査区外である。SH1070に切られており、南側の検出面はSH1070の床面である。平面形状は不整形な隅丸方形と考えられる。検出した規模は東西約7.5m×南北約6.0m、深さ約0.1mである。また、西側壁が東側に比べ湾曲していることや、多数のピットを検出していることから発掘調査中に切り合い関係は判別できなかったが、複数の堅穴建物が切り合っていた可能性が残る。

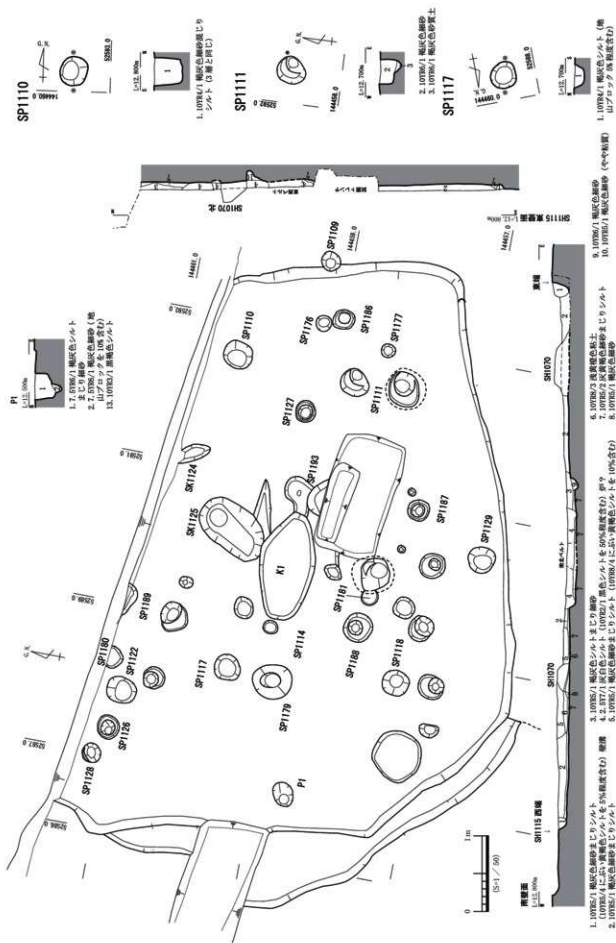


第73図 SH1101 平・断面図

建物に伴う遺構はピット 21 基、中央土坑 (K1) とこれよりも古い時期の中央土坑と推測される SK1125 を検出した。支柱穴の組み合わせは判然としないが、多角形の配置になるものと考えられる。支柱穴は P1・SP1110・1111・1114・1117・1118・1122・1126・1127 ~ 1129・1176・1177・1179・1180・1181・1186 ~ 1189・1193 が可能性として考えられる。支柱穴の平面形状は円形又は楕円形であり、直径約 0.2 ~ 0.5 m、深さ約 0.2 ~ 0.3 m である。また、支柱穴の直径の規模が 0.2 m 台のものが見られ、方形に支柱穴を配置している竪穴建物と比較すると小型である。

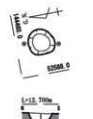
K1 はほぼ中央に配置されており、平面形状は楕円形で、東西約 0.7 m × 南北約 1.5 m である。一段階古い時期の中央土坑と推測される SK1125 は K1 に切られている。平面形状は楕円形で、東西約 0.6 m × 南北約 1.4 m、深さ約 0.2 m である。切り合い関係から K1 より古い時期に使用した SH1115 に伴う中央土坑の可能性があり、先の支柱穴はこの SK1125 に伴うものも含め考えられる。

出土遺物は第 75 図 -422 ~ 436 である。観察用ベルトを十字に設定し、遺物もその区画ごとに取り上げた。422 は P1 から出土した弥生土器の高杯でスカシが見られる。423・424 は西側から出土した弥生土器である。423 は甕で外面にタタキが見られる。424 は鉢で胎土に角閃石、金雲母が見られる。427 ~ 430 は建物の南側から出土した弥生土器で、甕や鉢である。427 の甕は外面にハケが見られる。428 は胎土に角閃石や金雲母が見られる。429 は鉢で内面にハケが見られる。431 ~ 433 は



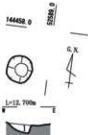
第74図 SH1115 平・断面図

SP1117



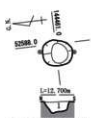
1. 10YR4/1 褐灰色シルト (地山ブロック 0%程度含む)

SP1118



1. 10YR5/1 褐灰色シルト (地山ブロック 10%含む)

SP1122



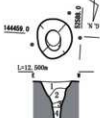
1. 10YR4/1 褐灰色シルト (地山ブロック 0%程度含む)

SP1177



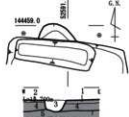
1. 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂
0
1m
(S=1/50)

SP1179



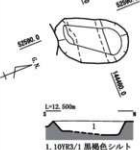
1. 10YR3/1 黒褐色シルト
2. 10YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック 50%含む)
3. 10YR6/1 褐灰色シルト
4. 10YR4/1 褐灰色シルト

SP1193

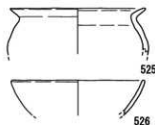


1. 10YR5/1 褐灰色シルト (SH1070の床面)
2. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/1 褐灰色土 50%程度含む) 炭強じる
3. 10YR4/1 褐灰色シルト (地山ブロック 0%程度含む)
4. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
5. 10YR6/4 黄褐色シルト混じり細砂 (地山)

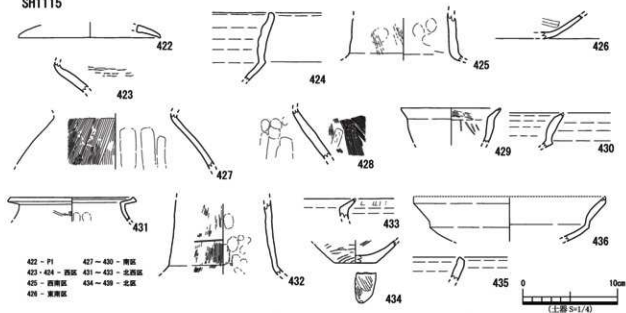
SK1125



1. 10YR3/1 黒褐色シルト

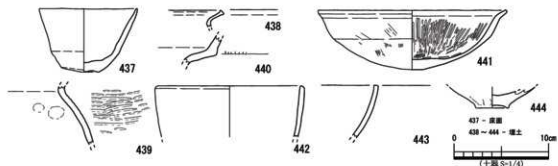


SH1115

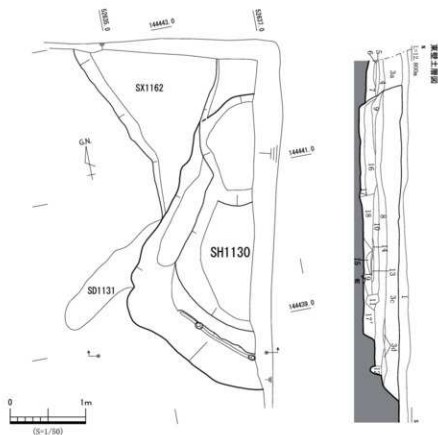


422 - F1
423 - 西壁
424 - 西壁
425 - 西壁
426 - 西壁
427 - 南壁
428 - 北壁
429 - 北壁
430 - 北壁
431 - 北壁
432 - 北壁
433 - 北壁
434 - 北壁
435 - 北壁
436 - 北壁

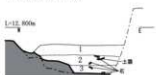
第75図 SH1115 関連ピット・土坑平・断面図及び出土遺物



第76図 SH1121 出土遺物



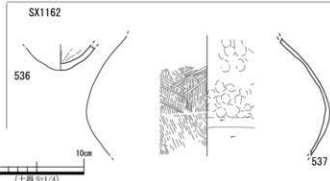
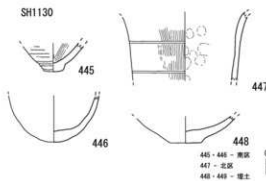
東西断面図（南面）



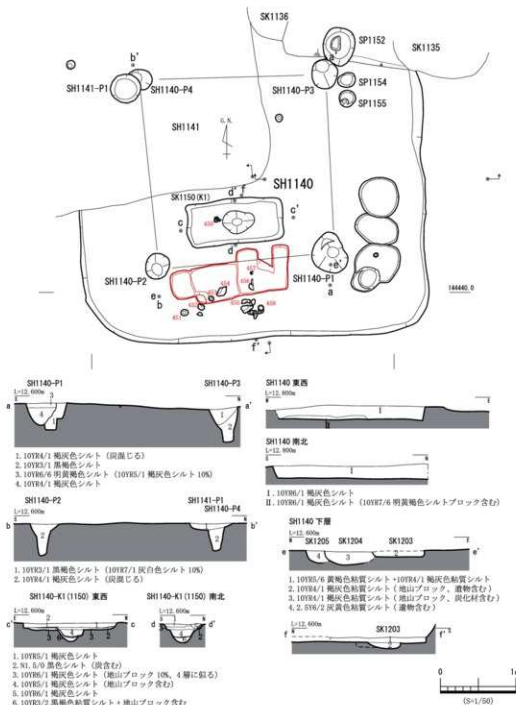
1. 灰黄褐色・にぶい黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/2-7/2)
2. 灰黄褐色・褐灰色シルト質極細砂 (10YR5/2+5/1 炭粒子を若干含む)
3. 褐灰色シルト質極細砂・灰白色シルトブロック (10YR5/1+2.5YR/2-粘り床・埋上)



1. 10YR2/1 黒褐色シルト
2. 10YR5/1 褐灰色シルト
- 3a. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルト 5%)
- 3b. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト
- 3c. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルト 5%)
- 3d. 10YR7/1 灰白色シルト (10YR7/6 明黄褐色シルトをブロック状に含む)
4. 10YR7/1 灰白色細砂
5. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
6. 10YR6/1 褐灰色細砂
7. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト 5%)
8. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト 5%) 一様土
9. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
10. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト 15%) 炭を少量含む
11. 10YR6/1 褐灰色シルト
12. 10YR5/1 褐灰色シルト
13. 10YR4/1 褐灰色シルト (遺物含む)
14. 10YR7/1 黒色 (炭層)
15. 10YR6/1 褐灰色シルト
16. 10YR6/8 明黄褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト 5%含む)
17. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR5/8 褐色シルトを 5%)
- 17' 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR5/8 褐色シルト 5%) 17と同じ?
18. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR7/1 灰白色シルト+10YR6/4 にぶい黄褐色シルトともに 5%)
19. 10YR5/8 黄褐色シルト (10YR7/1 灰白色シルト 5%)



第 77 図 SH1130・SX1162 平・断面図及び出土遺物



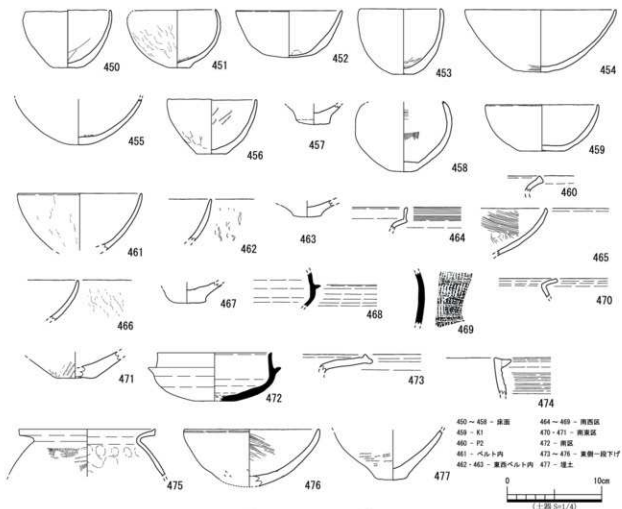
第78図 SH1140平・断面図

北西側で出土した弥生土器である。432は壺で外面にタテハケが見られる。434は北側から出土した弥生土器である。外面にタタキ、底面にヘラミガキ、内面に工具痕のような痕跡が見られる。525・526はSK1125から出土した弥生土器で甕と鉢である。第93図-530はSP1129から出土した安山岩のスクレイパーである。

埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH1121 (第70・76図)

調査区西側で検出し、北側はSH1100・SK1183に切られている。東側は調査区外である。平面形状は隅丸方形と推測され、検出した規模は東西約1.7m×南北約2.0m、深さ約0.3mである。埋土は4層に分層でき、褐灰色～黒褐色の細砂～シルト層が堆積している。ピット等の建物に伴



第79図 SH140 出土遺物

う遺構は検出できなかった。

出土遺物は第76図-437～444で、弥生土器である。437は床面から出土したもので弥生土器の鉢である。438～444は埋土から出土したもので弥生土器である。438・439は甕で前者の胎土に角閃石を含み、後者は外面にタタキが見られる。440は壺で外面に刺突文が見られる。441～443は鉢である。441は外面にケズリとハケ、内面にヘラミガキが見られ、胎土に角閃石を含む。時期は下川津IV式と考えられる。443は胎土に角閃石を含む。

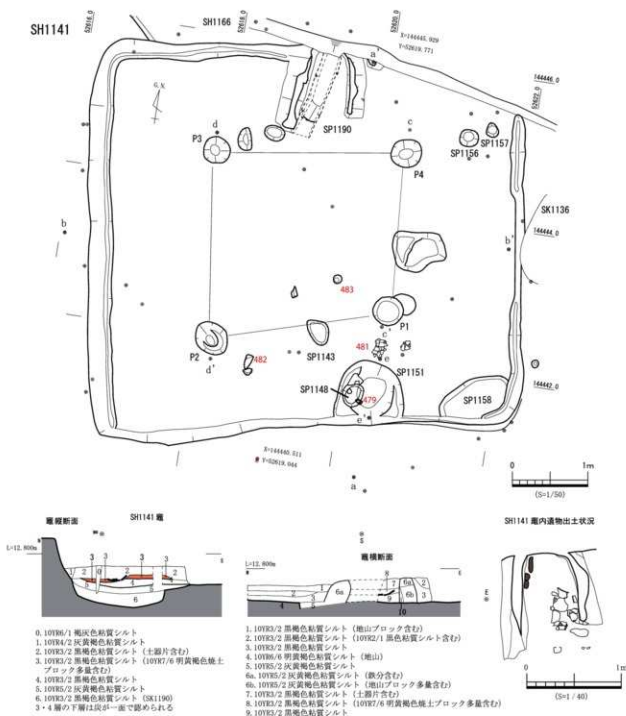
埋没時期は441の年代から弥生時代後期後半と考えられる。

SH130 (第77図)

調査区東側で検出し、SD1131に切られ、SX1162を切っている。東側は調査区外である。検出段階では、北東隅へと延びると認識していたが、土層断面から、北東隅より南側、床面の段差の部分までがSH130であったことを確認した。検出した規模は東西約2.0m×南北約3.4m、深さ約0.5mである。東西方向を主軸とすると考えられる。埋土は15層に分層でき、褐色～黒褐色シルトである。また、10・14層では炭化物を含む。周壁溝は建物の南側で検出し、1面目のSH1070と同様に周壁溝内にビットを検出した。検出範囲が狭小であるため建物に伴う遺構は検出できなかった。

出土遺物は第77図-445～448で、弥生土器である。445は南側から出土した甕で外面にタタキ、内面にハケが見られる。446・447は北側から出土した鉢と壺である。外面にハケ及び沈線2条が見られ、胎土に金雲母を含む。448は底部である。449は観察表のみの掲載だが、砂岩の叩き石である。また、園化していないが、砂岩の台石も出土した。

埋没時期は446から、弥生時代後期後半～後期末と推測される。

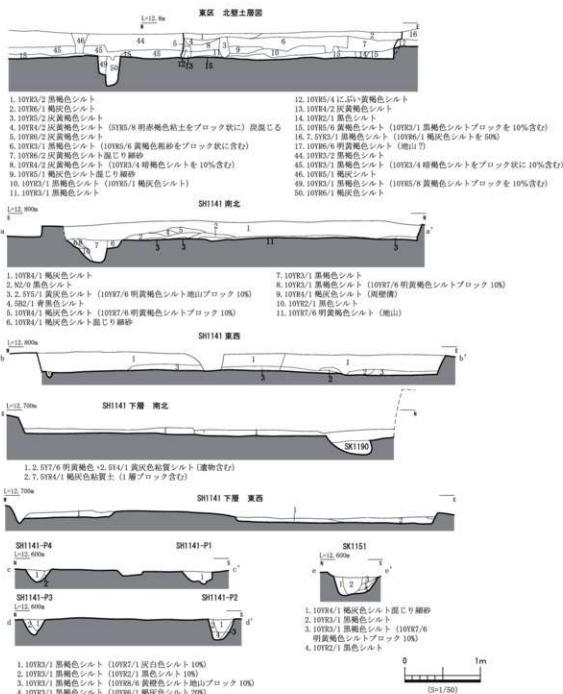


第 80 図 SH1141 平・断面図

SH1140 (第 78・79・93 図)

調査区東側で検出した。SH1141・SK1135等に切れ、SH1146・SH1147を切っている。平面形状は隅丸方形になると推測され、検出した規模は東西約4.5m×南北約3.5m、深さ約0.2mである。埋土は単層で、褐灰色シルトである。周壁溝は検出していない。

建物に伴う遺構はビット4基、中央土坑(SK1150)である。支柱穴は方形に配置され、P1～4を検出した。P1はの平面形状は円形で、直径約0.5m、深さ約0.4mである。埋土は3層に分層でき、明黄褐色～褐灰のシルトである。土層断面から1層が柱の掘方や据付のものと考えられるが、建替え等の理由から、3層の土層が見られるが、他のビットではこのような堆積状況でないため、詳細は不明である。或いは土層状況から2基のビットを一括して掘削した可能性がある。P2～4の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.4mである。断面形状はいずれも柱穴下半は柱状に細くなっ

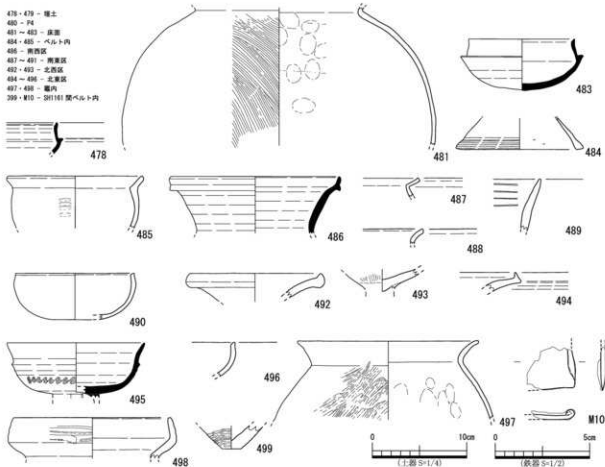


第81図 SH1141 断面図

ており、柱痕跡と考えられる。支柱穴は方形に配置している。また、赤線で示しているが、貼床下層から土坑と推測される浅い掘り込みを検出したが、当該建物にどのように伴う遺構かは不明である。

中央土坑 (SK1150) の平面形状は長方形を呈しており、中心部にピットのような楕円形の掘り込みが検出できる。長方形部分の規模は東西約 1.3 m × 南北約 0.6 m、深さ約 0.1 m である。ピット部分は直径約 0.4 m で深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第79図-450～477である。観察用ベルトを十字に設定し、その区画ごとに遺物を取り上げた。450～458は床面からやや浮いた状態で、比較的最もまっすぐに出土した弥生土器である。450～456・458は鉢である。451は外面に製作時の絞り目が見られ、底部に木葉痕が見られる。胎土に金雲母が見られる。452は下川津IV式頃と考えられる。453は内面にハケが見られる。454は外面にハケが見られる。455と458の時期は下川津VI式頃と考えられる。459は中央土坑 (SK1150) か



第 82 図 SH1141 出土遺物

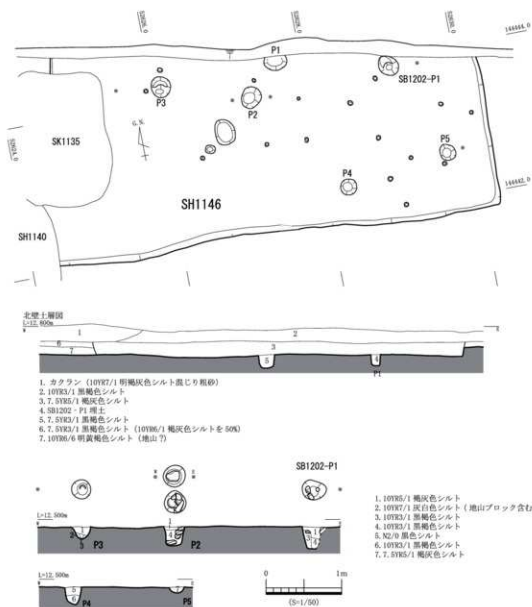
ら出土した弥生土器の鉢である。461 はベルト中から出土した弥生土器の鉢で外面に型作りの痕跡と考えられる縦方向のひび割れが認められる。462 は古式土師器の鉢である。時期は下川津 V 式新相から VI 式頃と考えられる。464 ~ 469 は建物南西側で出土した。464 ~ 467 は弥生土器である。464 は吉備系甕で口縁部に櫛描文が見られ、外面に朱が付着する。465・466 は鉢である。465 は内面にハケが見られ、胎土に金雲母を含む。466 は外面に型作りの痕跡と考えられる縦方向のひび割れが認められる。468・469 は須恵器である。470・471 は弥生土器の甕で、前者は胎土に金雲母を含む。472 は南側から出土した須恵器の杯身である。473 ~ 476 は建物の東側を一段下げ検出した際に出土した。473 は古式土師器の壺の時期は下川津 V 式新相頃と考えられる。474 の甕は瀬戸内型甕と考えられ、体部にヘラ描き文が見られる。時期は弥生時代前期後半頃と考えられ、混入品と推測される。475 は弥生土器の甕で外面にハケが見られる。時期は下川津 III 式新相 ~ IV 式と考えられる。476 は弥生土器の鉢で内面にハケが見られる。時期は下川津 IV ~ V 式と考えられる。

埋没時期は 462 の年代から古墳時代前期初頭と考えられる。須恵器が見られるが、南西区で出土しており、古墳時代中期末の建物である SH1141 に伴う遺物が混入したと考えられる。

SH1141 (第 80・81・82 図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外で、SH1140・1160 等を切っている。平面形状は方形で、検出した規模は東西約 5.7 m × 南北約 5.2 m、深さ約 0.3 m である。建物の埋土は 5 層に分層でき、褐灰色 ~ 黒色のシルトが堆積している。また、周壁溝を東西で検出しているが、東側で約 1.5 m の区間周壁溝が検出できなかったことから建物の入り口である可能性がある。

建物に伴う遺構は竈、ビット 4 基、土坑 2 基を検出した。竈は建物の北側に設置されているが、煙道部は調査区外のため構造は不明である。竈の袖部は灰黄褐粘質シルトで構築され、地山削り出しの竈袖ではなく、住居完成後に設置したことがわかる。竈内の堆積状況は 3 層に (第 80 図 7 ~



第83図 SH1146 平・断面図

9層) 分層でき、黒褐色粘質シルトが堆積し、8層では焼土ブロックを多量に含んでいる。また、8層中から甕(第82図-497・498)が出土し、体部に煤が付着していることや竈内から出土したことを考慮すると、竈に据え付けられ煮炊きをした甕と考えられる。また、竈の下面で深く掘り込まれたSK1190を検出しており、平面形状は楕円形で、直径約0.9m、深さ約0.2mである。竈の構築に伴う掘り込み土坑と推測される。

建物に伴う支柱穴(P1～4)は方形に配置されている。いずれも平面形状が円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。

SK1151・1158は建物に伴う遺構と考えられる。深さや形状からは具体的な機能の推定は難しいが、土器等の家財道具を備えた可能性等も想定される。SK1151の平面形状は半円形で、東西約0.9m×南北約0.8m、深さ約0.3mである。SK1158の平面形状は楕円形で、東西約1.0m×南北約0.5mである。

出土遺物は第82図-478～499、M10である。土層観察用ベルトを十字に設定し、その区画ごとに遺物を取り上げた。478は須恵器の杯身である。479は砂岩の石製品で観察表のみ掲載した。480はP4から出土した砂岩の石製品で、観察表のみ掲載した。481～483は出土状況を図化し取上げた遺物である。483は須恵器の杯身で底部は回転ヘラケズリが見られる。484・485はベルト中から出土

した遺物である。484は弥生土器の高杯で内面にヘラケズリが見られる。485は古式土師器の鉢で外面にタタキが見られる。486は南西側から出土した須恵器の甕である。487～491は南東側から出土した遺物である。489は弥生土器の鉢で内面に凹線4条が見られる。490・491は南区から出土した遺物である。492・493は北西側から出土した遺物である。493は弥生土器の高杯で外面にハケ、脚部との接合部に円盤充填が見られる。494～496は北東側から出土した遺物である。495は須恵器の高杯で外面に波状文が見られる。時期はTK23・TK47頃と考えられる。497・498は竈内から出土した遺物である。497は土師器の甕で外面にハケが、断面に粘土紐の接合痕が見られる。498は古式土師器の複合口縁壺で、外面に沈線が3条見られる。499はSH1141とSH1161の観察ベルト内で出土した弥生土器の甕である。外面にタタキとハケが見られる。M10は小型工具の刃先である。側面を折り曲げ成形する。出土状況はSH1140と1141の断面観察用ベルトから出土しており、どちらに帰属するかは不明であるが、便宜上SH1141に含める。

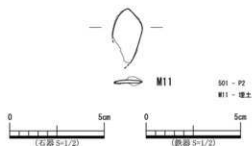
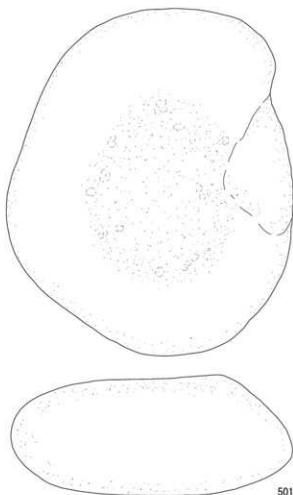
埋没時期は495の時期から古墳時代中期末と考えられる。

SH1146 (第83・84図)

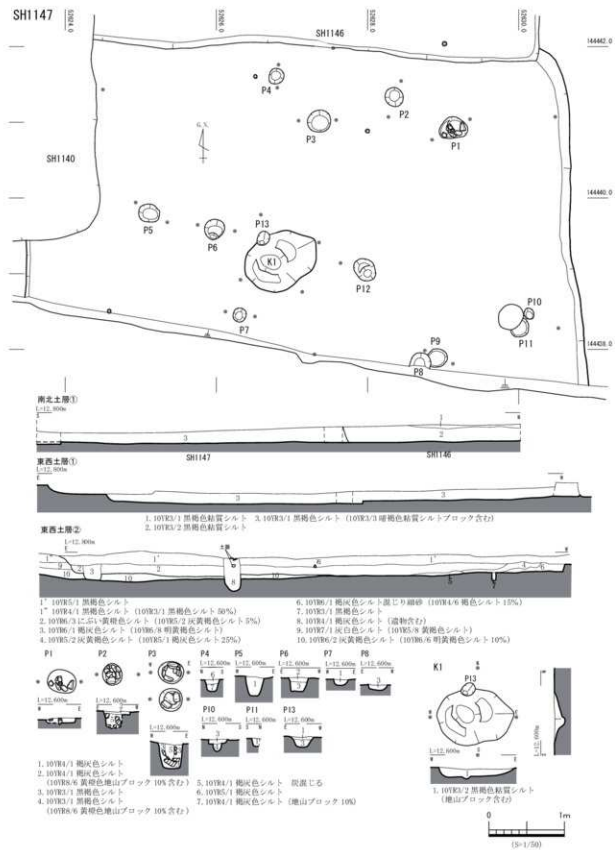
調査区東側で検出し、北側は調査区外で西側はSH1140・SB1202・SD1137・SK1135に切られている。SH1146・1147の検出当初は、切り合いが非常に不鮮明で、3つの建物跡が切り合っていると認識し、一段下げを行った結果、二つの遺構の切り合いであることが判明した。さらにサブトレンチにて、切り合い関係を確認し、SH1146がSH1147より新しい堅穴建物であることを確認した。検出した規模は東西約5.6m×南北約2.6m、深さ約0.2mである。周壁溝は検出されなかった。埋土は褐色シルトの単層である。

中央土坑、支柱穴は不明確であるが、建物に伴うと考えられる遺構は6基検出した。P1の北側は調査区外だが、平面形状は円形になると推測され、直径約0.3m、深さ約0.2mである。埋土中から拳大の礫が出土し、根固め石として使用したものと考えられる。P2の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.3mである。埋土中から最大径20cmの礫が出土していることからP1同様に根固め石に使用したと考えられる。P3～6の平面形状は円形で、直径約0.2～0.3m、深さ約0.1～0.3mの規模である。支柱穴の配置が不定形であることや周辺に東柱のような痕跡が見られることから別の掘立柱建物跡が重複していた可能性もあり、検出したピットはこれに伴う可能性も推測される。

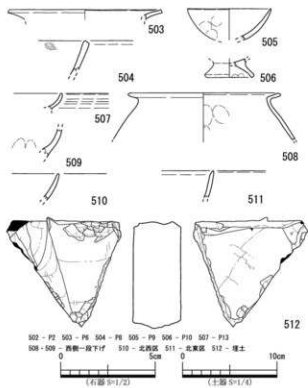
出土遺物は第84図-500・501・M11である。500は観察表のみの掲載であるが、P1から出土した砂岩の石製品である。501はP2から出土した砂岩の台石である。M11は鉄鏃と考えられる鉄製品である。また、図化していないがP3・4から弥生土器の甕が出土した。



第84図 SH1146 出土遺物



第 85 図 SH1147 平・断面図



第86図 SH1147出土遺物

いずれも根固め石を確認している。平面形状は円形で、直径約0.3mであることも共通する。また、P4・P6・P7は根固め石は使用していないが、直径約0.2m～0.3m、深さ約0.3mと前掲のものとはほぼ同等の規格であることから建物に伴うピットと推測される。その他のピットは直径や平面形状は類似するが、掘方が脆弱であることから建物に直接伴わないか、補助的な機能のみと考えられる。また、SH1146と同様、支柱穴の配列が不規則であり、SH1146と切り合い関係にあるが、構造物が類似することから同一の柱配置規格で建てられた可能性が推測される。

K1は建物の中央で出土した。平面形状は楕円形で、東西約1.1m×南北約0.7m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第86図-502～512である。観察用ベルトを十字に設定し、その区画ごとに遺物を取り上げた。502は観察表のみの掲載であるが、P2から出土した砂岩の叩き石である。503はP7から出土した弥生土器の甕である。504はP8から出土した土師器の鉢である。505はP9から出土した弥生土器と考えられる鉢である。506はP12から出土した弥生土器の製塩土器である。507はP13から出土した磁器の紅皿で混入品の可能性がある。508・509は西側で出土した弥生土器の甕と小型丸底壺である。508は胎土に角閃石・金雲母を含み、下川津Ⅲ式壺と推測される。510は北西区から出土した土師質土器の杯である。511は北東区から出土した弥生土器と考えられる長頸壺である。512は埋土中から出土したサヌカイトの模型石核である。また、図化していないがP3から砂岩の石製品、建物埋土から弥生土器の高杯が出土した。

埋没時期は508の年代から弥生時代後期後半と推測される。

SH1160 (第87図)

調査区東側で検出し、SH1141・SH1161・SA1173に切られている。平面形状は隅丸方形になると推測され、検出した規模は東西約4.0m×南北約3.3m、深さ約0.2mである。建物の埋土は3層に分層でき、褐灰色シルトである。周壁溝は検出しておらず、壁面部分には幅約0.2～0.3mの高まりが見られる。幅が狭くベット状遺構ではないと考えられる。

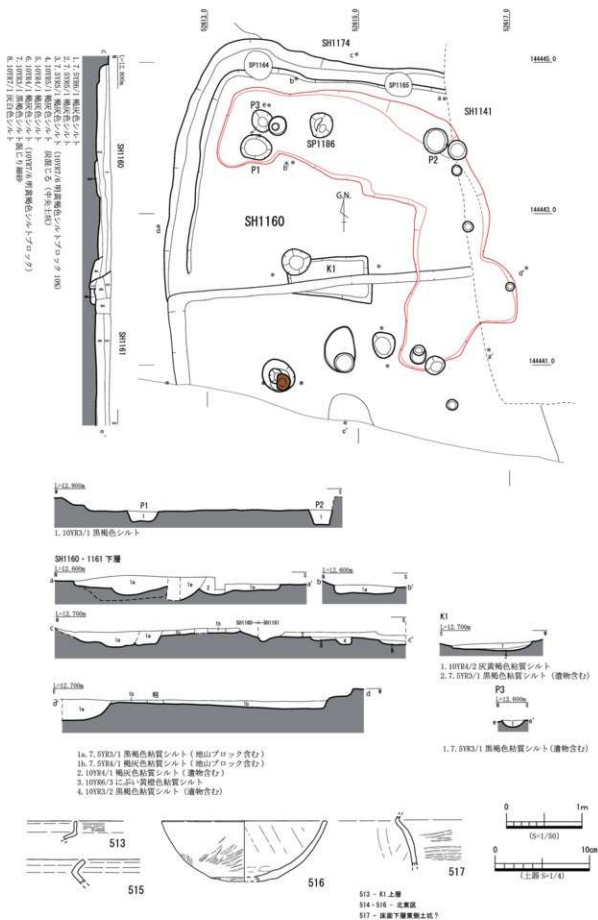
建物に伴う遺構はピット4基と中央土坑(K1)である。支柱穴の配置は不明であるが、P1～P3

埋没時期はSH1140とSH1147の前後関係から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭までの間に埋没したと考えられる。

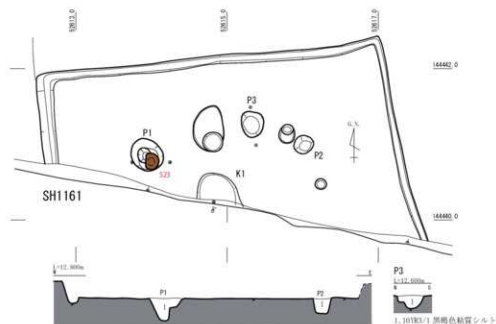
SH1147 (第85・86図)

調査区東側で検出し、南側は調査区外でSH1140・SH1146に切られている。上述した順序で、検出を行った。SH1146、1140に切られており、半分以上が調査区外へと展開するため、本来の形状は不明確であるが、中央土坑(K1)の形状から、平面形状は不整形な隅丸方形若しくは円形状となるものと考えられる。検出した規模は東西約7.0m×南北約4.3m、深さ約0.2mである。周壁溝は検出されなかった。

建物に伴う遺構はピット13基と中央土坑1基である。支柱穴の配置は明確ではないが、遺構規模や埋土の状況から建物に使用したと考えられるものはP1～7である。特にP1～3までは深度に差異はあるが、い



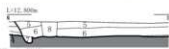
第 87 図 SHI160 平・断面図及び出土遺物



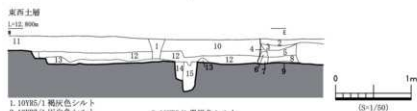
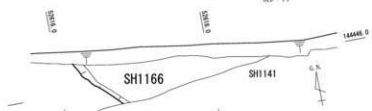
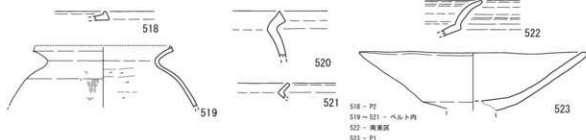
1. 10YR7/2 にぶい黄褐色→2.5YR5/4 にぶい褐色シルト質極細砂

1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト

- 10YR5/2 にぶい灰黄褐色 + 褐色シルト質極細砂
- 10YR5/2 灰黄褐色シルト質極細砂 準流
- 10YR6/2 灰黄褐色砂礫層 1mm~50mmの石を含む
- 10YR5/1 褐色シルト 同調じる (K1)
- 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト 粘り床
- 10YR7/3 浅黄褐色シルト
2. 5YR6/1 黄灰色砂礫層 1mm~4mmの石を多量に含む

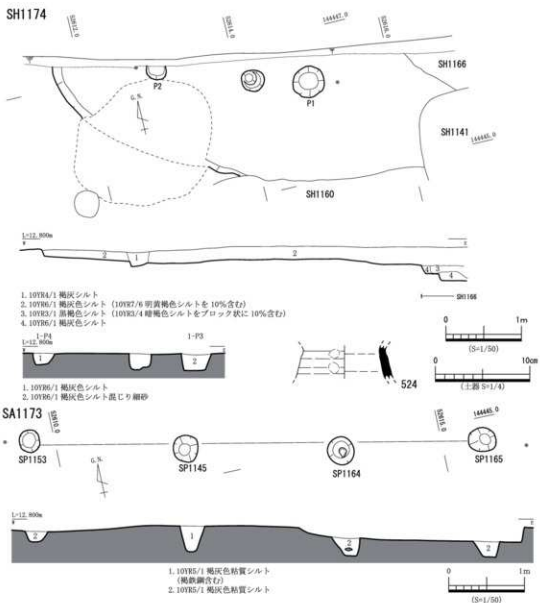


2. 5YR6/1 褐色シルト
2. 5YR5/1 褐色シルト
2. 5YR5/1 褐色シルト (10YR7/6 明黄褐色シルトブロック 10%)
- 10YR5/1 褐色シルト 同調じる (K1)
- 10YR4/1 褐色シルト
- 10YR4/1 褐色シルト (10YR7/6 明黄褐色シルトブロック)
- 10YR3/1 黒褐色シルト 粘り細砂
- 10YR7/1 灰白色シルト



- 10YR5/1 褐色シルト
- 10YR7/1 灰白色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト 50%含む)
- 10YR5/1 褐色シルト
- 10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR3/4 暗褐色シルトを10%含む)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 10YR3/1 黒褐色シルト
- 10YR6/1 褐色シルト
- 10YR2/2 黒褐色シルト
- 10YR6/1 褐色シルト (10YR7/6 明黄褐色シルトを10%含む)
- 10YR3/1 褐色シルト (10YR3/4 暗褐色シルトをブロック状に10%含む)
- 10YR3/1 褐色シルト
- 10YR3/1 褐色シルト
- 10YR5/8 黄褐色シルトブロックを10%含む
- 10YR6/1 褐色シルト

第 8 図 SH1161・1166 平・断面図及び出土遺物



第 89 図 SH1174・SA1173 平・断面図及び出土遺物

と SP1186 を検出した。P1～P3 の平面形状は楕円形や円形で、いずれも直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。埋土はいずれも黒褐色シルトである。

中央土坑 (K1) は建物中央で検出した。平面形状は長方形で、東西約 1.1 m × 南北約 0.6 m、深さ約 0.1 m である。SH1161 に南半分を切られており、深度は非常に浅い。

また、赤線で示しているが、貼床下層から建物の掘方と推測したが、建物全体では検出できなかったことから、別遺構の可能性も考えられ、性格は不明である。

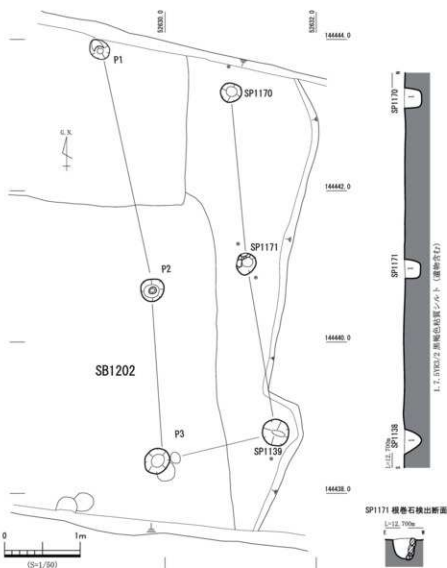
出土遺物は第 87 図 -513～517 である。513 は吉備型甕で口縁部に多数の櫛描き沈線が見られる。514 は観察表のみ掲載だが、砂岩の石製品である。515 は弥生土器の甕である。時期は下川津Ⅲ式新相と考えられる。516 は弥生土器の鉢で外面にタタキ、内面に板ナゲが見られる。517 は弥生土器の甕で外面にハケが見られる。

埋設時期は 513 の年代から弥生時代後期末と考えられる。

SH1161 (第 88 図)

調査区東側で検出し、南側は調査区外である。SH1160 を切っており、SH1141 に切られている。建物の平面形状は方形になると推測され、検出した規模は東西約 4.7 m × 南北約 2.7 m、深さ約 0.4 m である。埋土は 2 層に分層でき、褐灰色シルトである。周壁溝を周囲に検出している。

建物に伴う遺構はピット 3 基、中央土坑を検出した。P1 は支柱穴を構成する可能性の高いもので、



第90図 SB1202 平・断面図

平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.4mである。P2の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。P3の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。これらのピットはSH1161に属するものと考えているが、位置関係を考慮するとSH1160に伴うピットである可能性も考えられる。

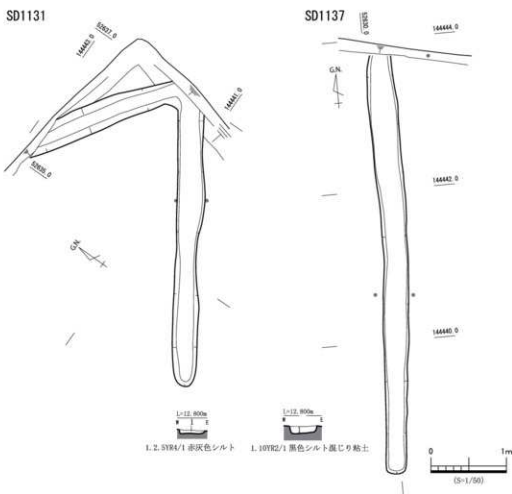
中央土坑(K1)の南側は調査区外である。平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.6m×南北約0.4mである。

出土遺物は第88図-518～523である。518はP2から出土した弥生土器の壺と考えられる。519～521はベルト中から出土した弥生土器で、いずれも甕である。519は内面にヘラケズリ、外面にタテハケが見られる。時期は下川津IV式と考えられる。522・523は高杯である。522の胎土に角閃石を含み、時期は下川津IV式新相と考えられる。523はP1から出土した古式土師器の高杯である。時期は下川津VI式と考えられる。

埋没時期は523の年代から古墳時代前期初頭であると考えられる。

SH1166 (第88図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外でSH1141に切られ、SH1174を切っている。検出した平面形状から推測すると円形の堅穴建物跡になると考えられるが、検出した範囲が小規模であることから建物と判別できる内部構造が検出できなかったので別種類の遺構の可能性もある。



第91図 SD1131・1137 平・断面図

SH1174 (第89図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外で、SH1141・1160・1166等に切られており、建物の平面形状は円形になると推測される。検出した規模は東西約4.2m×南北約1.5m、深さ約0.2mである。周壁溝は検出していない。

建物に伴う遺構はピット2基である。P1の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。P2の北側は調査区外であるが、平面形状は円形になると推測され、検出した規模は東西約0.3m×南北約0.2m、深さ約0.15mである。

出土遺物は第89図-524の須恵器の破片で、平瓶や壺の頭部と考えられるが詳細は不明である。遺構の切り合い関係や遺構の平面形状を考慮すると弥生時代の建物跡と推測されることから、524は混入品と推測される。

埋没時期はSH1160との切り合い関係から弥生時代後期後半以前と考えられる。

SB1202 (第90図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外で、SH1146・1147を切っており、SD1137に切られている。構成される支柱穴はSP1139・1170・1171・P1～3である。南北は調査区外になることから桁行方向の間数は不明だが、桁行2間以上×梁行1間と推測される。柱間は約2.5mの等間隔であるが、P1・P2間は3.5mと幅広になる。

P1～3の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mである。SP1139・1171・1170の平面形状は円形で、直径約0.3～0.4m、深さ約0.2mである。SP1171では根巻石を確認した。

SA1173 (第89図)

調査区中央で検出した。構成される支柱穴はSP1145・1153・1164・1165である。柱間の距離は

SP1164・1165間のみ1.9mで、その他は2.0mである。周辺に対になるピットがないことから柵列と考えられる。柵列の主軸方向は東西方向である。

SP1145の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.3mである。SP1153の平面形状は円形で、直径約0.3m、深さ約0.1mである。SP1164の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。SP1165の平面形状は円形で、直径約0.4m、深さ約0.2mである。埋土はSP1145は褐鉄鉱を含む褐灰色粘質シルトで、SP1153・1164・1165は褐灰色粘質シルトである。

SD1131 (第91図)

調査区東側で検出し、東側と北側は調査区外になる。SH130を切っている。検出した規模は幅約0.4m、長さは延べ約5.3mで、深さ約0.05mである。平面の状況は南西-北東軸から北西方向に向かい折れ曲がる。

SD1137 (第91図)

調査区東側で検出し、北側は調査区外である。検出した規模は幅約0.4m、長さ約5.5m、深さ約0.1mである。主軸方向は南北方向である。

SK1112 (第92図)

調査区西側で検出した。1面目のSH1070に切られている。平面形状は長方形で、東西約0.4m×南北約0.6m、深さ約0.4mである。

また、図化していないが、胎土に角閃石と金雲母を含んだ弥生土器の甕が出土した。

SK1119 (第69図)

調査区西側で検出した。1面目のSH1070に切られている。平面形状は楕円形で、東西約0.6m×南北約0.9mである。

SK1124 (第92図)

調査区西側で検出し、北側は調査区外である。平面形状は楕円形で、検出した規模は東西約0.2m×南北約0.5m、深さ約0.1mである。

SK1135 (第92図)

調査区東側で検出した。平面形状は長方形で、東西約1.3m×南北約1.8m、深さ約0.3mである。

出土遺物は第92図-527で、弥生土器の甕である。

SK1136 (第92図)

調査区東側で検出し、東側は試掘トレンチにより削平され、SP1149に切られている。平面形状は隅丸方形で東西約1.5m×南北約1.3m、深さ約0.3mである。

図化していないが、須恵器の杯身が出土した。

SK1138 (第92図)

調査区東側で検出した。平面形状は不整な長方形で、東西約1.9m×南北約0.6m、深さ約0.1mである。

出土遺物は第92図-528・529である。528は古式土師器の小型丸底甕である。529は弥生土器の鉢で、内面にハケが見られる。

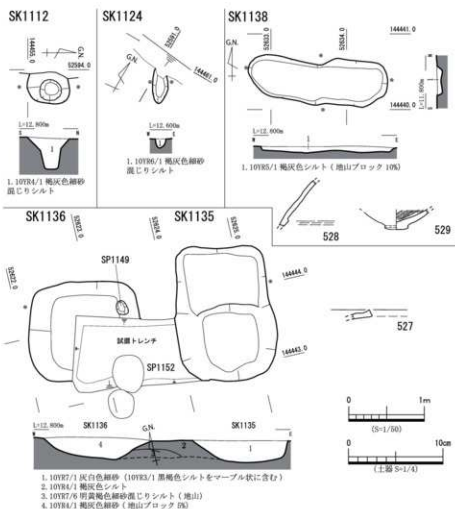
埋没時期は528の年代から古墳時代前期初頭と考えられる。

SK1142 (第69図)

調査区西側で検出した。SH1141を切っている。平面形状は不整な長方形で、規模は東西約0.9m×南北約0.7mである。

SK1183 (第69図)

調査区西側で検出し、東側は調査区外である。SH1121を切っていたと思われるが、遺構が滅失したため詳細は不明である。



第 92 図 B-2SK 平・断面図及び出土遺物

SP1102 (第 93 図)

調査区西側で検出し、SH1100 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

SP1103 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.2 m である。

SP1105 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.1 m である。

SP1106 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m である。

SP1108 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1109 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1116 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1123 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1132 (第 69 図)

調査区東側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.2 m × 南北約 0.3 m である。

SP1133 (第 69 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1143 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.4 m × 南北約 0.5 m である。SH1141 を構築する南側の東西柱穴の軸線上に位置するが、他のピットに比べ形状や深さが異なることから住居に伴わないピットと考えられる。

SP1144 (第 93 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.05 m である。

出土遺物は第 93 図-531 の弥生土器の甕で内面にハケが見られる。

SP1148 (第 93 図)

調査区東側で検出した。SK1151 を切っている。平面形状は円形、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 93 図-532 で、須恵器の壺である。内面に青海波文、外面に平行タタキが見られる。

埋没年代は切り合い関係から古墳時代中期末以降と考えられる。

SP1149 (第 69 図)

調査区東で検出した。SK1136 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1152 (第 93 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.5 m、深さ約 0.2 m である。

SP1154 (第 93 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.25 m、深さ約 0.1 m である。

SP1155 (第 93 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.25 m、深さ約 0.1 m である。

SP1156 (第 69 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1157 (第 93 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.15 m、深さ約 0.1 m である。

SP1159 (第 69 図)

調査区中央で検出した。平面規模は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1163 (第 69 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1169 (第 69 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1170 (第 69 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1171 (第 69 図)

調査区東側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1172 (第 69 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

SP1176 (第 93 図)

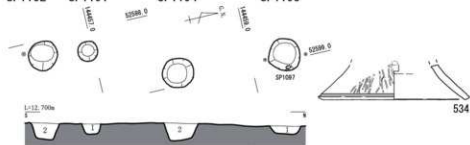
調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m、深さ約 0.3 m である。

SP1178 (第 93 図)

調査区西側で検出した。SP1105 に切られている。平面形状は円形で、直径約 0.1 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 93 図-533 で、弥生土器の高杯で、内外面にハケが見られる。

SP1102 SP1191 SP1194 SP1195

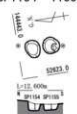


1. 10YR6/1 褐色細砂混じりシルト
2. 10YR4/1 褐色細砂混じりシルト (7.5YR/6 褐色細砂 10% 含む)

SP1152



SP1154・1155



1. 10YR7/1 灰白色シルト (地山ブロック 10%)

SP1157



1. 10YR7/1 灰白色シルト (地山ブロック 10%)

SP1175



1. 10YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロック 10% 含む)
2. 10YR3/1 黒褐色シルト

SP1176



1. 10YR4/1 褐色色シルト混じり細砂

SP1178



1. 10YR4/1 褐色色細砂



SP1129



1. 10YR3/1 黒褐色シルト

SP1144



SP1148



SP1181

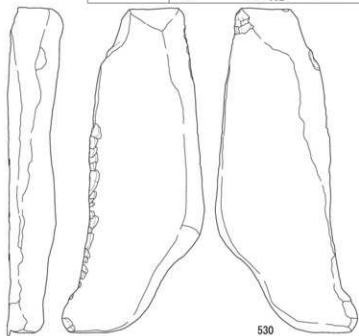


1. 10YR6/1 褐色色細砂

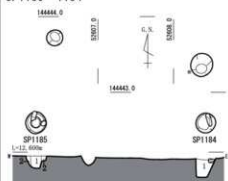
SP1191



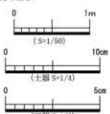
1. 10YR5/1 褐色色シルト混じり細砂



SP1185・1184



1. 10YR5/1 褐色色シルト混じり細砂
2. 10YR3/1 黒褐色シルト混じり細砂



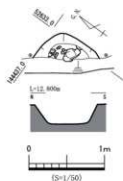
第 93 図 B-2SP 平・断面図及び出土遺物①

SP1192



1. 10YR3/1 黒褐色シルト風じり腐砂

SP1198



SP1199



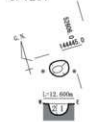
1. 10YR4/1 褐色粘質シルト
2. 地山

SP1200

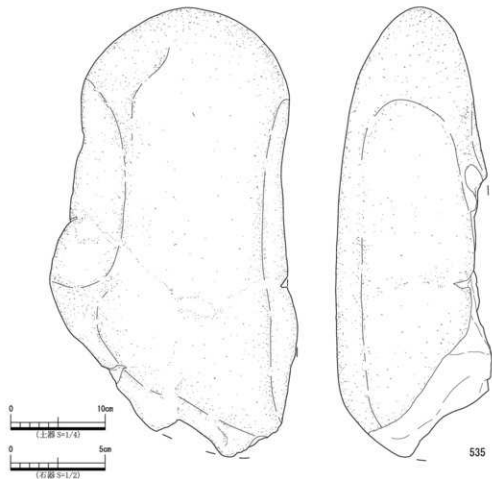


1. 10YR4/1 褐色粘質シルト (地山ブロック含む)

SP1201



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (地山ブロック含む)
2. 2. 0YR/3 に近い黄褐色粘質シルト (地山ブロック含む)



第 94 図 B-2SP 平・断面図及び出土遺物②

SP1179 (第 93 図)

調査区西側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約 0.5 m × 南北約 0.5 m、深さ約 0.5 m である。

SP1181 (第 93 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m、深さ約 0.3 m である。

SP1182 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.4 m である。

SP1184 (第 93 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.3 m である。

SP1185 (第 93 図)

調査区中央で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SP1187 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.3 m である。

SP1191 (第 93 図)

調査区西側で検出し、SH1100 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.3 m である。

SP1194 (第 93 図)

調査区西側で検出し、SH1100 を切っている。平面形状は円形で、直径約 0.4 m である。

SP1195 (第 94 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 m である。

出土遺物は第 94 図-534 は弥生土器の高杯で外面にヘラミガキと沈線 2 条、円形スカシが見られる。

SP1196 (第 69 図)

調査区西側で検出した。平面形状は円形で、直径約 0.2 m である。

図化していないが、土師質土器の杯が出土した。

SP1197 (第 69・70 図)

調査区西側で検出し、東側は調査区外で、SH1100 を切っている。平面形状は円形と推測され、検出した規模は直径約 0.2 m、深さ約 0.6 m である。

SP1198 (第 94 図)

調査区東側で検出し、西側は調査区外である。検出した規模は東西約 0.4 m × 南北約 0.9 m、深さ約 0.3 m である。ビット底面に根石と考えられる石材を多数検出しているが、周辺に対応するビットが見られないことから建物に伴うかどうかは不明である。

出土遺物は第 94 図-535 で磨石である。使用痕が多数見られる。

SP1199 (第 94 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 m である。

SP1200 (第 94 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.05 m である。埋土が薄いことから自然堆積の可能性がある。

SP1201 (第 94 図)

調査区中央で検出した。平面形状は楕円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。

SX1162 (第 77 図)

調査区西側で検出し、北側は調査区外である。検出した規模は東西約 1.9 m × 南北約 2.1 m、深さ約 0.4 m である。

出土遺物は第 77 図-536・537 でいずれも弥生土器である。536 は器種不明で、537 は甕である。

その他の遺物 (第 95 図)

遺構検出時に第 95 図-538 の古式土師器の鉢と考えられるものが出土した。

第 10 節 工事立会時の遺構・遺物

B 調査区から南側と南西側の擁壁部分を対象にした調査である。検出した遺構は堅穴建物跡 3 棟、溝 5 条、土坑 3 基、ビット 15 基である。工事による掘削深度が浅く、遺構の現状保存が図れるものは遺構の掘削を行っていない。



SH1001 (第 96 ~ 98 図)

調査区南西側で検出し、南側は調査区外で SH1002 を切っている。平面形状は方形だが、北東隅は隅丸の形状で、検出し

第 95 図 B-2 遺構検出時出土遺物

た規模は東西約2.8m×南北約2.0m、深さ約0.2mである。埋土は暗褐色シルト層である。上面に焼土粒や炭化物を含んだ層(1.2.4層)を検出し、廃絶後に焼成活動を行った可能性が推測される。

出土土器は第98図-539～541である。539・540は弥生土器でいずれも甕と考えられる。541は石甕で、材質はサヌカイトである。

年代は出土遺物や建物の形状を考慮すると弥生時代と推測される。

SH1002 (第96・97図)

調査区南西側で検出し、南側は調査区外である。SH1001に切られているが、床面が一部残存しており、平面形状は円形になると考えられる。検出した規模は東西約4.3m×南北約1.4m、深さ約0.2mである。周壁溝を検出した。

SH1003 (第96～98図)

調査区南側で検出し、南側は調査区外で、SD1007に切られている。遺構の一部が残存し、平面形状は隅丸方形になると推測され、検出した規模は東西約4.3m×南北約1.6m、深さ約0.2mである。

出土した遺物は第98図-542～547ですべて弥生土器である。542は貼床から出土した甕で外面にハケが見られる。543～545は埋土から出土した弥生土器である。546は壺で内面にヨコハケ、外面にタテハケが見られ、時期は下川津Ⅲ式新相と考えられる。547は製塩土器で内面にハケ、外面全面にタタキが見られる。

埋没時期は546の年代から弥生時代後期後半と考えられる。

SD1004 (第96～98図)

調査区南西側で検出し、南北は調査区外である。幅約1.2mで、検出した長さは約2.0m、深さ約0.1mである。軸方向は南北である。延伸方向にB調査区があるが、連続する溝は検出していない。

出土遺物は第98図-548～551である。548、549は土師質土器である。549は羽釜である。550、551は陶器の鉢、碗である。

出土遺物から近世頃に埋没したと考えられる。

SD1005、1006 (第96・98図)

調査区南西側で検出した溝状の遺構である。延伸方向は後世の掘削等で削平されていると推測される。SD1005は全長約2.0m、幅0.2mである。SD1006は全長約0.8m、幅約0.2mである。位置関係から同一遺構である可能性がある。

出土遺物は第98図-552で、SD1005から出土した土師器の甕である。

SD1007 (第96図)

調査区南側で検出し、南北は調査区外である。幅約2.5m、検出した長さは南北約2.0mである。SH1003を切っている。

SD1008 (第96図)

調査区北東側で検出し、西側は調査区外である。幅にバラつきがあり、0.5m～2.3mの広がりがある。B調査区1面目東側で溝を多数検出しており、いずれかに相当する可能性がある。

SK1009 (第96・98図)

調査区南側で検出した。平面形状は長方形で、東西約0.8m×南北約0.3mである。

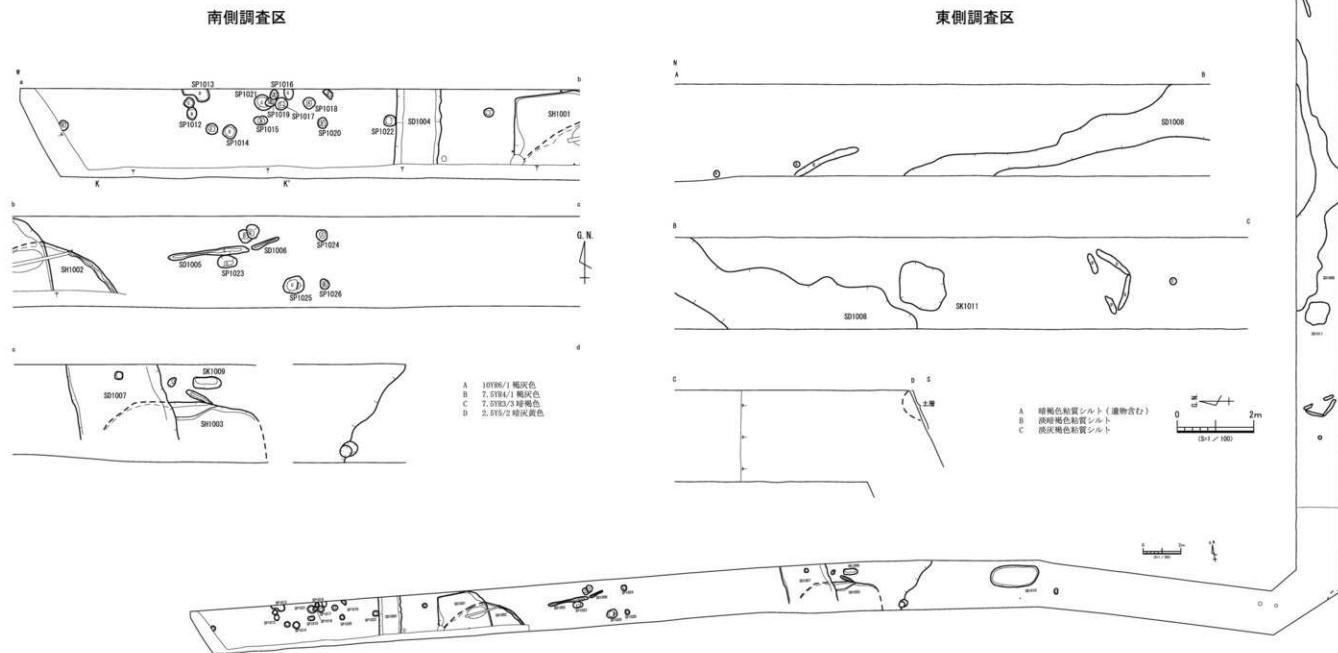
出土遺物は第98図-553で土師器で、外面にハケが見られる。

SK1010 (第96図)

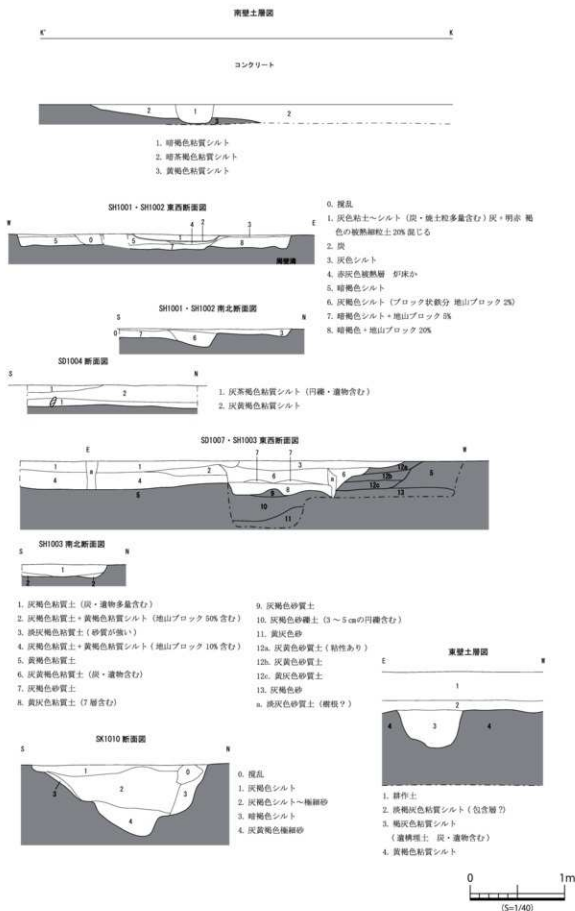
調査区南側で検出した。平面形状は楕円形で、東西約2.5m×南北約2.3m、深さ約1.2mである。埋土は4層に分層でき、灰黄褐～暗褐色のシルト、極細砂である。

SK1011 (第96～98図)

調査区東側で検出した。平面形状は不整な方形で、東西約1.2m×南北約1.2mである。種類は



第96図 工事立会地遺構配置図及び平面図



第 97 図 工事立会遺構断面図

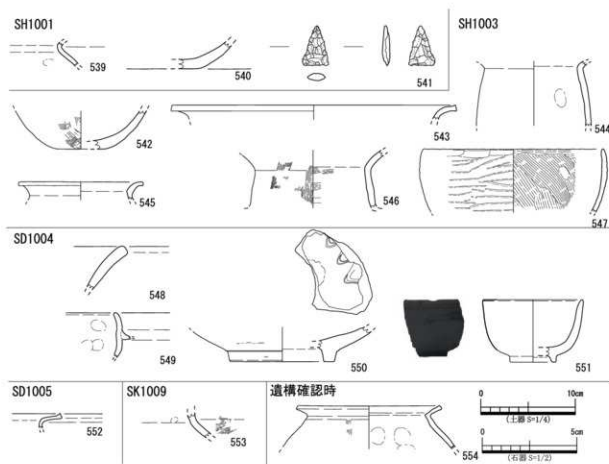
不明だが土器片が出土した。

ビット群 (SP1012 ~ SP1026) (第 96 図)

ビットは南西側に集中して検出した。ビットの平面形状は円形のものも多く、楕円形のものが出で、ビットの規模は直径約 0.2 ~ 0.6 m のものが多い。ビットの配置は不規則であることから建物に伴うものかどうかは不明である。

その他の遺物

遺構検出時に出土した遺物は第 98 図-554、555 で弥生土器の甕と石である。554 の時期は下川津 III 式頃と考えられる。555 は観察表のみの掲載であるが、流紋岩の石製品である。



第 98 図 工事立会出土遺物

第4章 考察

第1節 主な遺構と遺物

本調査では弥生時代後期～古墳時代前期頃、古墳時代中期末頃、古代、中世、近世～近代にかけ幅広い年代の遺構を確認した。その中で、遺構の年代が特定できるものについてまとめていきたい。

1) 弥生時代後期後半～古墳時代前期

今回の調査で最も集落の様相が解明した時期であり、A・B調査区共に多数の遺構・遺物を確認した。特に、B調査区での建物跡が顕著であり、当時の集落城の中心部であった可能性がある。B調査区は1面目と2面目に分け、調査を行ったことを基本土層の説明で行ったが、本来は同一面に展開したと考えられる。まずは、B調査区の竪穴建物跡の切り合い関係や構造等について整理したい。

切り合い関係は主に調査区西側と東側の2ヶ所で建物の重複状況を確認できる。まず、調査区西側ではB-SH1115→B-SH1070の切り合い関係を確認できる。さらに東側で検出したB-SH1101とB-SH1121→B-SH1100の切り合い関係が確認できる。もう1ヶ所は調査区中央から東側にかけての範囲で建物の建て替えが顕著である。切り合い関係から最も古い時期に位置する考えられるものはB-SH1174とB-SH1146が挙げられる。B-SH1174を起点とした切り合い関係はB-SH1166→B-SH1160→B-SH1161→B-SH1141となる。B-SH1146を起点とした切り合い関係はB-SH1146→B-SH1140→B-SH1141となる。古墳時代中期末頃に位置付けられるB-SH1141が切り合い関係の中で最も新しい時期に位置付けられる。

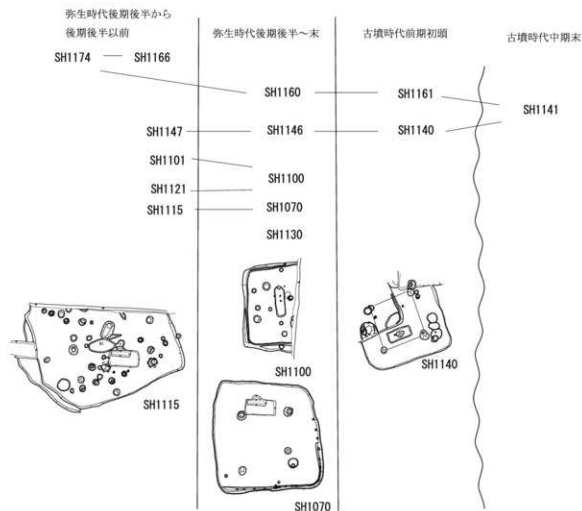
続いて建物の構造について、建物の平面形状と支柱穴（ピット）の配置、中央土坑を中心に整理しておきたい。まず、平面形状は方形・隅丸方形・円形若しくは不整形な方形に分類できる。方形はB-SH1141とB-SH1161・B-SH1146・B-SH1100、B-SH1101・B-SH1121である。隅丸方形はB-SH1140・B-SH1161・B-SH1050・B-SH1070である。円形はB-SH1174・B-SH1166である。

支柱穴の配置は方形と多角形若しくは円形が認められる。本報告にて各遺構の形状を不整形としたものは多角形若しくは円形に支柱穴が配置されたものと考えられる。まず、方形はB-SH1140・B-SH1070・B-SH1050である。多角形若しくは円形であるものはB-SH1146・B-SH1147・B-SH1100・B-SH1115が挙げられる。多角形若しくは円形配置の支柱穴の規模は方形配置のものに比べ小型なものが多い。建物構造と切り合い関係を整理すると、平面形状が円形と支柱穴の配置が多角形若しくは円形配置であるものは古い時期に位置づけられる。一方、新しい時期の建物の平面形状は隅丸方形又は方形の平面形状でピットの配置が方形になる傾向にある。

中央土坑は方形・楕円形・円形の3種類に分類される。方形はB-SH1140・B-SH1161で検出した。楕円形B-SH1050・B-SH1100・B-SH1115で検出した。円形はB-SH1147・B-SH1161で検出した。遺構の切り合い関係を考慮するとB-SH1161で検出した中央土坑は留意する必要があるが、円形→楕円形→方形の順に形状が変化しと考えられる。また、配置場所は円形と楕円形は建物の中央に配置するが、方形は中央からやや南側に寄った位置に配置する。

土器の年代から見る埋没時期や廃絶時期は、弥生時代後期後半がB-SH1050、B-SH1115、B-SH1121、B-SH1147である。弥生時代後期後半～後期末頃がB-SH1070・B-SH1100・B-SH1130である。弥生時代後期末頃がB-SH1160である。古墳時代前期初頭頃がB-SH1140・B-SH1161である。

以上の検討を踏まえ、遺構の前後関係と各建物の埋没時期を整理したものが第99図である。年代は各遺構の埋没時期によるが、切り合い関係にない遺構の併行関係は多少のずれも考慮する必要がある。遺構の年代を把握したうえで遺構の構造を見ると一部の建物を除き、弥生時代後期末以前の建物のピット配置は多角形若しくは円形で、ピットの規模も小型のものが多い。それ以降の建物は方形配置でピットの規格も大型化する。中央土坑も弥生時代後期後半の建物では円形の平面形状で、楕円形までの時期は比較的建物の中央に配置することが多い。一方、古墳時代前期初頭位置づ



第 99 図

B 調査区堅穴建物の前後関係と建物構造の変遷

けられる建物は方形となり、若干であるが中心部より南側に寄った位置に配置すると考えられる。このことから、弥生時代後期末頃に境に、建物構造が変化し、方形基調で中央土坑、支柱穴の配置が規格化すると考えられる。また、一過性であるが、特徴的な建物構造で B-SH1070、B-SH1130 は周壁溝に沿って小型のピット列を検出した。要因は確証を得られないが、壁際に沿って設置した土留め板の固定柱である可能性が考えられる。

次に集落全体の様相について確認しておきたい。

B 調査区の堅穴建物跡は B-SH1141 を除く建物が弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃のものである。また、立会調査でも同時期の堅穴建物跡を確認していることから、B 調査区と立会調査地の周辺に住居群がまとまっている状況であると考えられる。これまでの発掘調査も含めて堅穴建物跡の分布をみると、B 調査区周辺が顕著であることから、この時期における集落域の中心部であったと考えられる。また、土器の年代から弥生時代後期末頃の B-SA1074 に位置付けられる櫛列も検出しており、集落の構成要素の一つと考えられる。

一方、A 調査区では同時期の土坑等の遺構や遺物を確認するが、堅穴建物跡は検出できず、集落の縁辺地と考えられる。また、遺構の年代が特定できるものは限られており、A-SK1023、A-SK2003 等が挙げられる。この頃から埋没が始まったと考えられる遺物包含層からも多くの土器が出土した。

また、弥生時代後期頃の遺構に伴わないものが多いが、特殊器台や特殊蓋が出土している。型式を押しえられるものは少量だが、横方向の櫛描文や突帯が方形であることを考慮すると、向木見型と推測される（第 9 図 - 7）。使用用途は不明だが、吉備系甕が出土していることから吉備地方の交流の中で持ち込まれたものと推測される。

2) 古墳時代中期末

古墳時代中期を示す遺構は限られており、B-SH1141が挙げられる。遺物からTK23・43頃の須恵器が出土していることからこの頃に属する遺構と考えられる。今回の調査では1棟しか確認できなかったがB調査区の周辺で同時期の集落が形成した可能性が考えられる。

3) 古代

古代に位置付けられる遺構はA-SK1003が挙げられる。後世の開削等により年代を特定できる遺構はごく僅かであるが、須恵器や土師器等の古代を示す遺物が一定量出土していることから、この時期の遺構が存在した可能性がある。古代の遺構は西側で行った第1次調査でも溝等の遺構を確認している(高上2010)。また、緑釉陶器が第1次調査と今回の第4次調査で出土しており、希少な遺物が出土している。そのため、平安時代においても、周辺に中心的な集落遺跡が広がっていたと考えられる。

4) 中世

弥生時代後期後半～古墳時代前期に次いで遺構と遺物量が認められる。A-SK1004やA-SK2002等、遺構の年代が特定できるものの時期は12世紀～13世紀前半頃の遺構がほとんどで、前後の時期に位置付けられる遺構もある。この時期の建物跡は検出できなかったが、この時期を中心とする集落が周辺に形成された可能性がある。

しかし、B調査区ではこの溝跡以外に中世頃の遺構・遺物をごく少量でしか確認できていないことから、中世頃の集落はA調査区の周辺で営まれた可能性がある。

4) 近世～近代

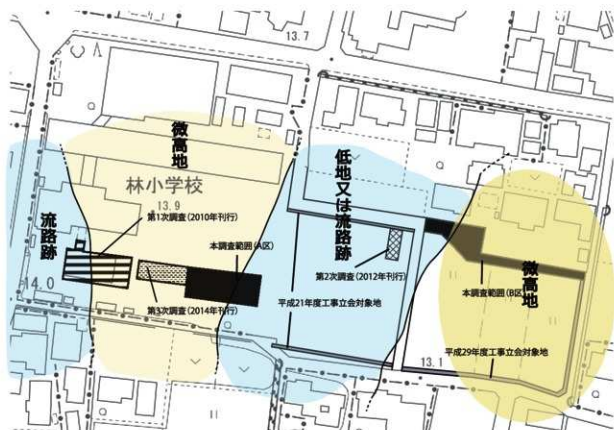
近世の遺構は判然としないが、遺構・遺物をいくつか確認している。B調査区では、近代の遺物を含む溝をB-1調査区東側で多数確認しており、規格性のある配置であることから畠等の生産地としての土地利用が考えられる。また、A-SE1001では18世紀代に埋没した井戸を検出しており、当時の集落の一端をうかがい知ることができる。

近代の遺構はA-SK1012、A-SK1040、A-SX1001、A-SX1002、A-SX1003、A-1004が挙げられる。特に、A-SX1001は文字瓦の年代や陶磁器片から19世紀代末頃の遺構であることが明らかになっている。出土する軒瓦の年代を考慮する必要があるが、文字瓦の年代から現林小学校の前身である下林小学校や山田郡林尋常小学校時に使用したものと推測される。

第2節 林宗高遺跡の旧地形と土地利用について

林小学校の旧地形はこれまでの分析や発掘調査から、埋没旧河道、低地(後背湿地)、微高地(自然堤防)といった旧地形が復元でき、これまでの調査成果を基に林宗高遺跡の旧地形について西側から順に追って述べていく(第100図)(高橋1992, 1～3次調査)。まず、大局的に述べると、旧地形の基盤になる堆積層は第1・3次調査、A調査区では第4図(4a層、4b層)に見られるような灰黄色粗砂や円礫を多量に含む灰黄色粗砂をベースに、B調査区は黄褐色の地山がベースである。これらの標高が高い(微高地)場所に遺構が集中し、窪地や低地に旧河道や遺物包含層が確認できる。

それを踏まえ、西側から順に弥生時代頃の旧地形を説明すると、林宗高遺跡の西側(第1次調査)では、調査区西側に流路跡(SR1)が確認でき、標高の低い箇所が展開している部分と考えられる。この流路跡から東側では自然堤防状の微高地が展開していることが第1次調査、第3次調査、今回の第4次調査A調査区からうかがえる。微高地の範囲は、第1次調査の流路跡(SR1)より東側から第4次調査A調査区中央あたりまで広がる。さらに、この微高地から東側から第4次調査B調査区にかけて再び低地となり、地形が下がる。この低地に第4次調査A調査区で確認した黒色の遺物包含層が堆積した。第4次調査区東側の周辺で井戸や暗渠の排水溝、龍神さん等の水脈若しくは水脈を示唆する施設を確認でき、旧地形を示しているものと考えられる。この低地の堆積層は第2次調



第100図 林宗高遺跡周辺の旧地形

査でも確認していることから、第4次調査A調査区からB調査区の間を南北方向に向かい広がっていたと考えられる。この低地に堆積した黒色層からは弥生時代後期後半頃の遺物を多量に含んでおり、埋没の開始時期を示していると考えられるが、15世紀中頃の遺構・遺物を確認しており、低地が平準化し微高地化するまでに時間を要したことが推測される。

一方、B調査区はA調査区に比べ、微高地であったため、集落の中心となる遺構を多数確認した。微高地の中でも地形の起伏や傾斜があったため、窪地には褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルト（第52図1層、1'層、33層）が堆積した。そのため、前述したように黄褐色の地山上面では弥生時代後期後半～古墳時代中期末頃の堅穴建物を検出しているが、窪地に堆積した褐灰色細砂～シルト、黒褐色シルトを切り込む遺構は古代以降の遺構のものがほとんどである。また、調査区南側に向けて遺構の掘り込みが浅くなることから、人工的な土地の平準化に伴い、一定程度の削平があったと考えられる。

以上のように林宗高遺跡は東西方向で地形の起伏が認められている。弥生時代後期後半頃～中世頃を中心とした時期における居住城の形成はこれらの微高地や窪地に左右され、地形にあわせた居住城や生産城の形成がなされたと考えられ、土地の平準化に応じて居住城となる場所が増加したと考えられる。近世以降の遺構は現在に近い形まで土地の平準化が進み、広く居住城として利用される。土地が平準化した時期は場所によって異なるが、A調査区とB調査区間の低地又は流路跡は近世まで徐々に進行したものと考えられる。

旧地形を復元した上で各時代の土地利用の状況は以下のようにまとめられる。

弥生時代後期後半以前は当遺跡の周辺に自然流路や低地が存在した。その後、弥生時代後期後半頃から土地を選定しながら、集落の形成が開始すると同時に、段階を経ながら土地の平準化が開始されたと考えられる。この段階で、第1次調査で確認した旧河道（SR1）や第4次調査A調査区東側の低地は埋没を開始し、B調査区周辺では既に居住が可能となっており、集落の形成が開始される。その後、土地の平準化は古代においてある程度完了し、微高地となった第1次調査区周辺では

古代の集落が形成される。一方で、A調査区とB調査区の間では土地の平準化が引き続き進行しながら、周辺では中世段階の集落が展開したと考えられる。第4章第3節A調査区基本土層で説明したように、近世になる頃には弥生時代後期後半から中世中頃の遺構・遺物を含む第2・3層が埋没し、林宗高遺跡周辺の土地の平準化が完了したと考えられる。その後、近世の遺構が確認できるようになり、明治時代で現林小学校の前身である下林小学校等が周辺に建設されるようになる。

【引用・参考文献】

- 宇垣匡雅 1992「特殊器台・特殊壺」『吉備地方の考古学的研究（上）』山陽新聞社
- 宇垣匡雅ほか 1992「集成 特殊器台・特殊壺」『吉備地方の考古学的研究（下）』山陽新聞社
- 大久保徹也 1991「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ-下川津遺跡-』香川県教育委員会
- 大久保徹也 2006「讃岐及び周辺地域の前方後円墳成立時期の土器様相」
『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 小川賢・新井場萌 2014『林宗高遺跡』第154集 高松市教育委員会（第3次調査）
- 大久保徹也 2011「土師器の編年②瀬戸内」『古墳時代史の枠組み』同成社
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし-陶器の須恵器』
- 片桐 孝浩 1992「考察-古代から中世にかけての土器様相-」『中小河川大東川改修工事
（津ノ郷橋～博光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-川津元結木遺跡-』
香川県埋蔵文化財センター
- 佐藤竜馬 1995「総括」『国分寺橋井遺跡』香川県埋蔵文化財センター
- 佐藤竜馬 2000「刻印瓦の検討」『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会
- 高上拓 2010『林宗高遺跡』第127集 高松市教育委員会（第1次調査）
- 高上拓 2012『林宗高遺跡』第142集 高松市教育委員会（第2次調査）
- 高橋学 1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査-弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書』高松市教育委員会